祝地域世界農業遺産に纏わる

今昔ばなし

２０２５

祝地域世界農業遺産今昔話承継会

発刊に寄せて

会長　雨宮　正良

私は上岩崎五区西組の専業農家の二代目として生まれ育ちました。以来家業を継いで 70 年。葡萄づくり一筋の人生でした。昭和から平成へと多事多難な時代を生き抜いたことになります。

さて，令和 4 年峡東地域が世界農業遺産に認定されました。真に喜ばしい限りです。私たちでその一翼を担い，守り続けた成果だと自負しています。

この度，峡東地域世界農業遺産推進協議会の補助事業を受けて「祝地域世界農業遺産に纏わる今昔話承継会」を設立し取り組んでまいりました。「承継会通信」を発行し，多くの祝地区住民の皆様の賛同を得て，それぞれの生き様や努力の成果が綴られた冊子ができました。これも一重に皆様の御理解と御協力をいただけてこそのことと心から感謝申し上げます。この冊子が祝地区の郷土誌として活用され，後世に伝われば幸甚です。

なお，50 年前の勝沼広報に「なつかし勝沼 50 年前」をご寄稿された松本良男様ご子息松本良様のご厚意で 12 枚のうちの 6 枚を本冊子に使わせていただくことができました。ちょうど昭和 100 年に当たる本年にふさわしい絵と文を私たちの思い出と重ねて御覧いただきたいと存じます。

鈴木八束　絵

目　次

順番	タ　イ　ト　ル	囲み記事		ページ
	中表紙			1
	発刊に当たって		雨宮正良	2
	目次			3
1	勝沼に来て2年		山田千春	5
2	勝沼みたいな場所が世界中他にあるのでしょうか？		ローズマリー コーディー	6
3	母校の窓から見えた景色　世界農業遺産・峡東地域と私のルーツ		三沢 瞬	8
4	モノづくりの楽しさは変わらない		内田 伸	10
5	町づくりとぶどう園経営と叶えたい夢	2頭立て馬車	里吉一広	12
6	週末百姓とこれから	日川の水を取り入れたせぎ	雨宮茂仁	14
7	高野青年と土屋青年を思う		谷澤糧子	16
8	祖父から父へそして私に引き継がれた仕事	**馬車**	木下聖明	17
9	祖父の思い出から		若林喜久男	19
10	高野家資料について		高野 正興	21
11	農家について思う	葡萄の村歌	齊藤一幸	24
12	中学生フランスボーヌ市友好親善訪問		川崎敏朗	26
13	鳥居焼きと私の人生と		里吉武仁	29
14	金盛園の昔		金井盛一	31
15	勝沼町藤井		小川真澄	32
16	祝地域世界農業遺産今昔話承継会に寄せて		大村春夫	34
17	ぶどう作りのあれこれと石積みの冷蔵庫		齊藤主彦 齊藤真由美	36
18	林業とぶどう栽培に携わって		蒔田啓悟	39
19	あかね色に染まる村		齊藤美代子	41
20	勝沼町民の健康教育に貢献した愛育会と共に	ひなまつり	岡 澄子	43
21	専福寺は明治の大洪水で流されそうになった		雨宮孝信	45
22	人が繋がって祝地区の遺産は引き継がれる		市川史子	47
23	ぶどうと共に生きた亡き父母をしのぶ		雨宮正子	49
24	保育園と小学校時代の思い出と記念樹伐採		川崎 博	51
25	甲州金出土		金井正美	53

順番	タ　イ　ト　ル	囲み記事		ページ
26	はがき絵人生		鈴木八束	54
27	蒼龍の歴史とワインのこれから		鈴木卓偉	56
28	剪定を学んだ巣五六公民館の女性部員と協力者たち		鈴木 かほる	58
29	挑戦するからぶどう作りは楽しい		金井一正	60
30	私の人生のあゆみとぶどう農家のこれから		雨宮安洋	63
31	ぶどう栽培と棚かけ50年		雨宮芳男	65
32	雨の日の辛かった新聞配達	たこあげ	秋山紀勝	66
33	子育ても仕事もボランティア活動も楽しもう	高野八重子先生	川崎阿也免	68
34	自然災害や病気を乗り越え、ブドウ作り一筋		丹沢英一	71
35	果樹試験場同期や先輩に支えられてのぶどう作り		保坂敏彦	73
36	何年たっても心に残る思い出の数々		石原正寿	75
37	農協での初仕事と直撃台風の怖さ		内藤弘茂	77
38	気力と気合いで挑戦し続けて		渡邊 孟	78
39	太平洋戦争が終わって頭に残ること		宮崎充彦	80
40	農業遺産が先々まで引き継がれることが願い	薪取り	土屋恒夫	82
41	忘れられない思い出とぶどうへの思い		若林金蔵	84
42	勝中の援農体験は、いつまでも残したい学び	製糸工場	天野一光	86
43	大泉葡萄酒の歴史と百年先への願い		前田澄也	88
44	葡萄と共に生きる		雨宮正良	91
45	若者が喜んでぶどう作りに取り組める地域づくりを		芹沢福子	92
46	気の合う仲間とえびす会	いつか来た道	坂野武富	94
47	勝沼に生きて、世界農業遺産が引き継がれることを願う		笠原弘子	96
48	いつも気の合う仲間と共に	大島義愛さん	金井和男	99
49	ウイルスフリー苗の普及とシルクロードの旅で学んだ 葡萄栽培		内田利房	101
50	「なつかし勝沼50年前」の絵と文		松本良男様	107
51	祝地区農業遺産関係の歴史			103
52	編集後記		市川史子	108

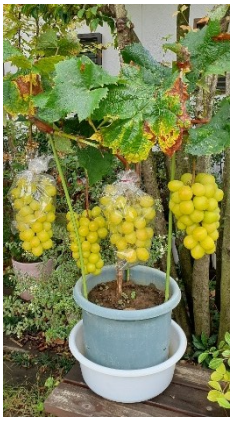
１．勝沼に来て２年

山田　千晴

2022年６月，私の住む福岡のアパートでは，高温でまとわり付くような海風が吹き始めました。その頃，義母から「山梨の家の庭木を切る手伝いをしてくれない？」とメッセージが来ました。山梨には行ったことがないし，泊まる所があるなら安上がりだし，面白そうだと考えました。二つ返事で，翌月には東京行きの飛行機に乗り，義母の送迎で勝沼までやってきました。勝沼インターチェンジを降りて国道２０号を下るとすぐに視界は開け，眼前にはくっきりと見える稜線に高い空，ぶどう棚の緑が目に鮮やかに飛び込んできて，なんと綺麗な所だろうと思ったことを覚えています。それから流れのままに翌年の１月には勝沼の藤井に引っ越して「山梨の家」の家守りをすることになりました。

それから数ヶ月経ち，引っ越しの片付けや荒れた庭の手入れが少し落ち着いたところにぶどうの手伝いをしてみないかと声をかけていただきました。ぶどうの作業を始めてからは，摘粒のやり方を習い実践して，私の心は新しいことを知る楽しみに溢れていました。作業中にはよく『やさしい民俗学』というラジオ番組を聴き流していました。その番組は地域の風習の話が多く，「山梨はお盆が７月だね。」とか，「屋敷神さんを九州で見たことがないよ。」とか，「餅まきの餅は角餅か丸餅か。」，などと随分違う風習を「面白いね。」と笑い合いながら楽しく仕事をしていました。

ラジオで聴いていた民俗学というものは日常の習慣や言葉，信仰，儀礼，経済などの人間の生き方を地域の人から聞き取ったり，資料や記録から読み取ったりして，それがどのように変化しているかを解明する学問だそうです。歴史に名の残らない民間の人々がどのようにしたら生きていけるかと，自分の人生と戦った記録を学ぶのだと感じました。本冊子への寄稿のお話をいただいた時，外から来た人の目から見て祝地域がどのように見えるか，今後どのようになって欲しいかを書いて欲しいと言われ，そうか祝地域の，まさに民俗学の資料を残すのだなと思い書いてみることにしました。



九州の出身の私から見て，ここの暮らしは既に不思議で目新しく，魅力的です。それはこの地に住んでいた昔の人々が，生きていくためには何が必要か考え実行してきた結果です。私達が結果を残すには同じように，自分にできうることを今，一所懸命に実行していくしかないような気がします。私はまず，庭のシャインマスカットを自力で栽培できるようになることから始めたいです。

2．勝沼みたいな場所が世界中他にあるのでしょうか？

ローズマリー　コーディ

初めて勝沼の存在に気づいたのが 10 年前です。父がイギリスから来日していた時に東京を出て長野に向かっている途中,ランチを食べる場所を探していたら原茂ワイナリーが出てきました。なんて素敵な場所だと思って高速道路から降りました。葡萄畑を見下ろしながらご飯食べて，「まさにこんなワイナリーが集まっている緑いっぱいのところが東京のすぐ近くにあるとは。」と思いました。その時は妊娠中でしたのでワインは飲めなかったのですが，甲州ワインは 2011 年の地震後の東京でのチャリティオークションで出会ってすでに興味津々でした。

東京で住んでいた家が賃貸で，都会で一戸建てを購入したり建てたりすることが困難だと見えてきていた中で，そのランチをきっかけに半分趣味で勝沼の不動産を調べることになりました。数年探して何回かいいチャンスが出てきましたが，毎回何かあってがっかりの繰り返し。娘が生まれてしばらくしたら，そうしたら，ちょうど勝沼のど真ん中に空き家がヤフー不動産に出てきました。不動産業者と話に行った時は，近所の方の家で地元の方 4 人ぐらいと集まってお茶やお菓子をいただきました。皆さんが温かく歓迎してくださいました。東京と違って田舎はいろんな義務が出てきますが，大丈夫でしょうか？単なる不動産の取引というよりは，コミュニティの 1 人になる責任だと感じました。

私も主人も田舎育ちで子どものときは都会が憧れだったのですが，大人になって，その自然とコミュニティという人生の基本的な価値の経験をますます大事にするようになりました。それを娘にも理解してもらいたいとも思いました。私も主人も職場と交渉して，コロナ前では珍しかった一部在宅勤務の働き方を許してもらいました。

毎週のように勝沼に週末来て家の建て直しの進捗を見ました。元々の空き家は築 80 年から 100 年程度で主人は背が高いのもあってそのままリフォームして住めなかったのですが，家の骨格となる木材の柱や針は基本的に丈夫だったので，地元の雨宮工務店に,その骨格を丁寧に解体して基礎を持ち上げた上で再利用してもらいました。家の一部の柱が空き家でもすでに再利用されたもののようで一部「3 世代目」の木材とも言えます。

娘が３歳のときにやっと引越しができて今年 10 歳になりました。多くの小学校の友達が，保育園時代からお互いに知り合っていて徒歩範囲に住んでいるので週末には自然に集まります。「田舎って不便じゃない？！」と都会の友達によく言われます。でもワイナリーがあるおかげかカフェやレストランが充実していますし，学校も郵便局も銀行も図書館もコンビニも徒歩範囲です。また夏はすぐに避暑地である山に入って川遊びができたり，冬は車で 20 分のところでスキーができたり，海外からお客さんが来た時はワイナリー巡りができたりする場所が世界中他にあるのでしょうか？

３．母校の窓から見えた景色　世界農業遺産・峡東地域と私のルーツ

三澤　瞬（旧姓　村松）

私は，山梨市で小学校の教員をしている。教室の窓から外を眺めると，校庭が広がり，その先には，その学区の景色が広がる。今の勤務校からは，富士山の山頂の一部が山々の間から顔を出しているように見える。今は，雪化粧した富士山の山頂がのぞいている。様々な学校に勤務してそれぞれの地区の景色を見てきた。その中で，私の心に一番残っている教室の窓から見える景色がある。それは，祝小学校の窓から見える葡萄畑の景色だ。祝小学校は，私の母校だ。

３階建ての校舎。３階の窓の向こう，遠くには，山の稜線がつながり，山から目を落とすと，葡萄畑が広がっている。小学生の時には，当たり前のように見ていたその景色だった。教員になり，学校から見える様々な景色を見るうちに，小学生の時に見た葡萄畑の景色の良さを改めて感じた。祝小学校の窓からは，春から夏にかけて葡萄畑が緑一面に広がり，秋には，山の紅葉と共に，赤・黄など色とりどりの模様が葡萄畑に広がっていた。登下校で歩いた道の脇にも，葡萄畑が広がっていた。祝地区は，葡萄畑がまちの景色の一部となっている。

2022 年 7 月に，峡東地域が世界農業遺産に認定された。認定の理由は，多様な果樹栽培と歴史，伝統的な技術と景観，生物多様性，地域文化が評価されたからだそうだ。甲州市にある祝地区も世界農業遺産の地域の一部となった。私の両親は，葡萄農家で、現在も元気に葡萄を作り，子どもたちに美味しい葡萄を届けてくれている。そんな私の両親が住み，私も多くの時間を過ごした祝地区を含めた峡東地域が世界農業遺産に認定されたことを誇らしく思った。

世界農業遺産認定のことを当時小学生だった娘に伝え，その夏の自由研究の題材にすることにした。世界農業遺産と世界遺産の何が違うのかも初めはわからない中での研究の始まりであった。山梨市，甲州市，笛吹市と３つの市にまたがる農業遺産ということもあったので，３つの市役所の担当の方から話を伺った。当たり前に見てきて果樹畑の風景には，多くの先人の工夫や努力が隠されていることを知った。勝沼地域，祝地区では，実際に地域を歩きその様子を調べることにした。

「ここは，お父さんが，子どもの頃，遊びに行くのによく通った場所だよ。」「葡萄は，江戸時代にもあって，多くの人が訪れていたんだよ。」「ここには，ワインを貯蔵するお蔵があったんだよ。」「この資料館のテープカット

は，お父さんがしたんだよ。」地区を歩きながら，たくさんの思い出を娘に語ることができた。

そして，農業をする私の両親にもインタビューをした。祝地区での農業の歴史に触れ，娘は，祖父の暮らす地域や峡東地域について新たな発見をすることができたようだ。葡萄の時期になると，「そろそろ，じいじの家に葡萄の箱を折りに行こうよ。」と話すようになったので，葡萄づくりのことにも興味を持ってもらえたように感じる。「箱ができたよ。」と実家で，箱作りを手伝う娘の姿を見て自分の小さな頃が思い出され，懐かしくて温かな気持ちになった。

世界農業遺産を娘と調べる中で，小学生の頃に経験した「祝地区知ろう集会。」という行事を思い出した。学年ごとに祝地区の歴史について，調べたことを劇などで発表するものだった。その学習で，小学生の時，私は，隣のおじいさんからこたつを囲んで地区のことを教えてもらったことがある。近所の公民館の大きな木，祝地区の昔の葡萄栽培のことなど，教えてもらうたびに，新たな発見があり,とても楽しかったことが思い出された。娘に話した内容は，その時に教えてもらったこともたくさんあった。私の知っていた地区の歴史は，地域の人たちが教えてくれたものが土台となっていた。それを，自分の娘に伝えられたことを嬉しく思えた。世界農業遺産調べを通して，祝地区は，歴史と伝統がたくさんつまった場所であることに改めて気付かされた。しかし，この特別な風景が自慢の地域にも，高齢化や農家の減少などの課題が見られるという。世界農業遺産の認定を通して，この地域の魅力が広まっていくことを期待したい。

小学生の時に，当たり前に見ていた葡萄と共にあるこの地区の風景は，伝統と先人の知恵がつまった特別な風景であることを世界農業遺産が教えてくれたような気がする。

また，これからの地域を担う子ども達にも，地域の歴史や伝統に触れ，継承してもらえると嬉しいと感じる。私も自分の子ども達だけでなく，教え子た達にも，それぞれの地域のよさを伝え，その良さを一人でも多く感じてもらえるようにしたい。

教師として，いつの日か母校である祝小学校の教室で，世界農業遺産やこの地域の思い出話ができる日が来るといいなと思う。

祝小学校の窓から見えた葡萄畑の風景は，私にとって原風景であり，地域の人々の営みと歴史が織りなす美しい風景だと感じる。世界農業遺産に認定されたことで，その価値が再認識され，次世代へと受け継がれていくことを願っている。娘との自由研究を通して，地域の歴史や文化を改めて学び，祝地区への誇りを改めて感じた。これからも，地域の魅力を発信し，未来へと繋げていきたい。

４．モノづくりの楽しさは変わらない

内田　伸

私は大学卒業後，ソフトウェアエンジニアとして電子計測器と半導体製造装置のソフトウェアの設計開発を行ってきました。定年後に実家のぶどう作りをするつもりでいました。父（知）が 75 歳を過ぎたあたりから体調が徐々に悪くなり，私が畑を手伝う頻度が多くなるにつれて，「いよいよ自分がやらなくてはいけないのか？」と思い始めました。

2019 年 9 月に父が亡くなってから 1 年間は母（雅江）が畑を引き継ぎ，私は週末や有休を取りながら母を手伝うことにしました。これまで父や伯父（保坂敏彦）から剪定等の指導を受けていました。父が亡くなってからは，ぶどう作りのポイントを母，伯父から改めて教えてもらい，経験を積みました。

2020 年 12 月に会社の早期退職制度を利用して退職し，翌年 1 月から完全就農となりました。退職時，会社から「農閑期はソフトウェア開発を続けないか？」と提案されましたが，会社員（兼業農家）という逃げ場を造らず，代々からの畑を守り，美味しいぶどうを作ろうと覚悟を決めました。

先代の仕事をベースにしつつ，他と差別化できるぶどうを作るため，会社員時代に覚えた仕事の仕方やノウハウをぶどう作りに生かそうと考え，経験をベースにデータや数値を栽培に取り込みました。まず就農 1 年目は，OJT（実際の業務を通じて行う教育）と位置づけ，教えてもらったことを 2 度 3 度と聞かないようするため，作業をすべて記録しました。この記録は今も付けています。また，毎日の気象データ，作業の進捗，ぶどうの成長も画像として，パソコンに保存しています。これらデータは，今後大いに役立つはずと考えてきます。

父が栽培しているころは，直販（送りぶどう）も行っていましたが，主に共選出荷がメインでした。私は，利益拡大は直販が有効と考えたので，ホームページを立ち上げ，ここにオーダーフォームを置き，宅配送り状へ読み込みまでできる仕組み

を自作しました（会社員時の知見が活かせました）。また，ロゴ（トレードマーク）をデザイン，オリジナルの送り箱やホームページに採用し，このロゴは内田さんというイメージづくりを行いました。

さらに，SNS を活用し，お客さんが安心してぶどうを口にできるよう「いつ，どこで，だれによって，どのように作られたのか（トレーサビリティ）」を年間のぶどう作業を通して，その都度発信しています。県外のお客さんの中には，ぶどうは植えてすぐ実がつくとか，一年中ぶどうがなっていると思っている人がいて，「こんなに苦労して作っていると思わなかった。値段が高いのも理解できる。だからぶどうは高級なんですね。」と納得してもらえます。このような言葉をお客さんからいただき，その笑顔を思い浮かべると本当にやりがいを実感できます。「内田さんの作ったぶどうが食べたい。」と言ってもらうようなぶどうを作りたいと思っています。

また SNS は，お客さんだけでなく，全国のぶどう作りの仲間とも繋がることができます。新しい資材や農機具，栽培方法等の多くの情報が入ってきます。

農繁期，会社員時代の仲間が手伝いに来てくれることがあります。房づくりからジベ，摘粒，袋掛け，笠掛けといろいろな作業を手伝ってもらいますが，「すごく疲れた。」や「楽しいね！」や「また来年もぶどう作りしたいから連絡くださいね。」と農業に興味を持つ人もいて，会社では見えなかった意外な一面を見ることができます。作業した房にその人の名札を付け，収穫時，数房をプレゼントすると，すごく喜んでくれます。

現在，温暖化により高温多雨による気象変化，生理障害，病害虫は，以前よりぶどう作りに影響しはじめており，品種や栽培技術の転換期にきていると考えます。温暖化にどう対応し，どのように品質を保つかなど問題の解決を考える必要があると思います。山梨県や他県の果樹試験場のホームページから研究成果報告のレポートを読んだり，農協の指導員と会話したり，前述の SNS やインターネットからの情報と併せて，自分に有効なネタなのか，そうでないのかを見極めながら，解決のヒントを探しています。

ぶどう作りは，就農前に想像していたより体力的にも精神的にもキツイものでした。少なからず失敗もあり，さらに勉強することがたくさんあると感じています。しかし，会社員時代の製品開発と本質は同じであり，モノづくりの楽しさは変わりないということを感じながら，日々取り組んでいます。

５．町づくりとぶどう園経営と叶えたい夢

里吉　一広

勝沼町役場に勤めていた頃，農業土木関係の仕事に携わりました。田園空間整備事業の担当の時は鳥居焼の整備で，急な山の斜面を階段にして，祭りの夜，松明を手にした中学生たちが安全に登れるようにしました。ぶどう畑や文化財を眺めながら歩くことを楽しむ「フットパス」に係わる祝地区の農道の整備にも関わりました。専福寺の裏手から日川に下る道もそうです。どれも町づくり関わることで充実した毎日でした。辞令と同時に少年野球の監督を仰せつかり，子どもたちと楽しく活動することもできました。

45 歳の時退職し，高齢になった父母が営むぶどう園の仕事を継ぐことにしました。それは，父母が築いた大事なお得意さんとの結びつきは一度失うと決して取り戻せないと考えたからです。

「農協出荷でなく，自分で作ったぶどうは自分で売りたい。」という嫁いできて少し経った頃の母の願いから父は宅配を始めました。知り合いや親戚を通じて少しずつ増やしていきました。勝沼醸造のお客さんでぶどう狩りをしたい人をうちが引き受けることになり，机一つの観光園も始まりました。この方たちの宅配も年々増えました。

私は，ダイレクトメールで，お得意様にお知らせを配付します。インターネットは，それで終わりというか，長続きしないように感じます。父は立ち毛品評会で入賞したことのある熱心なぶどう栽培者なので，おいしいという確かな口コミが広がって，うちのぶどうを毎年買っていただいていると思うからです。

ぶどうは気象に左右されるので，常に研究心がなければおいしいと言ってもらえるものは作れません。巨峰は残しますが，新しいぶどうに植え替えることも大事で，富士の輝き・マスカ１３・サンシャインレッド等新品種も取り入れています。それぞれの栽培方法は違うので難しく悩むこともあります。

15 年前，雨に弱い「甲斐路」が腐って畑に埋めて処分したことがありました。「もったいない。まだ食べられる粒は干しぶどうにしたらどうだろう。」と考え，取り掛かりましたが失敗の連続でした。

10 年前今までの製法にある一手を加えた所成功し，勝沼朝市などで販売してみ

ました。乾燥に燃料費がかかり，一粒一粒扱う作業は人件費もかかります。一袋百ｇで千円を超える値段では，手に取ってくれた人はほんのわずかでした。そこで小袋にして，袋のデザインを書家の志村先生にお願いしたところ，売れ始め，一度味を理解してもらうと評判になり，今では９月から販売して６月には売り切れの状態です。

退職した後９か月，職業訓練として長坂の農業大学校で学びました。仲間は２０代から 50 代で県外出身者が多かったです。新規就農に成功した仲間もいますが，耕作地の確保ができず，もがいている仲間，ほぼほぼ断念するしかないと諦めかけている仲間が大勢いるのが，現実です。

私の将来の目標は，希望を持って山梨に来た人たちの手助けです。後継者不足などで農業をやめる方がいても，ほとんどの人は信頼のおける方や知り合いに貸すのが現状です。私が地域での信用を得て，耕作地を借り，彼らに働く場を提供し，経験を積んで育ったら独立して勝沼と言う地に根付いてもらうという，大きな夢です。

今から 50 年ぐらい前，甲府に行くには勝沼駅まで歩いて汽車で行くか，自転車で行くか，乗合馬車でいくかに限られていた。

私は弟と毎年のように父に連れられて甲府市制祭に乗合馬車で行った。乗合馬車の出発は上町の叶屋前からで，御者は辰造おじさん。辰造おじさんは真鍮製のラッパを吹いて馬に励みを与えながら，お客さんを 7，8 人乗せて甲府へ向かって出発した。乗合馬車の料金は甲府まで大人５０銭，子どもは，半額の２５銭だった。私たちは菓子を食べながら甲府まで約２時間半，カッポカッポの馬の蹄の音を心地よく楽しんだ。（途中略）　母が提灯を下げて迎えてくれたことも懐かしく，勇壮な２頭の馬蹄のひびきも忘れられない。　　昭和５０年 10 月 5 日

松本良男「勝沼のいまむかし絵物語」より

６．週末百姓とこれから

雨宮　茂仁

３年前，父が病で倒れてから私の週末百姓生活が始まりました。平日は東京で企業イベントの仕事をしています。学生時代の私には農業は人生設計の中に全く存在しませんでした。田舎を離れて都会生活をすることしか考えられませんでした。

あの頃はいつも東の空を眺めて都会への憧れを抱いていた事を今でも覚えています。

結婚して，子どもが生まれ，父母は子どもたちをかわいがってくれました。そんなおじいちゃんとおばあちゃんが大好きな子どもたちを連れて妻が勝沼によく来ていた時も，私は同行しなかったことが度々でした。東京に出る直前に一度父が「山梨で就職しないか。」と言ったことがありました。それを拒否した自分を私はしっかり覚えています。中途半端なことはできません。今思うと，田舎を嫌って離れた勝沼に意地を張って，避けていたのかもしれません。

父の病がきっかけで土日百姓を始めると，うちの畑の隣で畑仕事をする専業農家の幼馴染がすぐ声をかけてくれました。近所の方々も声を掛けてくれて，「ああしたらいいとか，こうしたらいい。」と親切に教えてくれます。そんな方々のアドバイスを基に今何をすべきか日々判断しながら，週末という限られた時間を無駄にしないよう百姓仕事を続けています。

時々，会社で週末にぶどう作りをしている話をしている自分は，昔と変わったなあと感じます。

父・茂男が亡くなり，母一人だから心配ということは無論ありますが，ぶどう作りの魅力に掴まり，日々愛する我がぶどうが心配で土日に足を運んでいるのが本心です。人に血が流れ生きているように，ぶどうの樹は樹液を流し生きています。遠い先祖から受け継がれたぶどうを愛する DNA が私の血液の中にあり，都会に出たかった私は，無意識にその DNA が私の脳内で活発化するのを恐れて勝沼を避けていたのかもしれません。

「素晴らしい景色を見ながら，ぶどう作りに携わっていきたい。」

「自分の代で『ぶどう作り』を終わらせたくない。」

「今の仕事が一段落したら勝沼に戻りたい。」

という強い思いを家族は理解してくれましたが，妻や子ども達にはそれぞれの夢や仕事があるので無理に勝沼に移住する必要は無いと思いつつも，母がこれから年を重ねて介護が必要になったら「私にぶどう作りと介護が一人でできるだろうか。」と不安になる時もあります。

これから覚える事も，クリアしなければならない課題も山ほどありますが，一日でも早く週末百姓を卒業し毎日百姓として，亡き父が守ってきた先祖代々からの畑を私も守っていきたいと思っています。

世界農業遺産の景色と人情に厚い隣人たち，美味しくて美しくてまるで芸術作品のようなぶどうがこの岩崎にはあるのだから。

日川の水を取り入れたせぎ

町屋せぎ，野呂せぎ，矢作せぎです。左岸の太郎せぎと町屋せぎは祝地区で使う水を供給してきました。

太郎せぎは，太郎橋少し上流が取り入れ口で水無し扇状地の祝地区の農業と製糸業にはなくてはならない水でした。新道わきのせぎには水車がいくつもあったそうです。昭和初期まで，祝5区にも水田があったと笠原弘子さんから伺い，時々見る沢カニの住む太郎せぎの偉大さを改めて知しました。

次郎せぎは，祝橋下の日川右岸勝沼側が取り入れ口で，護念寺の下から池田医院，等々力を通過して小佐手に水を供給します。伏木神社に江戸時代の古文書が残されていて，水利権は小佐手にあることが分かります。一年に一度区長さんたちが証文と絵図を改め，捺印して又保管する儀式があります。

町屋せぎは，祝橋あたりから水を取り入れ，昔は 5 区を通り，4 区の専福寺の裏から 3 区に水を十分供給していたと 4 区の志村栄一さんが，孫にあたる志村良彦さんに話していたそうです。専福寺が明治 40 年と 43 年の洪水で流されそうになった時，何件かの家と田畑と共に町屋せぎの一部は流されてしまい，その部分を修復しなかったので，今は 3 区に水を供給できていないようです。今の町屋せぎは祝橋下の取り入れ口から河原のブドウ畑の間を流れ，メルシャン勝沼工場の下から野呂せぎに合流します。野呂せぎはメルシャン勝沼工場から少し上流で取り入れ，北野呂･南野呂に水を供給しています。矢作せぎは，ぶどう橋と野呂橋の中間あたりのメルシャン勝沼工場の下の日川左岸から水を取り入れて，上矢作，下矢作に水を供給しています。

文責　市川史子

7．高野青年と土屋青年を思う

谷澤　糧子

明治 10 年，現在甲州市勝沼町下岩崎の大日本葡萄酒醸造会社から派遣された高野正誠青年と土屋龍憲青年が師事したシャルル・バルテ氏の旧邸宅を見学した。『ここで二人はワイン作りを勉強した』と言われている建物は，老朽化のため中には入れなかったが，中庭から建物の様子を見学し，末裔の方のお話を伺った。

建物を見学しながら，ここで勉強した彼らのことに思いを巡らせてみた。言葉があまりよく分からない中，ワイン作りを身に付けて帰らなければならないという大きな使命を持っていた二人は，どんな思いでこの中庭の木々を眺めたり，どんなことを考えたりしながら暮らしていたのだろうか，などと思いめぐらせた。とても心細く，苦しい日々があったのではないかと考えると，その古い建物もとても愛おしいものに感じられた。

そこから，車で十数分くらい離れた丘の上にあるクロ・サント・ソフィー農園へ移動し，二人が実際にワイン作りをした所を見学した。まず驚いたのは地下室を見学した時だった。形や雰囲気が，勝沼にある「龍憲セラー」にとてもよく似ていたからだった。斜面を利用した半地下，トンネルのようなつくりは「龍憲セラー」と同じであった。彼らが日本に帰ってから地下室を造る時にここを思い浮かべて造ったに違いないと思った。

そして，地下室の上にある醸造場所を見学した時はもっと驚いた。なんと，勝沼で見た高野青年と土屋青年のスケッチに描いてあるのと同じ，本当にそっくりな圧搾機が置いてあったのだ。聞くと 150 年前の物という。たしか，高野青年と土屋青年がここにいたのは 130 年前などで，彼らが使って実習した機械に違いない。これを使ってワイン作りの実習をしていたのだ。勝沼で見た圧搾機の精密なスケッチを思い出し，「使った機械を持ち帰ることができないのなら，精密なスケッチを持ち帰って日本で作らなければ。」と言う使命感を強く感じた。その後勝沼では，彼のスケッチを基に圧搾機が造られ，昭和まであちこちの会社で使われていたことを思うと，改めて二人の功績に感動を覚えた。クロ・サント・ソフィー農園の醸造所の圧搾機を見ながら，また，二人のことに思いを巡らせた。

甲州市の中学生のボーヌ訪問は，彼らにとって強く心に刻まれた，一瞬のできごとのようでした。随行者の私にとっても，訪問を終えたあとは，とても強い風に吹かれたあとのような感じがしていました。

ボーヌ市訪問で強く心に刻まれたことは，みんなの心の奥で何か行動を起こす時のエネルギーになったり，方向を示す磁石を動かす力になったり等，きっと何かの基になるはずです。訪問団のみんなが，それぞれの道で活躍することを期待しています。

※「平成 23 年度甲州市中学生フランスボーヌ市友好親善訪問団訪問の記録」から谷澤糧子先生の許可を得て転載させていただきました。

８．祖父から父へそして私に引き継がれた仕事

木下　聖明

祖父は，初め銀行に勤めたようです。その銀行を辞めて，製糸工場を営みました。太郎せぎの水で水車を回し，動力に利用しました。大正時代は祝村内に一番多い時で２７件ほどの製糸工場がありました。祖父は女工さんを雇い，甲斐絹のタテ糸を製糸していました。しかし，国内は和服を着なくなったこと，ナイロンと言う化学繊維が登場して輸出が不振になったこと，戦争下の統制などで，工場を閉めることになり，「木下馬車屋」を起こしました。

馬を飼い，初めのうちは馬にぶどうのかごを積んで，甲府に運びました。帰りは，目印の旗が上がっている家から荷物を預かる運送業です。そのうち運ぶ量の増加で，馬に荷車をひかせる馬車になりました。中央線が開通すると，ぶどうの運ぶ先は勝沼駅になりました。昔は各区に共選所があり，それらを回ってぶどうの竹かごや木箱を集めたそうで，時間もかかったようです。つまり，５区のぶどうは，うちのところの小さい共選所に集まり，馬の背や馬車で運びました。

おじいさんは，努力した人だと思います。「ないから，やるじゃん。」と言う気概のある人でした。それでも，製糸工場がつぶれた時は，祖父も含め祝村中大変だったろうと想像できます。そして，桑畑がぶどう畑に変わりました。

昭和３０年頃，父の時代になって，トラック輸送になりました。やはり集荷に時間がかかり，祖母と母が作ってくれた晩飯を食べてから出発して，夜間運転をして朝の競りに間に合うように市場に届けました。東京の市場出荷だとその日のうちに帰れましたが，横浜や横須賀へは，日帰りは無理で相模湖で寝て帰ってくるパターンでした。その運搬に連れていかれた時，父は運転席と助手席に横になって寝るのですが，私は足元に寝るのでエンジンの熱で暑くて寝られなかった思い出があります。

東京オリンピックに向けて，道路や鉄道が整備され，飛躍的に便がよくな

松本良男様の「勝沼のいまむかし絵物語」百年前の勝沼を描いた絵です。祝橋はつり橋でした。めがね橋と呼ばれる祝橋は，1931 年完成です。中央線が甲府まで電化したのも同じ年です。ですから，この絵はその少し前の汽車にのせるぶどうの運搬でしょうか。

りました。それに伴って，共選所も統合され，下岩崎と上岩崎，藤井になりました。雨宮正良さんに伺うと，金井儀三郎さんに土地を譲ってもらい，小さい６区の共選所が，今の広さの上岩崎共選所になったそうです。

父は「馬はかしこい。」と言って大事にしました。草競馬に出場したこともあったそうです。

母さゑ子はブドウ作りが好きで，父と一緒によく畑仕事をしていました。５区の女性部の皆さんと共にぶどうの研究会やいろいろな講習会で学びました。農協の講習会も欠かしたことはありませんでした。１９７８年（昭和 53 年）の火祭りの時，父母が立ち毛品評会甲州ぶどうの部で最優秀賞をもらい表彰されたことは我が家の記念すべき出来事でした。

我が家の運送業は人から人へ物を運ぶ仕事ですので，母は影響を受けたのか，人と人をつなげる世話好きでした。今だとおせっかいと言われるかもしれませんが，物と物はつなげる人がいないと人は生きていけません。人と人を繋げることが，これから一番大事ことかなと思います。

昭和54年2月10日発行　広報かつぬま

53年度立毛品評会

最優秀農家に聞く

今年のぶどうづくり

第二十三回立毛品評会で、最優秀賞に輝いた甲州種の部木下二さん（上岩崎）と、デラウェア種の部大沢忠義さん（等々力）に、昨年をふり返っての感想と、今年のぶどうづくりの方針などを伺いました。みなさんの経営と比べてみてはいかがですか。

甲州種の部　木下二さんとさえ子さん（上岩崎）

――経営面積は

全体で約七十アールです。品種別では、デラ三十五アール、甲州二十五アール、ネオマス、ベリーA、巨峰が合せて十アールです。

――昨年の干ばつの影響は、

甲州だけは、三日間ほどでしたが、早くからたっぷりかん水をしました。

今年のつるは、昨年のかん水の時期が良かったのか、いつもの年と変わりありません。

――今年の経営方針は

ここ二、三年やっと自信の持てる甲州ができるようになりましたので、今年も甲州に重点をおいていきます。

――施肥や消毒はどのように

有機質肥料を多く入れています。昨年のお礼肥えは、動物性の有機質肥料（動物有機一号）を反当り一・五トン入れました。

消毒は、以前いろいろと失敗しましたので、農協の防除暦のとおりに行っています。今年も同じ方針です。

――収量調節は、

甲州はほとんど生食用ですから「うまい」といわれるように徹底した収量調節をしています。このところ木もおちついてきましたので反当二千二百㌔を目標にしています。

――栽培上のポイントは

毎年、着色、着粒、味を良くするために誘引、摘房、摘粒など時期のポイントを逃さずに作業を進めていくことにしています。

昨年は甲州の摘粒をしました。今になってみると摘粒を行ったことが良い結果につながったと思います。

「それにちょっとしたことでもすぐに近所や農協で聞いて来るんです。ですから、農協の講習会は、欠かしたことはありません」――とはさえ子さんの話

――味なし果の対策は

現在は一本もありません。それにこのほど甲州種一本が優良母樹に指定されました。

十四年前、父から受け継いだときに成木を全部切り、畑を掘り起こし新しく苗木を植え替えました。それからは味なし果と思える木がみつかったとき、すぐに切るようにしました。

今、農協や研究会などが優良苗木の普及活動を進めていると聞いていますが、これから勝沼で甲州を栽培していくには、一日でも早く良い苗に切り替えることが大切ですね。

――昨年をふり返って

異状ともいえる大干ばつでしたが、有機質の投入によくりをして来たおかげでほとんどありません。

――土づくりはどのよ

栽培面積は、合計で九りますが、十年ほど前かんど化学肥料を使って

昭和 54 年 2 月広報勝沼より

９．祖父の思い出から

若林　喜久男

私の大好きだった祖父の話をしよう。一番古い農業の記憶は，祖父のボルドー液散布の手伝いである。それは，タンクに入っているボルドー液が沈殿しないように棒でかき回す作業である。当時，農薬散布は動噴で行っており，どこの畑にも，入口付近にコンクリート製のタンクが置いてあったものである。SS が普及し始めたのは昭和 40 年代後半頃からである。使われなくなった今でも我が家の畑には置かれたままで，祖父との思い出とともにブドウ栽培の変遷を物語っている。

曾祖父の時代には製糸業を営んでおり，祖父と同年代のお年寄りが，祖父のことを「機械のおじさん」と呼んでいたことも記憶にある。時代背景もあり，製糸業は大正時代に倒産となり，その後，祖父の時代になり果樹を中心とした農業をはじめたようである。岩崎にもいくつかの製糸屋があり，その後ワイナリーになったところも少なくないと聞いている。祖父は，ブドウだけでなく，オウトウ，ホップの栽培，そして水田もありと何でも作っていた。我が家の畑の字名には，前田，狭間田，半内田と田のつく地名が多く，畑も水路に面している。大きな河川がない扇状地において，その昔はコメのできる場所はきっと一等地であったろう。戦時中は食糧であるコメ作りが推奨され，祖父はコメ作り，供出に精を出していたようだ。

そんな祖父は，いわゆる篤農家であり，昭和３７年にはネオマスカット品評会で最優秀を頂き，今も我が家の座敷の長押の上に，農林大臣河野一郎からの賞状が飾られている。その当時は，県内はもとより，福島県からも何年か続けて視察に来ていた方もおり，手土産は決まって紙箱に入れた温泉卵であった。確か佐藤さんという人であった。

祖父の乗り物は，今や絶滅した通称「バタバタ」である。バタバタというと本田宗一郎作の原付が有名だが，この辺では，前輪・ハドル部分はオートバイからの流用，これに座席と荷台を溶接した三輪車である。昭和２０年代後半から４０年代半ばにかけては，畑への移動，運搬に欠くことのできない存在であった。余談であるが，甲府の宮崎鉄工所製のものは有名で，マニアな若者がネットに動画をあげている。どこかに眠っている車両があったら大切に保存して欲しい。

そして懐かしい写真の一つに，祖父と私の姉と山本富士子（女優）の３人で写っている写真がある。昭和３４年に，「いつか来た道」の映画のロケが行われ，藤井の周辺でのロケや祖父の家を模したスタジオセットで撮影が行われ，その時に撮った一枚である。残念ながら私は生まれたばかりで写真には入っていない。その後，祝小学校に在学していたときに，講堂でこの映画を見る機会があった。祖父の家の周りや未舗装の道路，ボンネットバスなど当時の藤井の様子が記録された貴重なフィルムである。

私はというと，農業をするつもりで大学は農学部へ進学したものの，大学２年の春に祖父が他界し，卒業時に，大学の先生の勧めもあり数年のつもりで就職した。しかし，卒業した秋には父も他界し，図らずも６０歳の定年まで勤めを続けることとなった。この間，母一人となり，勤めに専念するため順次畑を貸して，家の前と２枚ほどの畑にて手のかからない甲州種を栽培する状況が３０年ほど続いた。そして退職を機に，貸していた農家さんも高齢になったこともあり，畑もほぼ手元に戻り，農業中心の生活を始めた。その時の心境は，退職後の第二の人生というよりは，自分の本来居るべき場所に帰ってきたと感じたものである。幸いなことは，勤め先が農業高校で，多少なりとも農業に関わっていたことであり，そこでの経験を少しでも役立てたいと思った。

今，自宅の畑 1.1ha に加え，石和にある姉の嫁ぎ先の畑も 30ａほど何とか管理している。そんな多忙な中，新しい取り組みとして，ブドウのオーナー制度を導入している。退職時に植えた短梢仕立てのベーリーＡＩ００本を利用した取り組みである。オーナーさんは，年に３回，５月に房作り，６月に傘かけ，９月に収穫を行う。収穫したブドウはワイナリーに持ち込み，委託醸造をお願いし，出来上がったワインをオーナーさんへお届けする取り組みである。はじめて３年目が過ぎ，現在３０名の方が参加している。東京，神奈川在住の方で，渋谷の割烹料理店やフレンチのオーナーシェフ，バレー教室を主宰している人，香港在住の CA さんなど様々な職業，経験を持った方との交流は楽しみとなっている。農繁期に週末援農に来てくれる方もいて，オーナーさんを通して農業の魅力を再確認している。

今回，久しぶりに山本富士子さんの写真を見ると，写っている掛け軸が，なんと今も我が家の床の間に掛けられていることに気づき，歴史の連続性を感じた。私も，次代に繋げていけるよう，これからもブドウづくりに励んでいきたいと思う。

10. 高野家資料について

高野　正興

下岩崎に設立された「大日本山梨葡萄酒会社」は，資金を集め，ブドウ醸造技術を学ばせようと 1877 年（明治 10 年）10 月 10 日，祝村から 2 人の青年をフランスへ旅立たせた。

直前に株主だった高野正誠（当時 25 歳）と土屋助次朗（後に龍憲に改名，当時 19 歳）である。帰国後の 79 年，約 2 万 7000 ℓの勝沼産ワインを造ったと記録にある。90 年に刊行した醸造技術書「葡萄三説」は，第一説で「なぜ，葡萄園を開設すべきか。」と問いかけるなど，“ワイン王国山梨”の黎明期の扉を開けた。

高野正誠肖像

パリ万博へ政府が派遣した前田正名に 2 人は同行し，横浜港から船で渡仏した。

1977 年 10 月 10 日に出港し，当初，研修は 1 年の予定だったが，秋のブドウ収穫からワインの仕込み期間が見られないため，自費で半年延長した。2 人はまず，国際的に著名な植物学者だったシャルル・バルテをシャンパーニュ地方南端のトロワ市のブドウ農園に訪ね，ブドウ栽培法を学びました。次に，モーグ村にあるピエール・デュポンの試験農場でワイン醸造の研修を受けた。ゼロから学べば数年かかるところを 2 人はすでに基礎知識があったため，短期間で学べたのだろう。

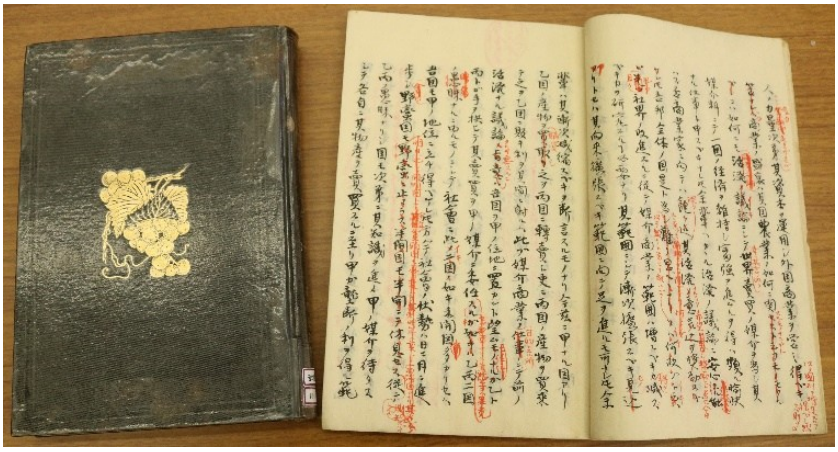
大日本山梨葡萄酒会社の株

シャルル・バルテ

1979 年 5 月に帰国した。まず，ブドウの圧搾機や発酵設備など生産設備を整え，試行錯誤を重ねた。多分，1 回では造れなかったのではないか。しかし，この年に「甲州種ブドウ」を使った初の国産ワインを造った明治期の会社は，創業 5 年で存続の成否を決めていたそうで，株主の採決を取ったらやめるこ

とになった。利益を優先する株主が「やめる。」としたのに対し，正誠は「会社は技術を創っていかねばならない。」などと対立したようで記録が残っている。結局この会社は 86 年に解散した。

葡萄三説の口絵　上野一雲

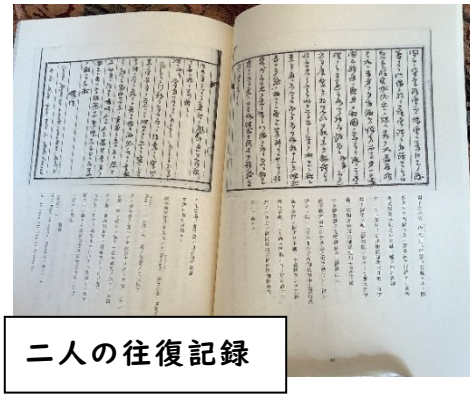


「大日本山梨葡萄酒会社」と平行し，自身の醸造所でもワイン造りを続けていた。正誠はワイン醸造の研究を重ね，伝習生に教えながら，その成果とノウハウの集大成として，帰国から 11 年後の 1890 年に「葡萄三説」を著わした。内容は題名の通り，「葡萄園開設すべきの説」「葡萄栽培説」「葡萄酒醸造説」の 3 部構成である。

勝沼は水はけが良い扇状地で稲作には適さないが，ブドウ栽培には適している。だから，ブドウ栽培で地域を潤おそうと考えた。そして，ブドウ栽培をワイン醸造につなげ，地域振興の手段とした。「ワイナリーのためにブドウを栽培しなければいけない。」と考えた。

明治新政府も藤村県令や官僚の前田正名も，ワイン産業を殖産興業政策として推進し，第一説にはその考えが記されている。原稿草案には赤字が多く入っているが，これらは前田が添削したもの。葡萄三説は前田の国家観に立った考え方の影響を強く受けたものと思われる。

葡萄三説の発行部数は 2000 部だった。実は富士北麓にブドウ園を造る計画があり，葡萄三説を持って協賛金を募り，2000 円の資金を集めようとしたが，届かず諦めた。桂太郎総理の弟で親交のあった桂二郎氏やパリ万博副総裁の松方正義氏も協賛してくれたのですが…。



二人の往復記録

しかし反響もありました。農林水産省からきた「話を聞かせてほしい」いう内容のハガキが残っている。講演依頼もあり岡山や新潟など山梨県外へも行かけた。一方で，マスカット・ベリーＡの生

みの親として知られる新潟の川上善兵衛も，勝沼に来て正誠と土屋龍憲から，ブドウ栽培とワイン醸造の技術を習った。

この狭い地域に多くのワイナリーが生まれ，ワイン産業が発展する礎を築いた正誠と龍憲は祝住民の誇りであり，二人をフランスに派遣した会社の株主たちも立派である。また，ぶどう栽培を学んできた二人の貢献は，岩崎一帯にブドウ畑が一面に広がることからも窺われる。この風景を見ていると，人々が長い年月をかけ紡いできたぶどう，そしてワインとの尊い歩みを感じさせられる。

フランスで配った名刺の写真が雑誌に掲載されている。

高野正誠(左)と土屋龍憲(右)

Ajoutons qu'entre 1876 et 1878, il instruisit deux élèves japonais envoyés par l'empereur du Japon pour y apprendre la culture de la vigne. Ce sont MM Takano et Tsuchiya qui surgissent Faubourg Croncels à l'étonnement des passants.

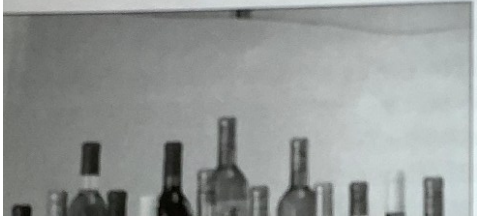
Baltet reçut l'Ordre du Trésor Sacré et l'empereur "la Favorite du Mikado" qui est un chrysanthème, créé pour l'occasion par Charles et Ernest.

Les Japonais (1876)

La Favorite du Mikado

Ils apprirent ensuite l'œnologie chez Dupont, au Clos Sainte-Sophie à Montgueux.

Un cru de Troyes, le Baltaï, vit le jour à Yamanashi, au pied du Fujiyama.



Le vin de Kôshu, dont la réputation est internationale, fut vinifié pour la première fois à Katsunuma en 1877 par Masanari Takano et Tatsunori Tsuchiya, après des études de vinification en France.

Plus de 80 vignobles à Katsunuma produisent environ 40% du vin japonais. Toute une gamme

11．農業について思う

斉藤　一幸

私たちの住んでいる岩崎地区は，大正時代からブドウを中心とした農業地帯になりました。私はその環境を子どもの頃から当たり前のこととして生活してきました。

１０代の頃は，ブドウ作りは大変な作業が多く，厳しい生活を余儀なくされる職業だとマイナーなイメージを抱いていました。畑の堆肥，農薬，資材などは今とは違い，良い言い方をすれば自然を生かした農業が主流であったように思われます。子ども心に将来は絶対農業なんてやるもんかと，思った時もありました。私の小さい頃の記憶に，暑い最中，母親が私を背中におんぶしながら立ちがんなで，草取りをしたことが刻まれています。

家族や親戚から，「ご先祖さんからの農地を守っていくのは大事だ。」と，事あるごとに言われました。また，「勤めをしながら兼業農家としてやっていくのも，並大抵のことではない。」とも言われた覚えがあります。社会人として就職してから現在に至るまで，様々な環境変化に伴い，自分自身の考え方も徐々に変化してきました。今は，ブドウ栽培を通じて，家族の大切さはもちろん，お客様の期待を大事にしつつ，微力ながら地域に貢献したいと思っております。

幸いにも家庭を持ち現在に至るまで，亡き父母や親戚，友人たちから様々な助言やサポートをいただき，今更ではありますが，感謝の気持ちでいっぱいです。

ところで，昨今，環境変化に伴ってブドウ農家が，昔ながらの発想ではなかなか難しいと感じる場面は，生産技術・流通・販売等，非常に多方面にわたります。日々刻刻と変化しているので，情報量の多様化にややもすれば，追いつかない場面に出くわすこともあろうかと思われます。

そんな時，私の場合は幸いにも地元の若い就農者との交流を持ち合わせる機会に恵まれ，様々な情報の取得と同時に意見交換を行うことができるようになってきました。情報があふれる時代，何を選択していくか，と同時に従来からの貴重な生産

技術を基本としつつ，新しい技術を積極的かつ効果的に運用していくことが最も重要な要素ではないかと感じています。

農家には様々な課題が山積しています。生産者としての所得増加，つまり手取りの最大化について，いかにして効果的な農業を営んでいくかが永遠の課題ではないでしょうか。

また，我が家を含めて将来的に若い世代がどうすれば，ブドウ栽培に魅力を見いだしていくことができるか。どうすれば，農業人口を増やしていけるのか。併せて後継者の育成が重要も重要課題の一つと感じています。それには，行政や JA も含めて，いわゆる所得の増大化を目指した，魅力ある環境づくりをいかにして構築していくかが，大きな要件になってくるものと思われます。

最後に，すべての農家の人たちが裕福な生活環境を味わうことができますように，お互いが良い意味での情報交換が積極的にできますように，みんなで一緒になりワンチームでがんばりましょう。

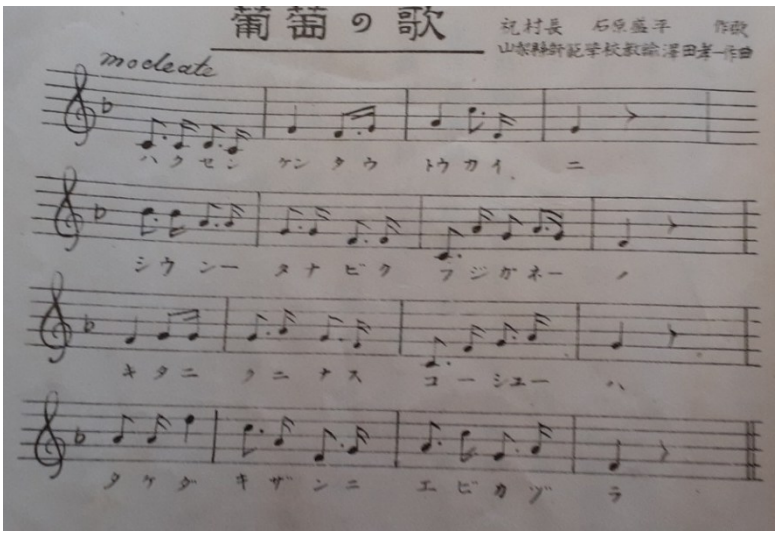
葡萄の村歌　　石原盛平作歌　　澤田孝一作

一、
白扇懸倒東海に
紫雲たなびく富士が根の
北に国成す甲州は
武田機山と海老かづら

二、
励め人々諸共に
葡萄の園に耕さん
神より受けし此の恵み
吾が岩崎の誉なり

三、
秋の女神の立田姫
嚠（やが）て訪ふ時来れば
浮なす雲の艶やかに
葉陰色づく星月夜

四、
宜（むべ）や果王の尊さよ
結んで夜光の玉となり
砕けてぶどうの酒となる
頒けて進ぜんわが友に



高野正興様所蔵

12．中学生フランスボーヌ市友好親善訪問

川崎　敏朗

今回世界農業遺産に纏わる話を承継会から依頼されましたので，12 年前塩山北中学校校長時，中学生フランスボーヌ市友好親善訪問団団長として記した報告書を私の今昔話とさせていただきます。有意義なこの交流が今後も継続されることを願います。

見渡す限り地平線まで広がる小麦畑と牧草地。それまで，エッフェル塔と凱旋門くらいしかなかった私のフランスに対するイメージは，この時大きく覆された。パリからディジョンまでの約 1 時間 30 分，TGV の車窓から見えるパリ近郊からブルゴーニュにかけての田園風景は，まさに農業大国フランスを実感するに充分だった。青い空に低く浮かんだ雲の下，暖色系の煉瓦や屋根の民家が小さな古い教会を中心に二十戸ほど寄り集まった村々が，次々に現れては流れ去っていく。「ボーヌだ!」まだ数十キロ早すぎる感慨が私を包んだ。勝沼中学校の教務主任として，少々厳しい事前学習を課した第 1 回目のボーヌ訪問団を送り出してから，すでに 14 年の歳月が流れていた。

２０１３年（平成 25 年）９月 18 日から８日間，私は甲州市中学生フランスボーヌ市友好親善訪問団の団長として，フランスの地を踏んだ。

ボーヌは古い城壁に囲まれた人口２万人程の美しい町で，城外にはなだらかな丘陵地に見渡す限りのぶどう畑が広がっていた。市の助役キャロル・シャトー氏には，1 日目の市庁舎での歓迎会から３日目の市内見学まで，かなりの時間を割いて訪問団に同行し，見学場所の手配から説明まで，親身になってお世話をいただいた。

この訪問事業の目玉である中学生のホームステイについては，ボーヌ到着の朝までホストファミリーが明らかになっていなかったが，予定より多くのホストファミリーが申し出てくださったということで，当初の２名 1 家庭から 1 名 1 家庭へと受け入れ体制をより充実していただいた。言葉も満足に伝わらないであろう異国の家庭にひとりぼっちでホームステイすることになり，子どもたちもかなりの緊張感に包まれてのスタートとなった。しかし，このことは逆に密度の濃い交流体験となった。片言の拙い英語で，身振り手振りのジェスチャーで，或いは絵に描いて，必死の思いで意志を伝えあった経験は，言葉は違っても所詮は同じ人間同士，気持ち

さえあれば何とか伝わるものだ，そんなコミュニケーションの本質を身をもって学べたのではないだろうか。後日，成田からの帰りのバスの中で，ホームステイについて５段階評価で聞いたところ，全員から最高だったという答えが返ってきた。５段階にした配慮は無用だった。ホームステイ４日目の朝には，涙を流して別れを惜しむ姿も見受けられ，生涯初の国際交流体験によって，一段と心豊かに成長してくれた子どもたちの姿があった。

クロ・サン・ ソフィーのオーナー

５日目に訪れたトロワ市は，まさに明治期の葡萄酒醸造の先達，高野正誠，土屋竜憲両氏の訪仏の足跡が遺る町である。二青年が足繁く通って学習に励んだ農学者シャルル･バルテ邸は，バルテ家の手を離れ，今はトロワ市の所有物件となって，交通量の激しい大通り沿いに残っていた。農繁期，２人が泊まり込んで栽培実習に明け暮れたビエール・デュポン氏のぶどう農園は，広大なシャンパーニュの平野が見渡せる小高い丘陵の上にあった。デュポン氏曾孫の知り合いの方がオーナーとなっているクロ・サン・ ソフィー農園がそれである。ここではオーナー夫妻がワインやジュース，各種の軽食を準備して，私たちを歓待してくれた。地下のワインカーヴや古い醸造所跡,収穫を来週に控えたピノ・ノワール種とシャルドネ・カーヴィニョン種の畑も，熱心に説明していただいた。ここで私は技師長に，以前から疑問に思っていた２つのことを問いかけ，答えを得た。ぶどうの垣根栽培では１本の木には 1.5kg から 3kg しか房をつけないこと，剪定では太い幹だけ残して全ての枝を落としてしまうこと，の２つである。しばし，自分の片言英語に自画自賛した。

トロワ市をあとにした訪問団は，一路パリへと向かった。６日目のパリは，終日市内観光である。ホームステイの重圧から解放されて，子どもたちの表情も随分と明るく陽気になって来た。凱旋門の螺旋階段を垂直に 50m も上り下りしたこと，ルーブル美術館のまるで日本の連休中のような大混雑，レストラン ・レオンでのバケツ一杯分ものムール貝のディナーなど，どれもこれもが楽しい体験となったに違

いない。

日本と比べフランスの気候は２ヶ月程先行しているようだった。気温の変化と疲労からか体調を崩した生徒も 2，３出たが，心配された生徒も帰国の朝には熱も下がり，全員揃って無事に帰国することができた。団長の任を全うできた安堵感は，土産に持ち帰ったワインでいや増すこととなった。

この８日間の異文化体験が，何物にも代え難い貴重な体験として子どもたちの心に生き続け，視野を広げ，多様な価値観を尊重でき，尚且つしっかりとしたアイデンティティーを持った日本人に成長する糧となってくれることは間違いない。今回の訪問団に参加した子どもたち一人一人が，近い将来，甲州市とボーヌ市のかけがえのない架け橋となってくれることを心から願っている。

終わりに，甲州市とボーヌ市の交流が末永く続き益々発展することを祈念しまた，この貴重な機会を与えてくださった甲州市当局，市国際交流委員会様，ボーヌ市関係者様，旅行会社様はじめ多くの関係の皆様に，心よりの御礼を申し上げ，御報告とさせていただきたい。

※　前回に引き続き，今回も訪問団引率者を自邸にお招きくださったドメーヌ・シモン・ビーズ社オーナー，パトリック・ビーズ氏の突然の訃報に接し，謹んで哀悼の意を表します。

（当時の報告書より転載・平成２５年１０月執筆）

13．鳥居焼きと私の人生と

里吉　武仁

毎年，１０月の第１土曜日午後７時頃，鳥居焼きの聖火隊が柏尾山の鳥居平に力強く駆け上がり，点火した護摩木が夜空に勢いよく燃え上がります。鳥居焼きと私の人生とのかかわりについて記憶をたどってみました。

〇消防車の鐘とサイレンが近づくと，沿道に出て鳥居焼きの聖火隊に声援を送ります。私が１，２歳のころ，聖火隊が走る姿に「おっかねえ！」と母にしがみつき泣いたと聞かされました。鳥居焼きにかかわる私の記憶はここから始まります。
〇母の実家は一ノ宮町の本都塚という地域でした。小学校低学年の頃，里帰りした母と見た鳥居焼きが，遠く東の山に燃えていたのを覚えています。
〇昭和３９年１月に父が亡くなり，小学校３年生の私は下岩崎で暮らしていました。夕方，鉢巻をした聖火隊がたいまつを掲げ「ワッショイ！ワッショイ！」と走ってくる姿は，すごい迫力で畏敬の念さえ感じました。窓から見える鳥居焼きは，額縁に入った絵のようでした。
〇昭和５２年，東京に就職。１０月１日は「都民の日」でお休み，鳥居焼きには好都合。その後，鳥居焼きが１０月の第１土曜日となり，休暇を取らざるを得ません。平成１４年４月から完全学校週５日制が始まり，気兼ねなく参加できるようになりました。
〇２５歳の時，中央道工事に伴う代替え地として上岩崎の畑を得て，その一角に住居を新築。以来，ここから見える鳥居焼きは，遮るものがなく格別のものです。
〇２６歳の時，鳥居焼きをバックに撮ったツーショットを結婚式のしおりに使いました。もっといい場所があるはずなのに，この景色が大好きなんです。
〇その頃，祝７区が当番で鳥居平に護摩木積みをしました。薪を手渡しで上に送り，井桁に組んで中にぼろきれを入れ，ビニールで囲いテープで縛って完成です。次に当番が回ってくる頃は余ほどの年齢になっているだろうなと思いましたが，その後ボランティアによる護摩木積みへと変わりました。
〇３０歳の時，長男が誕生。旧祝橋から見る鳥居焼きは迫力があるだろうと，いそいそと出かけましたが，風が強く花火の音と寒さに震える長男を毛布でくるんでそそくさと帰ってきました。

〇昭和６４年の正月，長男が２歳，次男がまだ乳飲み子だった１月７日，昭和天皇が崩御され年号が平成に替わりました。この年の花火のない鳥居焼きは寂しく，その意味の重さを感じました。
〇ある年，鳥居焼きが風にあおられ周りの林に燃え移ったことがありました。控えていた消防がすぐ消し止め，大事には至りませんでした。危険と隣り合わせの催しだということを改めて実感しました。
〇息子たちが小学生だった頃，鳥居平にワラビ取りに行きました。眼下に広がる景観は新緑と相まって素晴らしく，ここから飛べたら気持ちいいだろうなと思ったものでした。秋になるとパッチワークのように色づきます。
〇育成会で子ども神輿を出すことになり，上町からお祭り広場までパレードしました。神輿は重く子どもは少なく，大人が担いでへとへと，パレードが終わると公民館でお楽しみ会，午後５時頃には地区隊の子ども達を祝小学校に送り届けます。地区隊は祝地区を回ってお祭り広場へ，本隊としてたいまつの火に照らされ鳥居平に向かう中学生の姿はたくましさそのものでした。
〇甲州市として合併する前，鳥居焼きの電飾についてのアンケートがありました。現状維持が圧倒的多数，しばらくして鳥居平に階段が整備され，護摩木のステンレス台が西日に輝いていました。
〇近年，勝沼 CATV がぶどう祭りを生中継するようになり，外で鳥居焼きを見た後，テレビでも見ています。花火の音の時間差が笑みを誘います。
〇令和５年１０月７日（土）に祝小学校の１５０周年記念式典の前夜祭として，祝小学校卒業生の松本良喜さんのコンサート後，校庭で鳥居焼きを鑑賞しました。コロナ禍で中止されていた地区隊（中学女子，中１男子）が４年ぶりに復活し，コンサートに集まった皆さんの声援の下，祝小校庭を出発し祝地区を一周してお祭り広場へと向かいます。各地区を回った聖火は本隊（中 2,3 男子）によって護摩木に点火され，カウントダウンで照明が消えると，浮かび上がる鳥居焼きに「オーッ！」という歓声が上がりました。祝小学校の校庭は鳥居焼きを見るのに絶好な場所です。
〇令和６年のぶどう祭りでは甲州ブドウの無料配布がありませんでした。醸造用が主流で醸造会社への出荷も早まり，この時期ぶどう棚にあるのはごくわずかです。かつて，６k 木箱で出荷していた頃は，鳥居焼きがもぎ込みの始まりでした。炬燵にあたって食べる甲州ブドウは忘れられない味です。

少子高齢化が進展しているとはいうものの，鳥居焼きは地域が誇る催しとして今後も継承され続けることを願ってやみません。思い起こす機会を与えていただいた今回の企画に感謝申し上げます。

14. 金盛園の昔

金井　盛一

金盛園は，祖父の盛親がブロック醸造をやめて，1950 年（昭和 25 年）に始めた観光ぶどう園です。観光客は勝沼駅から歩いてきました。今では考えられないことですが，売店のトラックで荷台に観光客を 10 人位乗せて売店まで連れてきました。

売店では，スピーカーで音楽をかけ，絣の着物を着た 4，5 人のぶどう娘が舞台の上で岩崎音頭や勝沼踊りを踊って観光客に喜ばれました。大きい音楽だったので，近所の方から苦情が来たこともありました。その頃の売店前の道はでこぼこ道で，なんと道路の上にアーチ型の金盛園という看板が掛けられていました。栽培していた品種は甲州が主でした。 近所のかご屋さんから竹で編んだかごを仕入れ，それに甲州を詰め，お土産用として販売していました。

その後，都心や県外からの観光客は，大型バスの団体で来ることが多くなり，お土産用のかご詰めもたくさん必要になりました。家族や親戚総出の夜業でかご詰めをしました。

昭和 52 年に勝沼バイパスが，昭和５７年に中央道が，昭和６０年に新祝橋が開通し，順々に自家用車の家族連れが多くなり，畑へ行ってぶどう狩りを楽しむことが，観光園の主軸になりました。その頃は，今のシャインマスカットのように，種あり巨峰が大人気でした。この頃から始めたランチのほうとうやバーベキューも好評でした。ぶどうの種類が少なかったため，飲食とぶどう狩りと言うレジャーの要素が含まれ，今までの売店から「観光施設」としての意味合いに変わりました。１０年くらい続けましたが，ランチの主体は母でしたので年を取って大変さが増したのと，人手が必要で採算が取れずやめることにしました。45 年前に店舗の配置を入れ替えて，施設を北側に新築しました。トイレは５年前に新しくして，今の金盛園があります。

今は，1.6 ヘクタールの自園にいろいろな種類のぶどうを作っています。父儀三郎と母康子の接待とぶどうのおいしさが評判で，うちのお客さんは 90 パーセント以上リピーターです。この遺産を大事にして次代へ引き継ぐよう，心がけています。

これからは，発送専門園，食べ放題園，食事のできる大型園のように分かれるのではないかと思います。先代と先々代が，その時代に合った観光園としての在り方を念頭に置いた経営をしてきてくれて感謝しています。

15. 勝沼町藤井

小川　真澄

私は，１９５２年（昭和 27 年）勝沼町藤井に生まれ育ってきました。生まれたころの我が家は，農家で養蚕をしたり，米作りをしたり，甲州ブドウや桃を栽培していました。

博物館に隣接する畑では，養蚕のため，桑の木を ２０アール程栽培していて，その畑では土を掘ると縄文土器がたくさん出土した記憶があります。

釈迦堂遺跡は，中央高速道を工事する前の昭和 55 年から５６年にわたり発掘調査をして，この釈迦堂遺跡では，縄文人たちが造り出した 30 トンにも及ぶ土器や土偶を出土しました。この内，5999 点は国の重要文化財に指定されています。

今は果樹栽培中心のこの地は，数千年前の縄文時代からの歴史を経て，今日まで平和に続いてきたのです。

この果樹農地の下には２９０個の竪穴住居が存在していたことが，発掘調査で解ったのですが，今は中央高速道路がその上を通っています。この２万平米の範囲での発掘で，この地は生活に最適な地であったことが良く理解できます。

永い歴史の中で，先人たちが築き上げてきたこの地ならではの素晴らしいものづくりが今日に繋がっているのですが，ワイン一つをとっても歴史的には，祝地区から本格的なワイン醸造が 150 年ほど前から始まり，藤井地区でも私が小さい頃は，自分たちで飲むワインを共同で醸造するブロックがあり，大人たちはぶどうの収穫時期には葡萄酒造りに力を合わせて精を出したものでした。そのブロックの醸造権

を引き継ぎ，勝沼にはいくつかの今では評判のワイナリーが誕生しました。本格的なワイン醸造は，１５０年前でしたが，ある文献には縄文時代にもしかすると既に野ぶどうでお酒を造っていたかもしれないことが書いてありました。

縄文土器の中にぶどうの種が入ったまま出土したので，そういうことが考えられたのかもしれません。そう考えると，私の住む甲州市勝沼町は夢のある地域だとワクワクいたします。

16．祝地域世界農業遺産今昔話承継会に寄せて

丸藤葡萄酒工業株式会社

代表取締役　　大村　春夫

「峡東地域の扇状地に適応した果樹農業システム」が令和４年に世界農業遺産に，令和２年には日本ワイン 140 年史「国産ブドウで醸造する和文化の結晶」甲州市と牛久市が国から日本遺産に認定され大変うれしく思っている一人です。

私は家業がワイン屋だったので生まれ育ってからずうっとワインを身近に感じていました。私共の会社は 1890 年創業で私が４代目の代表をしております。私より４代前の高祖父大村忠兵衛が大日本山梨葡萄酒会社（通称祝村葡萄酒，現在のメルシャン㈱勝沼ワイナリー）に出資していることが文献に出てきます。江戸から明治になり，明治の維新政府木戸孝允，大久保利通，伊藤博文らが西洋に追いつけとばかりに殖産興業政策を推し進めます。代表例は富岡製糸場でしょうか？山梨も養蚕が盛んに行われておりましたが養蚕から果樹栽培に転換する時期だったのでしょう！日本全国各県令に，「産地の特産品を奨励するように！」との命令が下り，山梨はすでにぶどう栽培とワイン造りが行われていましたので 1877 年，大日本山梨葡萄酒会社から高野正誠，土屋龍憲の二青年を本場フランスでぶどう栽培とワイン醸造技術の習得に派遣します。1878 年にパリ万博の事務官長として赴任を控えていた前田正名にフランスまで連れて行ってもらう事になりました。留学中の二人の青年の苦労は大変だったろうなと思います。

二青年が渡仏したちょうど 100 年後 1977 年に私もフランスボルドーでワイン醸造技術の研修を受ける機会に恵まれました。マンズワインからは松本信彦さんがボルドーに留学中で色々と面倒を見てもらいました。その時でさえ，今のようにインターネットがある訳ではありません。国際電話も高かった時代です。日本から届いた手紙が何よりもうれしかったことを思い出します。日本のワイン造りは，二青年の帰国後から本格的に始まります。

1974 年私が東京都北区滝野川の国税庁醸造試験場で研修していた時，ワインの消費量は国民一人あたり年間 200ml でした。まだまだワインが一般的ではありま

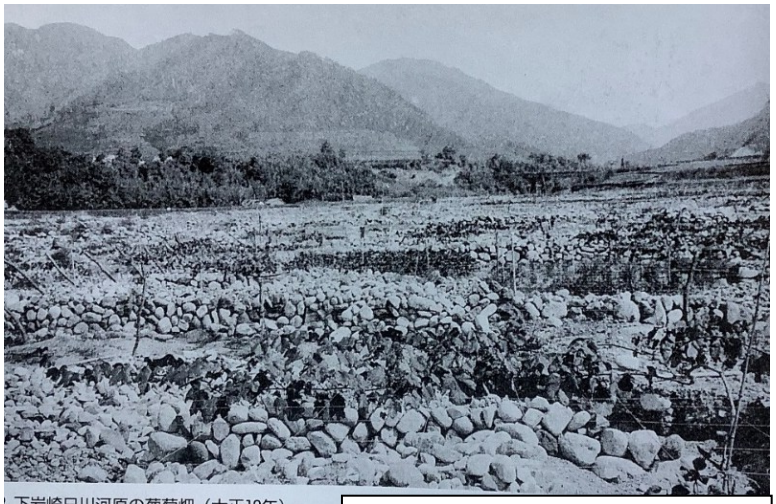
せんでした。新宿駅で乗り換えの時，コンコースで人混みを見るとこの人達がハーフ瓶 1 本ずつ飲んでくれたらなあと，いつも思っていました。あれから 50 年，今は 3ℓ ほどまで伸びてきました。まだまだワインの消費量は伸びて行って欲しいと思っています。今は全国に 500 軒ものワイナリーに増え，国内だけでなく，海外からも日本市場目指してワインはどんどん輸入されてきます。

あと 2 年で創業 100 周年と言う時 1988 年，関税が大幅に引き下げられ，日本のワイナリーは生き残れるのだろうか？100 年までは何とか続けたい。会社を廃業しても仕方ないとまで思いました。廃業するのはいつでもできる，悔いを残さないようにしたいという思いからマンズワインさんのレインカットを採用し垣根栽培に挑戦します。欧州系醸造専用品種のカベルネ・ソーヴィニヨン，メルロー，シャルドネ，ソーヴィニヨン・ブランなどの品種を植えて今日に至ります。栽培や醸造技術のことなど大手ワイナリーさんから色々と教えていただき，私どもが曲がりなりにもワイン造りが続けて来られたのは大手メーカーのお陰と感謝しています。日本のワインも大分認知されて来て日本ワインだけのワインバーやレストランも増えました。有難いことです。東京初め大都会から近い勝沼ですからワインのテイスティングだけではなく勝沼の景観も一緒に楽しんでもらえる様なワイナリーの集積したまちになって行けばいいなあと思っています。ヴィジターズインダストリーという言葉があります。ワイナリーそのものが観光資源になり，宿泊の場所やレストランなどができ，多くの人を迎え入れられる様にワイナリーも整えてきたつもりですがワインをテイスティングすることが付いて回ります。甲州市内の二次交通をもっと利便性のあるものにしてゆく必要があると感じています。また，ワインのテイスティングだけでなくワインの奥にあるワイン文化をもっと情報発信して行かないと賑わいは生まれないと感じています。

17．ぶどう作りのあれこれと石積みの冷蔵庫

齊藤　主彦　　齊藤　眞由美

祝橋から見て専福寺の左斜め下の河原の畑は，明治 40 年 43 年の洪水で運ばれた石の多い畑でした。土の部分はテイラーが通るだけの幅で，両脇には高く石が四角に積み上げてあって，ぶどうの手入れをするときは上に乗って膝をついてしなければならず大変でした。たまたま専福寺に来ていた石屋さんに頼んで石の片付けをしてもらい，結局 300 万円の費用が掛かりました。大きな石を機械も使わず 2 人で運び出す仕事は重労働でした。周りの人からは「畑にそんなに大金を掛けてどうするんだ。」なんて言われましたが，車が入る為の広さと耕運機で耕せる土でないといいブドウはできないので投資は必要でした。



下岩崎日川河原の葡萄畑（大正10年）
日川水制工事が終わり河原に再び畑を造り始
（甲州岩崎葡萄及び葡萄酒画報より）

写真で見るふるさと勝沼より

父が剪定をしていた時はいいブドウがなったのに頼んだ人の剪定だとダメで，甲州ぶどうは特に剪定が難しいと感じました。土を見ながら，畑の土にあった剪定をするのが，一流のぶどう作りなのだと思います。父は，河原は唐傘づくりと言って，枝を広げないで一本の木に房を少なめにならせました。その代わり木の本数を多くしたので良いぶどうが作れました。

1969 年（昭和 44 年）頃，デラウエアのハウス栽培をしようと父と相談して決めました。ところが父は翌年 9 月，河原のせぎの水を見に行った帰りに倒れ，翌日に亡くなってしまいました。父も望んでいたことなのでハウスを建設しました。一反二畝のハウスでデラぶどうを作り，1971 年（昭和 46 年）にはまた 3 連棟（八畝）増やしました。

1982 年（昭和 57 年）に新しく建てたパイプのハウス建設には 600 万円かかり

ましたが，そのハウスは 2014 年（平成２６年）の大雪でつぶれてしまいました。その有様を見た時はあっけにとられ，涙も出ませんでした。土橋商店に廃材を持ち込む列がそれは長く，次の日から朝一番に運び込みました。

それを機会にほとんどの農家はハウスをたたみました。うちでも辞めようかと考えましたが，全壊の場合は国の補助で建設費用が１割だったので 2015 年（平成２７年）１２月に再建しました。苗木が中々手に入らない状況でしたが，何とか探してシャインマスカットとピオーネを植えました。5，６年は無収入なので，昼は妻がデパートで働き，私は昼一宮の畑を３反歩借りてぶどう栽培をし，夜はバイトに行きました。出荷作業はほとんど夜業でした。1971 年（昭和 45 年）に建設したハウスは甲斐路に切り替えました。しかし，思うように作れず，黒系に替えましたが，今度は下岩崎一帯がモザイク病にかかりだめになりました。

1993 年（平成５年），甲州が豊作でワイナリーが契約してあっても買い取ってくれないということがあったので，甲州の栽培を辞めました。

初めてシャインを植えたのは，ハウスの役員をしていた時で４本いい穂を手に入れました。作り方も分からず始めは大変でした。シャインマスカットは農家の救世主です。そのシャインが増え，黒系はどんどん切られていってますので，黒系の需要はあります。今年は少し値が上がりました。

ハウス仲間が大勢で互いに畑を見せ合い，研究しました。無尽も長く続き，情報交換が楽しかったです。そばでハウス栽培をしていた鈴木照子さんは，立ち毛品評会で賞を取ったぶどう作りの名人で，剪定・摘房・摘粒は思いっきりが良くて，見事でした。収穫時は，房が完成しているので，もいで詰めるだけ，作業がスピーディーでした。見様見まねで学ばせてもらいました。

河原の畑の奥に昔の石積みの冷蔵庫があります。昭和の初め，祖父と父が地元の石屋さんに頼んで作ったようです。戦時中は，ブドウでなく物資を入れておいたと

父が言っていました。ワインも作っていたので貴重な砂糖もあったようです。

甲州ぶどうを作っていたころは，出荷調整をしたり，お正月過ぎまで入れておいて，販売したりしました。冷蔵庫にぴったり収まる木箱は，やすりで磨かれた良い板で丁寧に作られていて，昔の人の仕事に驚かされたものです。山サの屋号が記されていて，一箱にぶどう一貫目がちょうど入りました。例年 11 月 3 日までには甲州をもいで入れるので，2，3 人に手伝ってもらっての作業でした。60 年くらい前は甲州を２０００貫位貯蔵したこともあったと聞いています。出荷したり,「月の雫」を作る菓子店や安藤果物屋に卸したりしたそうです。

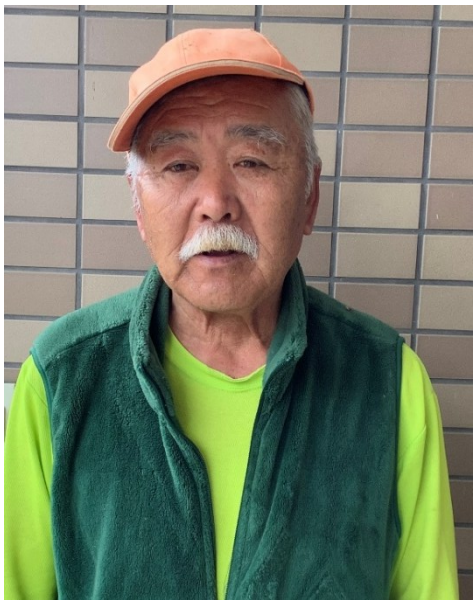
お正月には神棚の両脇につるし，お正月明けには神棚から下ろして，家族皆で今年の豊作と健康を祈願しながら食べる甲州ぶどうは特別な御馳走でした。

父から,「3 月ごろ『何も食べられなくなった病人のため甲州葡萄を譲ってほしい。』と訪ねて来た人がいて，持ち帰った葡萄を食べさせたら，元気になったそうだよ。」と言ったのを聞いたことがあります。量は少なくなりましたが 1970 年（昭和 45 年）くらいまで貯蔵していました。竹藪のそばで基礎も打っていませんが，夏は涼しく，冬は温かく，父母は夏の暑い時のお茶の時間はこの中で涼をとり，農作業に精を出していました。私が子どもの頃，４月３日，近所の友だちと甘酒とお重箱を持って行って冷蔵庫の上が平らになっているので広げて食べたことは懐かしい思い出です。

二人とも５０年以上でぶどう作りに携わってきましたが，自然災害や社会情勢の変化や大病や怪我を何とか乗り越え，多くの人に助けられて何とか今に至っております。これから先も頑張って祝地区の世界農業遺産を守っていきたいと思います。

18．林業とぶどう栽培に携わって

蒔田　啓悟



小学生高学年のころから父恵治と岩崎の山のヒノキを切って，製材所に運ぶ仕事をしました。樹齢５，６０年で，直径４，５０センチの木を長さ３メートルに切って担いで下ろしました。大変な仕事で始めのうちは，血でシャツが真っ赤になりましたが，いつか肩はタコができたようになりました。切った後に苗木を植え，育てることもしましたので，このあたりの山のことは誰よりも分かっていると思います。私が植えた木がそろそろ伐採できる樹齢です。

父が足に大けがをした時は，中学生でまだ車の免許がなかったのに運転して運びました。誰からも注意されず，今思うと自分のしていたことなのに不思議です。いわゆる山林の買い付けや伐採を請け負う山師が，私の職業のスタートです。

だんだん国産木材の需要が減り，中学を卒業後は果樹試験場でぶどう作りを学びました。土方の仕事をしながら，父と２人で働いて小さな畑を少しずつ増やしました。４０代から土建業の下請けもできるようになって，ガードレールやフェンスの設置などをイラン人の仲間と共にしました。私が出かけていて遅く戻っても，お昼を先に食べずに待っていてくれるような人たちでした。

大善寺の祭りに重要な藤のつるは，７ｍほどのご神木を立て，藤づるを１９回りに巻き，10ｍほどの藤を大蛇にかたどって下げることになっているので，花の咲くころ山仲間といくつか候補を探しておきます。藁で大蛇に見せればという案も出ましたが，伝統に沿って藤づるでしたいものだと思っています。コロナ禍で，つるの奪い合いでなく，切って渡すようになりましたが，昔のように勇壮な祭りにできたらと思います。

父から太郎せぎ(畳せぎと言っていたことがある)は，昔もっと高いところが日川の水の取り入れ口だったようだという話を聞きました。私が子どもの頃，川に飛び込んで遊んだ時から５ｍ位川底が下がっているところもあるので，きっとそうなのだろうと考えます。大雨や台風のため流れる水の威力は，想像以上に川底を流しているのだと思います。川下の村の人々の生活のために重要な役目を果たしてきた水

です。１年に２度区長会の皆さんが取り入れ口近くの清掃作業をしていますし，地区全体でも組ごと，11 月に河川清掃と言って組内の太郎せぎの草取りなどをしています。いつの時代に誰の手で作られたかはわかりませんが，開発した時の人々の苦労と今まで果たしてきた役割を思うと大切にしていきたい太郎せぎです。いつ作られたのかどこかの寺社に古文書が残されていないかなあと思います。

集落から離れた一軒家ですので猟犬を飼っていても，この頃鹿が出てきて大切なぶどうを食い荒らすようになりました。以前はイノシシが多く，ぶどうの房の下だけパクっと食べられたのですが，シカは全部食べます。ハクビシンは食べた後に果物の皮を残していきます。柵を山と里の際に設置していますが，動物も賢くて柵を壊して里に下りてくるので，常に点検修理が必要です。

私は猟銃の免許を持っていて，猟をして獲物をさばき食べます。みんなで分けて食べますがおいしいです。ハクビシンは罠で何匹か捕まえたので被害が減りました。

励ましあってきた同級生は，働きすぎたのか，何人かが病気になり，無尽をやめました。

私も糖尿病でインシュリン注射が必要と医師から言われた時もありましたが，薬と山歩きで何とか乗り越えてきました。人間ドックや検診を受け，早期発見早期治療で健康を大切にしたいと思います。

いろいろな自然災害を乗り越えてきた先人がいて，伝え継がれたものがあって，今の岩崎があります。これからは，後継者の問題が乗り越えられるかが重大だと思います。私も年取り，借りて耕作していた畑を返したところがあります。父は長く山を守り，水資源功績者表彰を県から受けましたが，私はこの先いつまでできるかわかりません。山の木を育て，水を大切にすることはまず一番に考えることが重要です。

空き家が増え，人口減少が進む農村です。そろそろ小さい畑はまとめて大きくして，機械化できるようにみんなで力を合わせることも大事ではないかと思います。

大善寺の藤切り祭りに使われる藤の根20mです。探すのと掘り出すのが大変ですが，仲間と一緒に続けたいと思っています。山の木々が藤の根に養分を取られないように考えられて始まった行事なのではないかと思います。葉っぱのついていた蔓ではご利益がないと言われています。

19. あかね色に染まる村

藤沢市在住 齊藤　美代子（旧姓　前田）

私の故郷甲州市勝沼町藤井地区は，京戸川扇状地の広がる台地の上にある。そこからは，山梨県で最大クラスの縄文時代の集落跡が発見された。遺跡からは土偶が 1116 個体も出土し，日本国内で最も多く出土した遺跡と言うから驚いた。また，旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡である事も判明し，同一地域に集落が長く維持され続けてきたという貴重な遺跡でもある。この釈迦堂遺跡は，後世に縄文文化を伝え残すため一部は調査せずに地下に眠っているというから，専門家でもない私ですら胸の高鳴りを覚える。

京戸川扇状地には，太古の時代から多くの人間が集まり，多くの人が行き交い，多くの先人達の叡智と努力の積み重ねにより豊かな集落を形成し，発展を遂げ，現代へと繋がっている。

人間は社会的な動物である。一人では決して生きられない。他人との人間関係を作っていくことは，生きていく上で必要不可欠な条件であった筈だ。私はこの村で生を受け，この村の人々から多くのことを学び，人間としての生き方を教えられた。この村をこよなく愛し，心の底から誇りに思い生きてきた。

子どもの頃に見た風景，出会った人々，その人が話してくれた言葉の一つ一つ。それらがみんな身体の中にしみ込んでいるような気がする。「この村に生まれて良かった。」と，思いつつ。こんな私はと言うと，鎌倉で３６年間教員生活を送り，故郷で学んだ全てのことを，鎌倉の子ども達に伝えてきた。

そして，無事に退職できると思ったその年（2011 年３月 11 日）には，未曾有の大災害と言われた，あの東日本大震災が起きた。在職していた鎌倉市立手広中学校の隣に，雇用促進住宅があり，そこに 50 名ほどの福島の方々が紙袋一つで避難して来た。「何とかしなければ！」と，動き始めた地域の方々から「西鎌倉地域に残って支援活動を手伝って欲しい。」という声が掛かり，退職と同時に福島からの避難者の支援活動に入った。

しかし，資金は無一文、どうにもならない。そこで直ぐに募金活動を開始，チャリティーコンサートを計画し，資金を集めた。神社仏閣の協力を仰ぎ，お茶会等を開催したり，毎週お食事会を開いて交流会を持ったり，安心して生活できるよう配慮した。避難者は，福島第一原発事故の近くに住んでいた方が多く，「避難命令が出されてから，７カ所も８カ所も転々とし，やっと鎌倉にたどり着いたのだ。」と，言う。

「最初の避難場所など，食べる物すら確保されずに，冷たい体育館で，冷たいおにぎり１個を３人で分け合いやっと食べた。朝起きた時には，隣の老人が冷たくなっていた。・・・」と。時間が経つに連れ，次から次へと壮絶な話を耳にするようになっていた。一年間は，鎌倉へ避難して来られた被災者の支援に，ただひたすら奔走した。

二年後の 2013 年からは「未来・連福プロジェクト」を立ち上げ，60 代から 70 代の女性 10 名が役員を引き受け「命を生み出す母親達が，命を守る活動に取り組もう！」をスローガンにした。支援活動の一環として，「福島の放射能で苦しむ子ども達の支援を行う。」と，決定。具体的には，「福島第一原発事故で苦しむ皆さんを鎌倉に招待して，鎌倉の空の下で，ゆったり過ごしていただき，心の復興支援に繋がれば。」と，毎年 100 名の皆様方を市町村ごとにご招待した。今年で 12 回目を迎える。（コロナが終息して再開後は，４０名をご招待）建長寺に３泊４日（現在２泊３日）宿泊させていただき，円覚寺では管長様の御講話，鶴岡八幡宮の参拝と御講話，大仏殿では御講話と演奏等を実施。建長寺では，２００畳と言う広い部屋が二部屋あり男女に分かれて宿泊。大きなお風呂に入り，お母さん達が作ったお食事に舌鼓，夜は，歓迎会，交流パーティー等を開いて楽しんだ。毎年小学生から大人まで２５０名程のボランティアが参加して活動を支えてくれている。

「人間としての心を持って，遠くからも，近くからも東北を応援し続けなければならないだろう。」と，ある新聞記者が呼びかけていた。

20. 勝沼町民の健康教育に貢献した愛育会と共に

岡　澄子

昭和 48 年 4 月，私は勝沼町役場に 3 人目の保健師として就職しました。それまでは，2 人だけでしたが，母子愛育会が署名や陳情活動をして増員を勝ち取ったのです。

母子愛育会は，乳幼児健診などに住民の代表が協力して活動を行っていました。検診の開催通知を該当者のお宅に配付しながら出席を家族に説得したり，妊婦に配付された牛乳を家族が飲んでいるお宅を訪問して，健康な赤ちゃんが生まれるために，妊婦さん専用の牛乳であることを家族に説明したりと言った活動から，幼児検診の開催や実施の協力また子宮がん検診の実施への協力や受信者の確保など様々な幅広い活動を行っていました。

その結果，恩賜財団母子愛育会の本部から表彰されるという栄誉に全国の中で最初に選ばれました。私も就職後何年か後に愛育会の育成者として表彰される栄誉に

恵まれました。当時の皇太子（現上皇）殿下ご夫妻に面会するという素晴らしい出来事もありました。これら全て愛育会のおかげです。愛育会の会長は，長年辻村志げさんと言う方が担っておられましたが，この方も表彰されています。

保健師活動は，母子保健の他成人に対しての保健活動があります。就職当時はまだ，検診への関心は薄く，受信者もなかなか増えませんでした。その時保健衛生委員会が力を発揮しました。各区に配置された委員さん方は，一軒一軒歩いて人々を説得して検診会場へ連れてきたのです。受験者数の比率を競争したこともありましたし，各地区を細かく検診に歩いたこともありました。これには，山梨厚生病院の協力が，欠かせませんでした。多くの受験者によって病気の早期発見早期治療がなされました。この結果，保健衛生委員会も表彰の栄に浴しています。

就職当時の昭和 50 年代は，健康の知識を得る手段もあまりないため，各地区に出向き，健康教育を実施しました。冬季の夜のほとんどをこの健康教育に費やしま

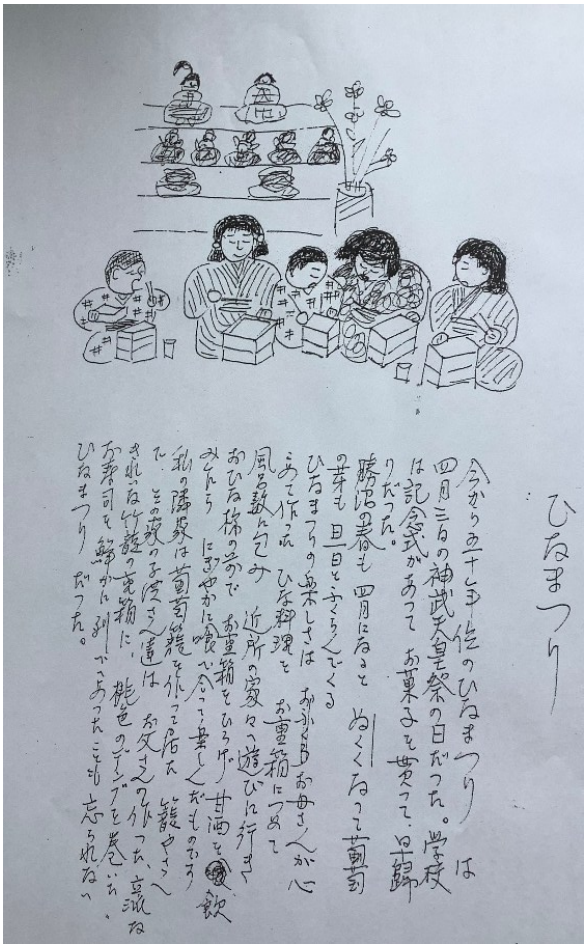
した。愛育会や保健委員さんが，地域の人集めをしてくれ，2，30 人が地区の公民館などに話を聞くため集まってくれました。話の後は茶話会です。ここでのいろいろな話は，保健活動ばかりでなく，私自身の人としての教養にも多いに役立ったと思っています。

赤ちゃんの健康相談を毎月行っていた結果，乳幼児は全員覚えたので，迷子を見て誰だか分かるまでになりました。また，地域に出向いての検診でも，どこの誰だか分かるようになっていました。逆に私も住民の方々に覚えられていましたので，我が子たちが，地域の人たちから，「保健師さんの子け？」とよく聞かれたと言っていました。見守られていたとありがたく思いました。

三十数年勤務しましたが，この仕事は，人として私を成長させてくれ，とても良い職業についたと思います。思えば，この仕事に就いたのは，父の勧めでした。2 人の保健師さんの上司として働いていた父は，その仕事を見て娘にもさせたいと思ったようです。その点はとても感謝しています。

保健師の仕事は，退職後も頼まれて行っています。これからも依頼がある限り続けていきたいと考えています。

女の子の健やかな成長と健康を願うひな祭り



「なつかしい勝沼 50 年前 」　1975

松本良男様

画と文

50 年前，昭和初期の勝沼町で少年期を過ごし，その後東京で生活していた松本さんは，勝沼での日々を懐かしく思い，絵と文で綴りました。昭和 50 年ですから，<u>この思い出の絵と文は今からちょうど 100 年前のこと</u>になります。東京の大田区で写真屋さんをなさっていたと，ご子息の良様から伺いました。世界農業遺産に認定されたお祝いの冊子に使いたいとお願いしたところ快く原紙のコピーを送ってくださいましたので，このページで使わせていただきました。

21．専福寺は明治の大洪水で流されそうになった

語り　　雨宮　孝信

「四区雨宮耕喜様の家には，専福寺から檀家の皆様にお礼に差し上げたのし板があり，その裏には「明治４１年記念」などと 40 年の大洪水のことが墨で書かれています。それは，明治４０年の日川の大洪水で専福寺が流されそうになり，本堂を檀家衆と車力さんに１０間（約１８ｍ）南西に引っ張ってもらったお礼の品です。」

「大洪水前の専福寺は，中門の正面に本堂がありましたので，引っ張ったのは南西方向だったことが分かります。また，当時のお墓は，住職の毎日唱えるお経の声がよく聞こえる所，つまり北側と東側にありました。東側のお墓は流されず残りましたが，北側のお墓は土地と共に流されました。今崖になり，竹藪になっているところから北に１８ｍの土地が，水の力で下流にたくさんのお墓と共に流されたということになります。流されたのは，お墓だけでなく，このあたりの何軒かの家と崖下の桑畑や水田も流失しました。」

現在９１歳の笠原弘子さんに伺うと子どものころの４区５区の家の周りは水田だったそうです。

「洪水の後，河原から墓石を探すことができた家もありました。そこで寺は，ぶどう棚になっていた表門と中門の間を流されたお墓の移築先にして現在の専福寺があります。道沿いの石崖にぶどうの棚から引っ張った針金を縛った跡が何か所か残っています。」専福寺の本堂と中門や松の木の間を１８ｍ広くし，本堂の裏と東にお墓があったのが，明治４０年当時の専福寺と考えると，崖を削る日川の水の力のすごさとそれに対して専福寺の本堂を守った車力さんの技術力と檀家衆の洪水時の結束力とパワーは，史実とは思えない出来事です。

50 年前編集された勝沼町文化協会発行の「えびかずら」には明治４３年の洪水でも専福寺の本堂を引っ張ったとあります。つまり２度の洪水で流されそうになったので１８ｍも移動したことになります。

「『流れろ，流れろ専福寺』と村人がいい伝えたことから，専福寺は流され，再建されたと勘違いしている人もいるようです。昔専福寺より上にあったお寺を今の専福寺に合わせたことが，上から下に流れたという意味と，洪水で流されそうになったことから言われているのでは。」と，ご住職が話して下さいました。

文責　市川史子

時明治四十丁未歳　八月二十四日
古來未曾有大洪水
日川泥漲專福寺
北澤大崩落御堂
三分五一傾斜檀家信徒議
定現所引還境内大
樅有周囲一丈三尺余
爲洪水立枯請官払下
愛分以此木作此器
爲記念
祝村下岩崎
明治四十一年三月　上組
上浣　雨宮氏

のし板は，雨宮耕喜様所蔵。2025 年 3 月６日発見されました。

22．人が繋がって祝地区の遺産は引き継がれる

市川　史子

私が初めて地域の一員ということを意識したのは，子どもたちで行った新聞配りでした。眠くても朝早く起きて 17 軒間違いなく配らなくてはなりません。間違えて配達し，最後の家でそれが分かり，「学校に遅刻してしまう。」と泣きながら１軒目から確認した日のことは忘れられません。そんな私に毎朝「おはよう，ご苦労様。」と声をかけてくださる方がいました。「自分は地域の役に立ってるんだ。地域から見守られているんだ。」と感じた大切な思い出です。

もう一つは，昭和 40 年５月 25，28 日ジベ処理体験です。雨が降り続いてジベの適期が狭まり，人手が足りないということで緊急に勝中全校生徒 370 人が協力することになりました。私が３年生の時でした。農家ではなかったので，ちゃんとできるか心配でしたが，何とか一日目は全身真っ赤になって終了。しかし，翌日も翌々日も雨。やっと晴れて 28 日に岩崎農協の横に集合した時，「１回目でよく働いてくれた雨宮緑先生の娘はいるか。」という大きな声を聞いた時の誇らしさを忘れることはできません。

母校祝小で教師として取り組んだ「祝地区を知ろう集会」は総合的な学習の全校規模の取り組みでした。私は２，３，４年目に関わりました。昭和６３年の１年目は「ぶどうのことなら何でも聞いて」がテーマだったと聞きました。どの学年も自分たちでテーマを決めて，地域の方々から取材して，みんなで調査して保護者や住民の前で発表しました。子どもと一緒に取材に伺った時のことは，３０年も経つのに特別な空間・時間として私の記憶に刻まれています。私が子どもたちと取り組んだのは，「むかしの子どものあそびと生活」「水とのたたかい」「地域の発展に尽くした人々」です。

阪本辰彦先生が６年生と共に演じた「製糸工場の移り変わり」の劇は会場から笑いの声も上がる楽しいものでした。しかし，桑畑からぶどう畑へ。時代の大きな変わり目を先人たちはどう乗り越えたか。人と人のつながりの強さと決断力は，私たちの想像以上だと考えました。

歳を重ねて，「この地域の人々の生き様は本当に特別だ。そのことを歴史に刻みたい。百年先の人々に伝えたい。」と一層強く思うようになりました。

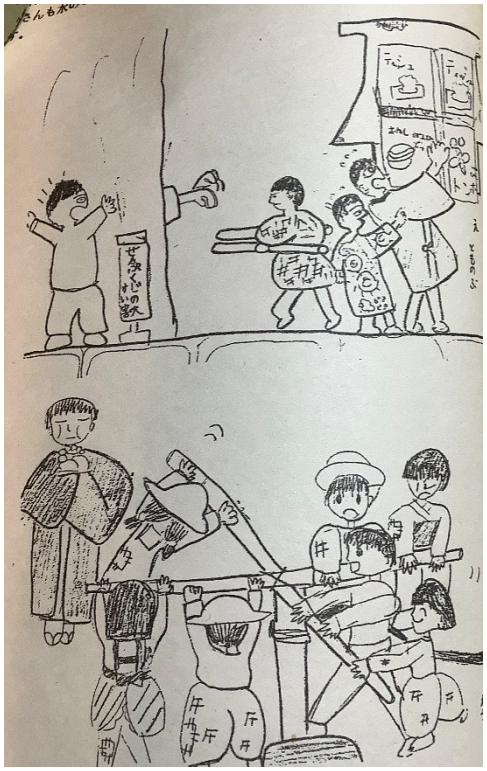
承継会の取り組みは半年でしたが，皆さんが心の中の宝として温めてきた思いを

言葉にしてくださいました。そして，「次は彼の話を聞きに行くように。」と道筋を作ってくださいました。特に初めて伺うお宅では，「雨宮緑の娘です。」で信用していただいて，この地区の遺産形成の様子がお話として残ることになりました。しかし，若い世代の話はなかなか集まりませんでした。その悩みをお話すると，それぞれのご近所の方が，「彼は若いががんばっている。話はしといてやる。」と推薦してくださいました。つまり人と人が繋がって，この今昔話は集められました。今は，１本の細い絆ですが，これを太くすることで祝地区の世界農業遺産は引き継がれ，新たな文化的景観をつくりながら始まる未来がきっと開けます。

この冊子を読んだ方は，「祝は昔から特別なんだ。すごい先輩たちに恵まれたんだ。この精神や業績を忘れずにいよう。」と，思って下さるでしょう。さらに，未来の人々がこの今昔話を読んだ時，祝に育つ者としての誇りを感じてもらえると信じます。次の世代が，新たな視点で取り組むことで，この世界農業遺産の輝きを増していってほしいものだと願っています。

テーマ
私たちの生まれ育った祝をもっともっと知ろう。

テーマ
その当時の祝の人たちは，どんな思いで，どんな願いをもって暮らしていたのだろう。



流されそうになった専福寺を車力さんと檀家衆で引っ張っているところを演じました。

23. ぶどうと共に生きた亡き父母をしのぶ

雨宮　正子

最近，実家の畑の草取りをしながら，よく子どもの頃のことを思い出します。両親は朝早くから夕方まで畑仕事で忙しく，私達姉弟は近所の兄さん姉さんたちと遊んでいました。夏休みは日川で一日中水遊びをして過ごしました。今の子どもと違ってお金もゲーム機もありませんでしたが，毎日本当に楽しい日々を過ごして成長しました。

高校卒業後，メルシャン勝沼工場で事務職として働いてから，塩山の商家に嫁ぎました。農家の仕事が大変なので，子どものころから他の仕事がいいと思っていたのですが，商売も一年中忙しくて大変でした。姑は働き者の上，料理上手でたくさんのことを教えてもらいました。

文農両道の父佐藤竜は，16 年前胆管癌のため 81 歳で亡くなりましたが，ぶどう栽培に加えて，学ぶことも好きでした。俳句や詩吟を学び，山梨県生涯学習課が運営している,シニアの学校であることぶき勧学院にも２年間通いました。父の死後，母まつよは 96 歳まで一人暮らしをすることになりましたが，しっかり者でしたので，私は時々買い物や病院通いのため車で送り迎えをするだけでした。

母はぶどうに生かされているような人で，毎年ぶどうの収穫後は，だんだん元気がなくなり，２月は特に調子が悪そうになりました。しかし，３月になると自然と元気が出て，畑仕事を朝早くからしました。

母は 70 歳の時，腕の骨折の手術してもらってから，25 年近く石和の今井整形に通いました。車で送り迎えしてくれるので，週２回の治療とリハビリのメニューもほとんど欠かさずしました。自転車こぎのトレーニングが特に好きだったようです。90 歳を過ぎてからは，注射で足の痛みを軽減するために通いました。

年を重ねるたびに難聴は進みましたが，市の健康センターでの入浴や友だちとの交流，今井整形の待合室でのおしゃべり，５区の老人クラブつむぎ会の行事を楽しみにしていました。特にお花見のことは，どこの公園だとかお花見弁当のことなどよく話してくれました。毎年仲間と一緒に和紙押絵の干支飾りを作り，玄関に飾りました。手先が器用で，90 歳の時から通ったデイサービスの「こもれび」では「私が一番年上なのに，タオルを一番多くたたんだよ。」と得意げでした。

2020 年国内で初感染を確認してから，コロナウイルスが全国に広まり，高齢者は特に注意が必要になりました。 楽しみも減りつまらなそうでしたが，こたつに当たりながら大相撲をテレビで見たり，ラジオを大きな音にして聞いたりしていました。

足を骨折して一人暮らしは無理になり，2022 年５月に「ぶどう畑」に入所しました。一度ガラス越しに弟夫婦と一緒に面会できました。８月半ば母が大好きなアジロンダックが熟してきたので，食べたいだろうと思い，私だけでしたがガラス越しの面会をしました。持参したアジロンを一房ぺろりと食べたのでうれしかったのですが，これが母との別れでした。

コロナウイルスの予防注射を ２ 回してありましたが，「ぶどう畑」で感染して厚生病院に救急車に乗って運ばれました。９月７日母は 97 歳で亡くなりました。組の皆さんや親しくしていただいていた方々との最後の別れもできませんでした。家族葬が増えていましたが，弟夫婦と「母さんもみんなとお別れしたいだろう。」と話し合い，セレモニーホールで葬儀をしました。

母亡きあと，私は実家の畑に野菜を作っています。自分で育てたジャガイモもキュウリも格別のおいしさです。ねぎはなかなか上手に作れません。こんな風に野菜を栽培し，草取りをしていると，亡き父母のぶどう作りの喜びや苦労が，少し分かってきたように思われるこの頃です。

母は祝小学校にお手拭きを届けるボランティア活動を仲間と共にしました。

写真　市川史子

祝五区老人クラブ
　平成２６年度つむぎ会総会
前列左から３人目が母のまつよ

24．保育園と小学校時代の思い出と記念樹伐採

川崎　博

さくら保育園第１期卒業生でした。（専福寺）

桜の花に囲まれた下岩崎の専福寺は，当時活発な保育園活動で腕白な子供が多かったと思います。川崎茂子先生，白沢先生，秋山先生に厳しく指導を受けたことを覚えています。当時は一宮町の南野呂からも何人かが通園しておりました。

鉄棒や砂遊びなどで，先生たちに自由にさせて頂きました。自分で危険を感じること，保護者がハラハラするようなことも結構あったと思います。

お遊戯会の指導も厳しく，何度も練習をさせられました。おかげで小学校，中学校の生活の中で，しばし，さくら保育園の卒園者は，自主的で活発だと言われました。幼児の時の経験や教えが浸透していたのでしょう。そして，昭和２８年３月の卒業で，さくら保園の１期の終了生です。

昭和２８年３月さくら保育園卒園式

祝小学校に入学した時，２クラス，およそ１００名がおりました。野沢校長，担任が岡崎先生と坂本先生でした。何事にも活発積極的な行動は，さくら保育園の卒園者でした。この時の地元の同級生は，その後４２歳の厄払いの神事を機に，同級生の集いや旅行を続けてきました。喜寿を迎え参加者も少なくなりましたが，今では，地元の有志で同級生の無尽を毎月開催して，思い出を語る時間となっています。

昭和２８年４月　祝小学校入学

昭和３４年甲州市立祝小学校を卒業した同級生は，喜寿を迎えました。卒業記念に植えたヒマラヤシーダは，私たちの人生と共に育ち，見上げるばかりの大きさになっていました。当時はすくすくと育つようにとどこの学校も記念樹を植えたものです。

しかし，この大木が大きく育ち，老木となり災害時や電線に架かるなどの危険もありそうだという事で，伐採してほしいという依頼が学校側からありました。通学

の子供たちや通行の車なども事故になってはと思い，思い出の記念樹を伐採することにしました。当日は，氷川神社の高野宮司さんの神事，学校長や卒業生の代表が立ち合い重機を使っての伐採処理でした。この模様は地元の CATV でも放送されました。

毎日見慣れた卒業記念樹の伐採は，一末の寂しさもありましたが，この木を見るたびに同級生の顔や小学校時代の思い出が懐かしく蘇ってきます。

（昭和３４年祝小学校卒業　川崎　博）

写真は，伐採の時の神事　（2022 年８月８日）

25．甲州金出土

金井　正美

甲州金とは日本で初めて体系的に整備された貨幣制度，およびそれに用いられた金貨です。戦国時代に武田氏の領国で流通していたと言われ，江戸時代の文政年間まで鋳造されていました。

昭和 46 年 4 月 1 日，屋敷のぶどう棚の地下 40 センチメートルのところから古銭がバケツ一杯出てきました。枯れ葉などを埋めようとして掘った大きな穴の底にひもで結ばれて並べられていたような状態でした。

また 5 月 1 日，前の穴のそばに同じような穴を掘ると直径４０センチくらいの石が 6 個，円をなすように並んでいるように見えました。石を持ち上げると下にピカピカ光るものが見え驚きました。

それが下の写真の甲州金です。後に上野晴朗先生に見ていただくと，「これはすごい。刻印がない。」と驚かれました。そして，「一つの金貨を造るのにすごく大勢の人の汗と涙の日々がある。その思いが込められていることを考えて大事にしなさい。」とおっしゃいました。私が持っているより，大勢の方々に見て欲しいと思い，現在は山梨県立博物館が所蔵しています。

蛭藻金　形が蛭藻に似ていることからこう呼ばれる。後の大判小判のさきがけともされる。2 枚

碁石金　金の粒で貨幣と言うよりも軍用金や恩賞に使われたものであった。18 個

26．はがき絵人生

鈴木　八束

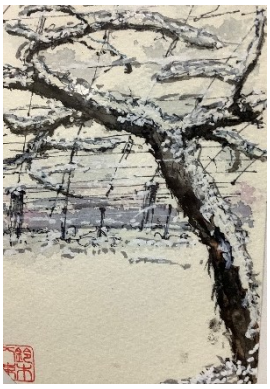
広告会社を退職し，第二の職場は畑。ペンを剪定バサミに持ち替えて，さあ葡萄作りと意気こむと同時に大雪で棚は落ち，樹は折れ，一面白い平地が眼下に広がる。まさに全て一からのスタートに着く。

慣れぬ葡萄作りに解らぬ毎日。諸先輩の指導もただハイハイの空返事の悪戦苦闘の続く中，気分転換に何ができるかと考える。手持ち無沙汰で思い付いたのは，葉書きサイズの絵位描けるだろうということ。再びペンを執り，新聞に載った興味のある写真があれば模写して，一日一枚朝に昼に夕に時を気にせず畑仕事とハガキ絵の二足のわらじ。画題がなければ窓越しの風景や手元の花やぶどうや器など。音楽を聴きながら時を忘れ，まさに自分の境地の悦に入る・・・・

峡東地域は起伏に富んだ自然の地。山，川の地形を生かし，先人の努力で多種の果樹が織りなす風景。その色と形を描き続けて２０年。「下手な横好き」の身として筆を執る我が人生の「喜怒哀楽」は，「記土愛楽」の二刀流，至福の至り。

はがき絵　葡萄とワイン

はがき絵　秋と冬



27. 蒼龍の歴史と日本ワインのこれから

蒼龍葡萄酒株式会社

代表取締役社長　　鈴木　卓偉

蒼龍と言う社名は，祖父の重兵衛がつけたもので，古いぶどう倉庫のところに「蒼龍園」と書かれた看板がかかっています。祖父は漢文に親しんでいたので，中国の故事にある東を守る神の名を付けたと思われます。強い神のようで，ひらがな表記ですが，海上自衛隊の潜水艦の名前にもなっています。

私の叔父は宮崎光太郎の長女の絹と結婚したのですが，死別してサンフランシスコに親戚と一緒に移住しました。始めの頃の商売は，浮世絵や日本の書画の販売で，祖父は家の物や買い集めたものを送りましたが，1906 年（明治３９年）のサンフランシスコ地震による大火で焼失してしまったと聞いています。第２次世界大戦中は日本人収容所に入れられて苦労をしたと思います。

創業は 1899 年（明治 32 年），地域の葡萄生産者が力を合わせて作った共同醸造所としてワインを作りはじめました。その頃は，自由に作って飲んでよかったのですが，大正になると免許が必要で，税金がかかるようになって会社組織にしたそうです。1943 年（昭和１８年）には農家の株を譲ってもらって，父重富の個人会社になりました。私は，県外の会社に勤めていましたが，1971 年 27 歳で呼び戻されました。その頃は醸造量もわずかで，配達は三輪車でしていました。

1988 年 NHK の大河ドラマで「武田信玄」が中井貴一主演で放映された時，山梨に関心が集まり観光客も増え，県産ワインが売れに売れました。

また，1996 年無添加ワインを発売したところ評判で，わが社の稼ぎ頭になりました。輸入した濃縮果汁を発酵させて作る赤ワインで，いつでも大量に作れましたが，２，３年で他社も同じものを作るようになりました。

1999 年，社屋や工場を新設す

ることができたのは，信玄ブームと無添加ワインのおかげです。2000 年に株式会社になりましたので，若い会社とも言えると思います。現在の事業内容は，地元のぶどうで作るワインと濃縮果汁で作るワインがほとんどで，少量の梅酒や調味料の原料を醸造し，卸しています。

2018 年，日本産ぶどうで国内醸造されたワインを日本ワイン，輸入濃縮果汁を使用して国内で醸造されたワインを日本ワイン以外の国内製造ワインとする表示になりました。

産地が山梨だけの甲州ぶどうは，ここ 1，2 年余り気味です。日本ワインの値段が上がり，輸入ワインと変わらない値段で，勝ち抜けるかわかりません。

温暖化で赤ワイン用のぶどうが赤くならず，ベリーA もあまり人気がなく，輸入の赤ワインとは競争にならないので，着色の良い品種「ソワノワール」の苗木が山梨県から配られました。自社圃場で栽培する醸造用ブドウは，買い取りぶどうの 3 倍費用がかかります。農家に作ってもらう方がいいのですが，甲州やベリーA を新品種に植え替えて成木になるまでは何年もかかり，その畑からの収入はしばらくないので，生産者の皆さんがすぐに対応できることではありません。ただ，この状況をぶどう生産者の皆さんに理解していただくことは大事だと思います。

今は東京のデパートや酒屋に日本ワインがあまり飾ってない状況です。酒類の中でワインの値段が高く，日本ワインは 2000 円以上の値段では売れません。同じくらいの値段なら世界で有名な輸入ワインが飲まれます。ワインは，ヨーロッパが先駆者なので，対抗は大変です。

昔は農家がぶどうを持ち込んで共同で絞ったワインを自分たちで飲んでいましたが，ワインは買った方が安く飲めるようになってきています。祝地区の小規模ワイナリーの生産量は以前より減っているのではないかと思います。

また大手のメルシャンは，藤沢工場がワインの生産拠点となっていて，畑のない神奈川県がこの藤沢工場のワイン生産量で日本一です。勝沼工場では契約農家から買ったぶどうと自社の畑でとれたぶどうで愛好家向きの本格ワインを作っているようです。

わが社と同規模の中堅ワイナリーは何とかやっていますが，将来的にはどうなるか分かりません。今からは，世界の市場で日本のワインがどうみられるのかという問題です。

28. 剪定を学んだ巣五六公民館の女性部員と協力者たち

鈴木　かほる

私は一宮町の坪井の桃とぶどうの専業農家から上岩崎に嫁いできました。「結婚しても農地があったほうがいいな。何もないのはつまらない。」と思っていました。1960年（昭和35年）からジベつけが始まり，嫁ぐ前に兄たちと一緒に初めて経験しました。

夫はサラリーマンでしたので，うちの畑は舅がぶどうを作っていました。その舅は68歳の時，脳梗塞で倒れ，3年介護しました。舅が亡くなってからは，私が主力でぶどう作りをしなければなりません。剪定は人に頼んでしてもらっていましたが，人件費がかかって大変だと実家の兄に相談したところ，「剪定を覚えて自分でしたらいい。」というアドバイスをもらいました。

この頃はぶどうの値段が良かったのでデラブドウが3反歩あれば暮らしていけた時代です。他に甲州が2反歩あれば，貯金ができました。生活費もかからなかったですね。1年間に100～150万円あれば十分暮らせた時代でした。1997年（昭和52年）に中央道とバイアスが開通して，岩崎地区は農地が5分の1減りました。遠い昔の話です。

減った農地対策として県農地開発公社が，自然休養村事業の中の園地整備事業で，岩崎山を開墾してブドウ園を広げ，農道も整備されました。その岩崎山で棚掛けの名人の田中孫三郎さんを始め，岩崎農協の組合員さんたちが，流しそうめんを計画して楽しんだことがありました。みんなでお花見をしたり，カラオケをしたり楽しかったですね。巣五六公民館主催の行事も雨宮正良さんのお母さんたちが踊りを教えてくれたので，みんなで踊ってすごいにぎやかで楽しい時代でした。気持ちとお金に余裕があった時代です。

5区メンバー	木下さゑ子さん	堀田寿美江さん	鈴木照美さん
	佐藤郁子さん	佐藤やよいさん	天野てる子さん
	福田和美さん	雨宮数野さん	鈴木かほる
6区メンバー	古屋典子さん	川崎治子さん	芹澤福子さん
	雨宮和美さん	上野ひろ子さん	大島博子さん

今90歳前後の男性たちは，昭和59年岩崎果樹研究会を発足し，大勢

でぶどう作りの勉強に取り組んでいました。あちこち視察に行って研究を深めていました。田中孫三郎さんが先頭に立ってすすめていたと思います。

そこで,「巣五六公民館の女性部もぶどうの剪定の勉強会をしよう。」と呼びかけたところ,15 人が集まりました。お嫁に来た人がほとんどです。剪定ができないとぶどう作りはできません。農地が少ない家は兼業しないと生活が苦しいので，夫が外で働き，妻が畑をする兼業農家が多かったです。うちの組は 14 軒が兼業で２件が専業でした。

指導員山村健さん
山村久子さん所蔵

剪定は一番大切な基本ですが，簡単には覚えることはできません。それで，農協の山田五郎衛組合長にお願いに行きました。「指導員の山村健さんにご指導をお願いしたい。」と伝えると山村さんは快く引き受けてくださいました。それからずっと指導していただきました。

山梨県果樹園芸会の役員をしていた３区の鈴木武雄さんが，誘ってくれてそこでも勉強しました。剪定講習を岩崎果樹園芸会も始めましたので，女性部のメンバーも行って学びました。土屋長男先生の畑にも行って学びました。岩崎の講習会は山村さんが熱心に指導して下さったおかげで，私は剪定を覚えることができました。山村さんの剪定は，県下で一番だと言われていました。５区では,「上岩崎のぶどうの先生」と言われた福田一郎さんにも教えてもらいました。棚かけの先生でもあり，本当に親切に教えてくれました。岩崎のぶどう研究会の人たちが，いいぶどうを作ってたのでそこでも教えてもらいました。私達はよく学びました。

公民館活動として始めたので，みんな参加しやすかったのかもしれません。それから，農協指導部の組織へ移り，岩崎農協女性部として活動することになりました。

棚下に行ってみれば，切る枝，残す枝の判断はすぐできるようになりました。ぶどう作りは剪定,誘引，消毒，摘粒とその他いっぱいやることがあります。メンバーの皆さんには，すべての面で教えていただいたことが役立っていると思います。どんな仕事も苦労が多く，大変ですけど疲れを残さないように楽しくやりましょう。

フラダンスと子どもたちの演技は巣五六公民館活動

立ち毛品評会甲州ぶどうの部で最優秀賞をとる仲間もいて，あの時大勢の方が指導して下さったから私たちの今があると，関係者の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

29．挑戦するからぶどう作りは楽しい

金井　一正

甲斐路クラブは，昭和 36 年開園からメンバーが高齢化するまで 30 年ほど続きました。始めは 7 軒で最後は 4 軒でした。グループ事業は長続きしないと思われていて，世間から七不思議だと言われました。

読売旅行会が企画して，町からやってみないかという話があったので，近所の生産者が相談して始めたものです。大変なこともありましたが，大勢のお客さんとの交流は本当に楽しかったです。

それまでの観光客はぶどうを眺め，お土産はかごに詰められたものを買うというスタイルでした。ぶどう狩りとジンギスカン鍋の他，民泊もしました。女性陣の負担は大きかったと思いますが，男性陣も鈴木保さんを見習い，マトンの盛り付けでは朴葉を皿代わりにしたり，ミントを肉の上に飾ったり，こびりついた鍋を洗ったり，頑張りました。女性陣が作ったタレは味が評判で，東京のレストランのコックさんが持ち帰ったほどです。調合は私も手伝ったので，覚えています。

どの家の畑もやや遠かったのですが，観光客の皆さんは，文句一つ言わずついてきてくれました。中にはズルをする人もいましたが，自分ではさみを使ってもぐことを楽しみ，ぶどうを美味しいと言って喜んでもらえてうれしかったです。始めた当時はほとんど甲州葡萄でしたので，ただ出荷するより，東京のお客さんとの交流は新鮮でした。しかし，私たちの成功はすぐ話題になり，日川の稲荷街道や御坂，勝沼街道にもぶどう狩り園が並びました。

1987 年マンズワイン社の志村富男氏が被覆垣根方式のぶどう栽培方法を考案しました。そのマンズレインカット栽培を県の「チャレンジ農業」で，やってみないかという話があったので挑戦しました。岩崎では一人だけです。

「雨よけがつくので，雨に弱い西洋種のぶどう向きで，棚づくりと違って誰でも作れて座って作業ができる。」ということでしたが，始めはやり方がわからず，難しかったです。草生栽培を併用するといいと言われてやって見たけれど，ぶどうの葉っぱが黄色くなり枯れるのかと思う時もありました。草に肥料分を取られたのではと思い，肥料を少しやると元気になってほっとしたこともありました。甲斐路も育

てましたが，この方式でも腐りが少しは出ました。ただ棚づくりより消毒の回数は少なくて済むという利点はありました。

草生栽培はこの辺りでは余り見かけませんが，他県では山梨より広く取り入れられています。始めはケンタッキーブルーグラスの種をまきましたが，今は雑草栽培です。草丈が伸びてきたら乗用草刈り機モアで刈って，刈り取った草が肥料になるので，肥料は少なくて済んでいます。また除草剤の使用は部分的です。環境にも配慮した良い栽培方法だと実践してみて分かりました。

「精農は土を作り，駄農は草を作る。」と言う諺があるので，人々は清耕栽培が良き農家の印で，早生栽培は駄農と考え，なかなか転換できないのではないかと思います。私の実践しているのは，自然を生かした土作りで，土作りをおろそかにして草を作っているわけではありません。

周りの人からは，マンズ方式だと収穫量は少ない上に今度は雑草を育てて，何やってんだという感じで見られているように思います。チャレンジは失敗が付きものですが，挑戦してぶどうを作ることは学ぶことも多く楽しいです。

ずっとデラと甲州とベリーＡが主要なぶどうだったので，甲斐路は農家の救世種で大ヒット，人気がありました。丸山宇太郎さんが，観光客の前で甲斐路を転がして，粒がしっかり軸についていることを自慢したことを覚えています。税務署が飛行機を飛ばして，ぶどう棚の航空写真を撮って，葉の色で申告に嘘がないか調べているというううわさ話が出たほどの高級ぶどうでした。作り始めの頃は病気になりにくかったのですが，耐性がなくなってきて病気に弱い，雨に弱いぶどうになったのではないかと考えます。また，ジベ処理をして種無しにはできてもいい房にならないので，甲斐路は種ありですが，農家を助けてくれたぶどうです。今はシャインマスカットに助けられています。

今までの棚かけは，技術の継承ができなくなっています。単管パイプの棚かけを業者に頼んだのは，更地からなら県や市の補助金が出るということで申し込んでみました。古い棚の資材が使えるなら，今までの棚かけは安いかもしれませんが，新しく買うとなるとコンクリートの杭は値段が２，３年前の３倍ほどの値段になってきたうえにすごく重い。パイプは片手で持てる位軽いのが長所なので，これに挑戦してみようと前から考えていました。伝統は引き継ぐべきだと思うけれど，挑戦もしないで同じことをただ続けるのは，私の性に合いません。

醸造用の甲州を以前は糖度が高ければ高い値段で買ってくれたのに，今はみな同じです。それには，生産者が上によく色づいたぶどうを乗せ，確かにそこの糖度は高いが，下の方は低いということがあったことも原因ではないかと思います。また，ワインの作り方が変わってきているのも影響しているのかもしれません。昔，甲州

は 10 月から 11 月の買い取りでしたが，今は 9 月からです。

日本の赤ワインは，輸入赤ワインに絶対かないません。なぜなら日本の赤ワイン用のぶどうが，ほとんどがベリーA だからです。農家は，輸入ものを嫌いますが，赤ワインは輸入ものがうまい。以前からベリーA のワインを作っていないワイナリーもあります。この先，農業遺産を引き継いで行くためには，将来醸造用ぶどうとして何が求められているのかと言う，ワイナリー側からの情報は地域全体が学ぶ必要のあることです。

後継者がいないことは大問題ですが，私は息子に農業をやってくれとは言っていません。どう生きるかは，本人が決めることが大事だと思っています。実際シャインマスカットが出てくるまでは，言える状況ではありませんでした。

ぶどう販売で収入が多くなることが見込めない上に，大きな自然災害が起きた時，収入がゼロになるだけでなく，立て直しにはお金と時間がかかることを考えました。収入はぶどうが収穫できて決まるのですから，最悪のことを考えると常に不安はあります。

長年栽培してみて「桃はなるもの，ぶどうは作るもの。」に「日本のぶどうは，芸術品。」を付け加えたいと思うこの頃です。

泉公民館に掲示してある写真を使用させていただきました。
甲斐路クラブで，公民館活動後の食事会。

30. 私の人生の歩みとこれからの提案

雨宮　安洋

私の父は静岡で警察官をしていましたが，私が 1 歳 7 か月，弟が生まれる 1 か月前に戦死しました。母は，祖父の「山梨に戻って子どもを育てなさい。」と言う言葉に従って，勝沼で暮らすことにしました。母の弟で雨宮家の跡取りも戦死していたので，長男の私は相原姓を継ぎ，弟が雨宮家を継ぐことがよいと祖父は考えたようです。

弟は地元の学校でしたが，私は祝小学校を卒業すると甲府の中高から日大に進み測量士として東京で生活していました。妻は栄養士で武田食品の社員教育担当インストラクターとして働いていましたが，昭和 47 年に母から帰って来てほしいと言われました。母一人で農業をやらせるわけにはいかないので，妻と相談して岩崎に戻ってきました。ちょうど勝沼町が自然休養村指定を受け，民宿の募集があったのと，母の隠居用として建てたばかりの家が空いていたので，1973 年（昭和 48 年）から妻が民宿「岩崎荘」をすることにしました。私は，1 反 7 畝のハウスと 1 反 5 畝のサイドレスと露地約 3 反歩のぶどうを栽培して共に稼ぎました。

民宿　岩崎荘の前で記念写真　中央が妻夏生

長男と次男が大学を卒業した時に順にハウスとサイドレスを辞めました。「民宿は３０年したからもうやめよう。」と決めたのが 2003 年（平成 15 年）です。

妻は年上ですから 75 歳の時から畑仕事はしないで家事だけと決めましたが，2 年前（2023 年）転んで身体が不自由になり軽い認知症も発症しました。私も 75 歳で脊椎管狭窄症になりました。その後何度か肉体的精神的疲労のため下血して入院したので，80 才の時，生食用のブドウの木を伐採し，主にワイン用のブドウに替えました。1 年間自宅で妻をデイサービスやショートステイを利用して，介護しました。しかし，妻は身体機能が衰え，去年（２０２４年）の正月「ぶどう畑」に入所しました。以後私は一人暮らしです。

岩崎は平均４反百姓ですので，狭い畑からの収入だけでは生活できない農家がほ

とんどです。だから２区の 50 軒位の農家で，学校を出て農家を継いだのは親に経営能力がある２人だけです。彼らも 40 代と 50 代です。他はサラリーマンになっていますので，高齢化が進んでいます。夫婦２人で勤めていれば老後は夫婦で 30～40 万の年金が支給されます。２反歩位の畑で自家用のシャインか葡萄酒用ブドウを作って健康的に過ごすのが，賢い方法だと思います。心身共に豊かに暮らすのに理想的です。わたしには結婚している息子が２人いますが，自分で今後のことはよく考えて決めなさいと伝えています。ぶどうが良かったのは私たちの親世代までです。

わたしの姪で元衆議院議員の宮川典子が生きていたなら，「第一次産業は大事にしないと食料問題が深刻になる。公務員の厚生年金の半分は国の負担，会社員の厚生年金の半分は会社の負担なのだから農民の年金も自己負担 5 万，国負担 5 万で 10 万にすべきだ。」と言いたいです。

祝２区の農家は後期高齢者が目立ちます。先の２人を除くと，専業農家で私が 83 歳なのに下から３番目です。他は定年後に継いだ高齢者です。自然災害があっても年金で食べていけます。農家の夫婦２人で 1000 万円の収入があっても経営費４割ですから 600 万。収入は大卒サラリーマンの初任給平均 22 万円，ボーナス 50 万円を加えて年収３１４万円と同じくらいで，国民年金は月６，８万円。そんなことで誰が百姓をするでしょう。私みたいに遺児で最初から苦労してきた人は，すでに亡くなっているか、体を壊して私のように農業を縮小しています。

今後は，経営能力のある人が法人組織を作り，農民はサラリーマンとして働き，厚生年金に入れれば，健康的に働けて老後も安心な暮らしができます。農業遺産にこだわらないで，変革を考えることが大事ではないかと考えます。小さい畑は合わせて大きくできます。個人では SS やトラクターやモアを買わなくてよく，広い作業場や駐車場も必要ありません。自給率もアップし，65 歳から夫婦で 30～40 万の厚生年金暮らしができます。この先は，そんなふうになるように願っています。

甲州市遺族会 護国神社参拝記念　平成29年2月9日

今は，1 週間に 15 分妻と会うのが楽しみです。いくつもあった無尽は甲府の中学校の同級生のみになりました。私は中学高校が地元でないので，親しい同級生は少なく，一人暮らしでは話をする機会が本当にわずかしかありません。そんな毎日ですので，最近グランドゴルフの会と健康マージャンクラブに入会して少しは楽しんでいます。

31．ぶどう栽培と棚かけ 50 年

雨宮　芳男

私は甲府市中道町において６人兄弟の４男として生まれました。11 年間，東京で勤めをしていましたが，29 歳の時，叔父の世話で４人姉妹の長女の妻と結婚して二人の息子を育てました。妻には自分の希望する道に進みたいという夢があったので悩んだ末，長女という立場から結婚して先祖代々の葡萄畑を守るという道を選択したそうです。

去年姑が 104 歳の長寿で亡くなりました。妻は長い在宅介護でしたので，夫婦で旅行に行くことはできませんでした。私は，地域のいろいろな関係で，国内は北海道から沖縄まで，国外は韓国にそれぞれの仲間と旅行をしました。今は皆，年を取り一つの会だけ近場で会食をしています。

「うちの棚くらい直せるように，雨宮正良さんに棚かけを教わったらどうだ。」という舅の勧めで始めた棚かけは，50 年以上になります。昔は，どの区にも数人のメンバーで，棚かけをする人たちがいました。棚かけは，畑の広さだけでなく，土地の形や傾斜の具合，土の硬さなどで仕上がる日数が変わります。針金やコンクリートの杭は，施主さんに用意してもらうか，一緒に買いそろえて取り掛かります。初めは，慣れないことばかりで難しかったのですが，１年するとこつが分かるようになりました。正良さんは仕事が丁寧なので，自然と私も丁寧な仕事をするように心がけました。

強く印象に残っているのは，2014 年（平成 26 年）２月の大雪でつぶれた棚をいくつもかけ直したことです。思い出深いのは，大一ぶどう園の棚かけです。杭が栗の木だったのをコンクリートにして，オールステンレスの４番線や８番線などで５反歩完成させるのは大変でした。近くを通る時は，当時を思い出し，なつかしい気持ちになります。

ぶどう作りの思い出は，2009 年（平成 21 年）県果樹共進会ジベデラの部門で思いがけなく最優秀賞をいただきました。上岩崎の土壌は，デラや甲州に適していると思います。現在は，シャインマスカットが主でデラウエアとピオーネと甲州を少し，農協の共選で出荷しています。昔は，共選に出労があって忙しかったですが，今はアルバイトでやってくれているので助かっています。

私が 50 年取り組んだ棚かけの技術は，何とか若い人に引き継ぐことができそうです。しかし，ぶどう栽培の担い手がなく荒れたままの畑が目に付くようになってきて本当に心配です。ぶどう畑が広がる，この美しい景色がこの先も引き継がれてほしいものです。

32. 雨の日が辛かった新聞配達

秋山　紀勝

私は昭和 23 年（1948 年）４月，祝小に入学した。２クラスで合わせて約 110 人だった。木造２階建ての古い校舎だった。

６年生（５年生だったかも知れないが）になると新聞配達が始まった。中学生全員と一緒に毎日，交代で各家庭に新聞を配達するのだが，自分の小遣いではなくて,「修学旅行」費用の一部にするためだった。

私が所属していたグループの担当は，２区の上組（今でいえば３，４組）で，小学生と中学１～３年合わせて 10 人くらいで，14，５軒の配達を担当した。

当番に当たる日は，朝飯前の 30 分くらいで朝刊を配達するので，自ずから早起きになった。身支度を整えると，新聞販売店が新聞を置いて行く「当番の家」に行って，新聞を受け取った。

春から秋まで配達は爽快で気分が良かった。しかし，雨の日は辛かった。特に秋の台風の日は「新聞を濡らさない。」ようにと大変だった。

ある時，台風の激しい雨の中，新聞を届けたら，その家のおばさんが「のりちゃん，雨の中，ご苦労さん。」と言って，せんべいを２，３枚くれた。あの時のせんべいの味は，70 年以上も経った今も忘れられない。このおばさんは，20 年くらい前に 97 歳で旅立ったが,新聞配達の思い出を抱きしめながら,葬儀の手伝いをして，出棺の際は心を込めて合掌した。

その日の新聞配達が終わると，縦 10ｃｍ横 25ｃｍくらいの「板」を，翌日の配達当番の仲間がいる家に届けた。この「板」には，新聞を取っている家の名前と購読している新聞名が書いてあった。

夕刊（当時は夕刊があった）を配るために，遊んでいても「俺，今日は夕刊配達だから。」と言って先に帰った。

この新聞配達は，子供クラブの活動の一環として行われていた。昭和 50 年代はまだ配達が行われていたようだが，何時ころ中止されたかは知らない。今，私が住んでいる地域は大人が配達している。

令和の時代，中学生や高校生が新聞配達のアルバイトをしたい，と言っても親の多くは「そんな時間があったら勉強しなさい。」と言って了承しないだろう。

昭和 40 年ころ，山田太郎が歌った演歌に「新聞少年」がある。

「僕のアダナを知ってるかい　朝刊太郎と云うんだぜ　　新聞くばってもう３月　雨や嵐にぁ慣れたけど　やっぱり夜明けは眠たいな……」

今の若い人は全く理解できないだろうが，こんな歌がヒットした時代だった。私が新聞配達したのは，そんな時代で，とっても懐かしい。

たこあげ

松本良男さんが子どもの頃の思い出。今から 100 年まえの冬休みになった 12 月末。「つり橋で凧を上げよう。」と橋のたもとに集まった。戦死してしまった奥山正君は，とんびだこで，下級生でやはり戦死してしまった宮本源吉君の凧は武者絵の大きい凧だった。･･･私は今もつり橋の勇壮な姿を忘れず，凧をあげた日のゆうゆうたる白雲の中に，今は亡き友が写って残っているかを思い，切々たる情にかられます。

松本良男様　文と絵

木製のがっちりした支柱は，電柱ぐらい太い角柱を 4 本組んであって，10cm 位の橋をつる鋼鉄線を支えていた。橋の長さは約70mあり，荷馬車が楽々と通行できる幅であった。また，ユラリユラリ揺れないためだったか，重しの縁の下の木組みもがっちりした橋だった。

松本良男様　文と絵

33．子育ても仕事もボランティア活動も楽しみました

川崎　阿也免（あやめ）

昔は物がなかったので，お金のある家もない家も子どもたちはみな同じで，一緒に楽しく遊びました。雪が降ると父がミカンの入っていた木箱に，半分に割った長い竹を二本金槌で打ち付けて橇を造ってくれたので坂道で滑りました。下駄スキーも楽しかったです。

父が繭を集めていたので，母が糸取りをして，染めて，機織りをして絹の洋服を作ってくれました。みんながセーラー服なのに私だけ違って恥ずかしかったのをよく覚えています。母はニワトリを飼って卵を産ませたり，アンゴラ兎を育てて毛を刈って毛糸と交換したり，具合が悪いと薬草を取って来て飲ましてくれたり，いろいろな知恵と工夫をこらして生活していました。

私は，東京で働きながら通信教育で学び，虎ノ門に通って和文・英文タイプ両方の一級の資格を取りました。しかし，東京の中小企業ではタイプをする機会はあまりなく，事務仕事ばかりでした。そんな時に母の具合が悪いということで山梨に帰って来て，甲府の「ひまわり孔板社」に勤めました。そこでの仕事は学校の新聞やお便り，テスト問題や旅行のしおりなどの作成が多かったです。奥さんが社長で，旦那さんが学校の先生だったという関係で，学校関係の仕事を６人のタイピストでこなしました。毎日タイプを打つことができ，それが一番楽しかったです。しかし，コピー機が普及し始め，だんだんタイピストの仕事が少なくなっていきました。

結婚してから，本醸や藤井の共選所の事務の仕事などもしました。しかし，子どもの行事などで休みたくても休めず，ある程度自由が認められる保険の勧誘の仕事に転職しました。その保険会社の企画で，イタリア，香港，中国，ハワイ旅行に行かせてもらえ，定年まで楽しく生き生き働くことができました。

50 年前，子育て中でしたが「かつぬまボランティア会」に所属しました。勤めていた時は，視覚障害者のための「声の広報活動」を主に受け持ちました。当時は 5，60 人の仲間がいて，『できることから始めよう』を合言葉に活動していました。60 歳からは，福祉施設訪問活動やぶどう祭り・マラソン大会などの手伝いなど，楽しみながら活動しました。

健康センターで一人暮らしのお年寄りにお昼を出す時などのお手伝いに行くこ

ともありました。甲州市の老人クラブの運動会では，味噌汁を作るなどの手伝いをしていました。景品が良かったので,「ボランティアに加入すれば，味噌・醤油・砂糖・ソース等豪華景品で調味料は揃ってしまうよ。」と祝地区の人に言って参加を勧めました。

また若手をボランティアへ勧誘することもしました。勝沼地区に引っ越してきてから家の長男の嫁さんやお隣を誘ったところ，快く入ってくれました。昨年運動会の時，祝２区の老人クラブの会長さんや祝６区の皆さんが「ボランティア，ご苦労さん！」と嫁さんに声をかけてくれたので大変励みになったようです。嫁さんは仕事をしていて普段は忙しいけど，ボランティア活動は楽しいと言っています。

かつぬまボランティア会の一員として活動していた頃，たまたま三枝貴久子さんが代表の「勝沼人形劇団　葡萄の実」が活動しているところを見て,「面白い！私もやってみたい！」と思って入団したのは 60 代でした。メンバーは 20 代から 70 代までの女性 15 人でした。貴久子さんは脚本を書くだけでなく，司会もとても上手な人です。劇団を始めた頃は，みんなに笑いを届けるのが目的だったようです。せりふは甲州弁で，人形はみんな手作りです。日本農業新聞や読売新聞が活動の様子を掲載してくれたおかげで，大月にも長野にも公演に行きました。長野では毎年来てほしいと言って，帰るとき次の年の予約をしてくれました。農家の嫁不足や高齢化や環境問題などがテーマでした。家のことや他のことを何も考えずに没頭できたのが良かったのかと思います。メンバーの高齢化で今は，７，８人で活動を続けています。

町のボランティア活動なので以前は補助金が出ましたが，今はそれもなくなり，公演後にいただく謝礼金などで人形を作り，劇に必要なのものを購入しています。工夫して人形を作ったり，忙しい中で練習したりと大変な時もありましたが，本当に楽しかったです。現在は，ボランティア団体からは離れ，勝沼人形劇団として独立しています。

「葡萄の実」は，団員が演じる劇もしました。保育園や幼稚園，小学校，学童などの子どもに見てもらう時は人形劇だけですが，演劇は老人クラブや敬老会や施設の皆さんに見ていただく時で，楽しい内容にしました。男女共同参画推進に関する内容もあり，私は背が高いので男性の役が多かったです。男女共同参画という考え方が浸透するのは，まだまだかなと思いますが，息子たちを見ていると実践しているので，私たちがしてきたことが多少なりとも役立ったのではないかと思っています。周りの人の笑顔を見ると私も笑顔になります。そんなボランティア活動が長く続くよう，若い皆さんにボランティア参加を呼びかけたいです。

高野八重子先生の奮闘があって，今の勝沼町の学校給食がある

高野先生が，栄養士として祝小学校に勤務していた時，町内小学校の新校舎建設の件が議会で話し合われた。まず給食室をどうするかが話し合われ議会ではそれまでの各校方式をやめ，人件費節約のために給食センター方式が賛成多数を占めることとなった。

高野先生は，校舎建築が祝小から始まり，ここでがんばらないと町内４校の給食がセンター方式になってしまうと心配し，町や議会に自校方式の継続を強く希望した。栄養面では問題はないが，学校別の調理場の方が家庭のような食事をとることができ，寒いときは温かく，暑いときは冷たいものが食べられ，残飯も少ない。また子どもたちの満足度は，精神面に大きく影響する。学校の職員も高野先生と同じ考えだったが，どうすることもできず気をもんでいた。

その後，「高野先生のおかげで各校方式になった。」という話を聞いて本当にうれしかった。何年かして高野先生が亡くなって，このことはみんなの記憶から消えてしまった。

雨宮正良会長とこの話をしたところ，もう少し詳しいことが判明した。正良さんが祝小 PTA の給食部長をしていた時のことで，先進校を視察して再度検討することになり，そのレポートを正良さんが書いて各校方式の利点を報告した。それで佐藤町長も議会も理解してくれて，今も各校方式が続いている。栄養士と PTA の頑張りの勝利がどれほど大きいことか。1978 年鉄筋三階建ての給食室もある校舎が完成した。勝沼の子どもたちは，学校の調理員さんの作る出来立てのおいしい給食を今も食べている。

文責　市川史子

祝小学校校舎落成記念　昭和 53 年 12 月 26 日
後列左端が高野八重子栄養士

34. 自然災害や病気を乗り越え，ブドウ作り一筋

丹沢　英一

山梨県の峡東３市が世界農業遺産に認定されたこと，まことにおめでとうございます。

私は昭和 16 年（1941 年），東八代郡祝村に生まれました。真珠湾攻撃で第二次世界大戦が始まった年であります。子どもの頃の記憶ですから定かではありませんが，ブドウの出荷は竹かごで，近くには数軒の「かごやさん」がありました。かごは麦わらで化粧し，ブドウを詰め，２つ重ねて「弓竹」を斜めに差して縄で縛り，各家の荷印（例 ）を書いて集落の小屋に届け，石炭車のような車で市場に出荷していました。1950 年朝鮮戦争が始まり「特別需要」と言ってよくブドウが売れたようです。

私は高校生になりましたが，父が突然亡くなり，母親に「家業を継いでほしい。」と懇願され，ぶどう栽培の道に入りました。農業を始めたとたん，1959 年８月に７号台風に見舞われ，ほとんどの葡萄園が倒れてしまい，近所の人と共同で棚起こしをしました。当時は「棚かけ屋さん」がおりまして，針金を上手に扱ってブドウ園を復旧してくれました。

また肥料かけなどは，鍬で畑全面を耕して行い，草取りは立ちがんなで行い，大変つらい作業でした。時代が進むにつれ，テイラーと呼ばれる耕運機が発売され，今はトラクターや乗用モアの時代になりました。消毒についても硫酸銅と石灰を溶かして，翌日両方の液を混ぜ合わせてボルドー液を作り散布したものです。それも手あおりポンプから動力噴霧器になり，ＳＳ（スピードスプレアー）に発展しております。

1961 年私が二十歳の時，町の指導の下，近所の小父さん達に誘われ，共同のぶどう狩り園に加わりました。当時，「甲斐路」というすばらしいブドウが甲府の植原研究所から発売され，それにあやかって「甲斐路クラブ」と命名しました。バスで来る東京のお客さんにハサミを持たせ，自由に自分でブドウを切り，それを土産に持って帰るという今までの観るだけの遊覧園に比べて大好評で，大勢のお客さんでにぎわいました。ぶどう狩り園の元祖だと自負しております。その後，ブドウ園の下で，食事も提供するようになり，マトンとかラムと言う羊肉を焼いて食べるジン

ギスカン料理で，これまた好評で，時には 200 人近い食事を出すようになり，好評を得，近所の人たちも夕方になると数人が集まって来て，ジンギスカンを食し一升ビンのワインを酌み交わし，ブドウ栽培の話などを語り合い，楽しかったことを記憶しています。

一方，この町には土屋長男（ながお）先生というブドウ作りの大家がおり，Ｘ（えっくす）型自然形整枝と言う剪定の基本を確立し，又土屋式ハウスなども考案され，ハウス栽培も盛んになりました。

農業試験場が発表したジベレリンによるブドウの種なし栽培が広まり，促成栽培のため，他の品種との作業が分配され，みんながハウス栽培に挑戦しましたが，次第に雪害にあったり，ハクビシン等の獣害があったり，年々老齢化でビニールを高いところで作業することが大変になったりで，最近は少なくなりました。メンバーの老齢化に伴い，甲斐路クラブは 1990 年に解散することになりました。

その後私は，友人の紹介により(株)オギノさんの贈答用の発送の仕事を紹介され，甲州，デラ，ネオマス，巨峰，ピオーネなどの発送を請け負いました。この忙しい日々を 20 年過ごした頃，私は人間ドックで胃がんが見つかり，手術をするに至り，オギノの仕事もやめざるを得なくなりました。幸いにして早期発見だったので今も命を長らえております。

最近は 2006 年に登録されたシャインマスカットが，食味良好で皮ごと食べられるということでブームが起きて皆が栽培するようになりました。

昔からの「甲州ぶどう」は，今は醸造用原料が主力になりましたが，当地の醸造家の努力により「甲州ワイン」として輸出するほどになったと聞いております。甲州は作りやすく，白ワイン原料として醸造家と協力し合い，末永く農業遺産の地として，その名に恥じないよう各自がブドウ栽培に心がけたいと想います。最近は後継者不足等で，耕作放棄地等も見られますが，他県からブドウ作り，ワイン作りを目指して来る若者も多く見受けられます。最近私の孫も農業に従事してくれることになり，非常に喜んでいる次第です。私はすでに終活を急がなければならない年齢になってしまいましたが，今の若者は，インターネット，ＳＮＳ，ＡＩ 等の時代になっているようですので，それらを駆使して先人からの農業遺産をなお一層盛んにしてもらえるよう切に希望する次第です。

35. 果樹試験場同期や先輩に支えられてのぶどう作り

保坂　敏彦

高校を卒業して山梨市万力にあった果樹試験場に通い，第 13 期の研修生として 1 年間学ぶことが出来ました。たまたまジベレリンの試験中で，小松試験地の近所の人が，「試験場のデラはもう真っ赤だよ。」と知らせてくれました。時期は早いし，種がないデラウェアです。私は種無しデラブドウの誕生のときに居合わせたのです。

卒業後，今のジベ用カップに近いアイスキャンデーの空の部分をコップ代わりに，自分なりの工夫もして，当時は高かった薬を買って試してみました。そのおかげで町の品評会で 2，3 年連続賞をいただくことができましたが，先輩方の教えを受けながら取り組めたことが大きいと思います。また，農協の指導員さんが熱心に時には厳しく教えてくれたことにも感謝です。岩崎ぶどう研究会の一員として，長野や山形にぶどうの視察にも行き，山形のぶどう畑は山にあって，平地は田んぼという土地利用のちがいも勉強になりました。

当時は娯楽もなかったので，青年会の活動もしました。教育委員会から少年指導員という役も仰せつかり，お不動さんのキャンプ場で町内の小学生６年生が集まって夏休み 2 泊 3 日のキャンプをするお手伝いをしました。

そんな活動をしていたので，教育委員会の推薦で 4 人が 1971 年の日青協沖縄大会に参加できました。ちょうど沖縄返還の 1 年前でした。夜行列車で西鹿児島まで行って，そこから沖縄へ小さな船で向かいました。パスポートを持って行きましたが，入港の許可が下りず，半日くらい待たされました。他県の参加者と一緒に「銀バス」の社長のお話を聞いた後，「山梨の人はいるか？」と聞かれたので「私たちが山梨代表で勝沼から来た。」と言うと「小佐野賢治さんのおかげで今の私がある。」と言われ，夜クラブに招待されました。米兵たちのパーティーで盛り上がっていて「えらいとこに来てしまった。」と思いましたが，占領下の沖縄の現状も理解できました。恩になった人と同郷と言うだけで歓待してくれた沖縄の人の気質に感動した出来事でもありました。沖縄では，アメ

リカ軍が占領していたので，日本人を見下しているような感じも受けました。

読谷村（よみたんそん）に山梨県関係の合同慰霊碑があり，参って線香をあげました。車は右側通行でしたので怖く感じた時もありました。ひめゆりの塔にも行き，戦没者の方々の御霊に祈りを捧げました。大会に参加できたおかげで見聞を広めることができ，感謝しております。

15年ほど前，果樹園芸会の役員さんが「お前，作ってみるか？」と言って穂をくださったので接ぎ木して屋敷の裏に植えたのがシャインマスカットで，今も稼いでくれています。シャインマスカットは初めから評判がよく，今ではなくてはならない品種となっています。

試験場の同期13人とは卒業後から一昨年まで毎月集まっていました。80歳になると毎月は大変なので，2，4，10，12月の年4回になり，善光寺の甲斐テラスのレストランで昼食会を続けています。気の合う仲間との集まりは愉快で，次の日から働くパワーをもらえます。

農薬関係の会社に勤めた同期がいて，果樹の病害虫に安全でよく効く薬が新しく出た時は誰よりも早く情報を教えてもらえて，有難い人脈です。私に「いい薬があったら教えてくれ。」と言ってくる人もいて，農業では知り得た情報を共有することの大切さが分かります。

宮光園の裏　太郎せぎが園内を流れている

36．何年たっても心に残る思い出の数々

石原　正寿

私達の時代の道祖神祭りは，昼間自分たちで竹や廃材を用いて作ったお神輿を夕方大勢で担いで北藤井地区を回り，お賽銭をもらった。みんなでそのお金を分け，次の日の中尾の道祖神祭りに行って出店でほしいものを買うのが楽しみでだった。岩崎地区まで回って，怒られたこともあった。

棒でバットを，ぼろ切れでボールを作り，うちの横の道で三角野球をしたり，ペッタンやチャカ玉（ビー玉）をしたり，毎日のように大勢の子どもたちと遊んだ。４月３日の節句は，男の子ばかりでお重箱を持って山に行って一緒に食べたり，甘酒を飲んだり，楽しかった。

昔はどの家でも動物を飼っていた。うちは牛と豚とヤギを飼った。藤井は急な坂道が多くて大変なので，ぶどうの出荷の時などは牛にリヤカーを引かせて運んだ。豚は大きく育てて売り，ヤギは乳を搾って飲んだ。

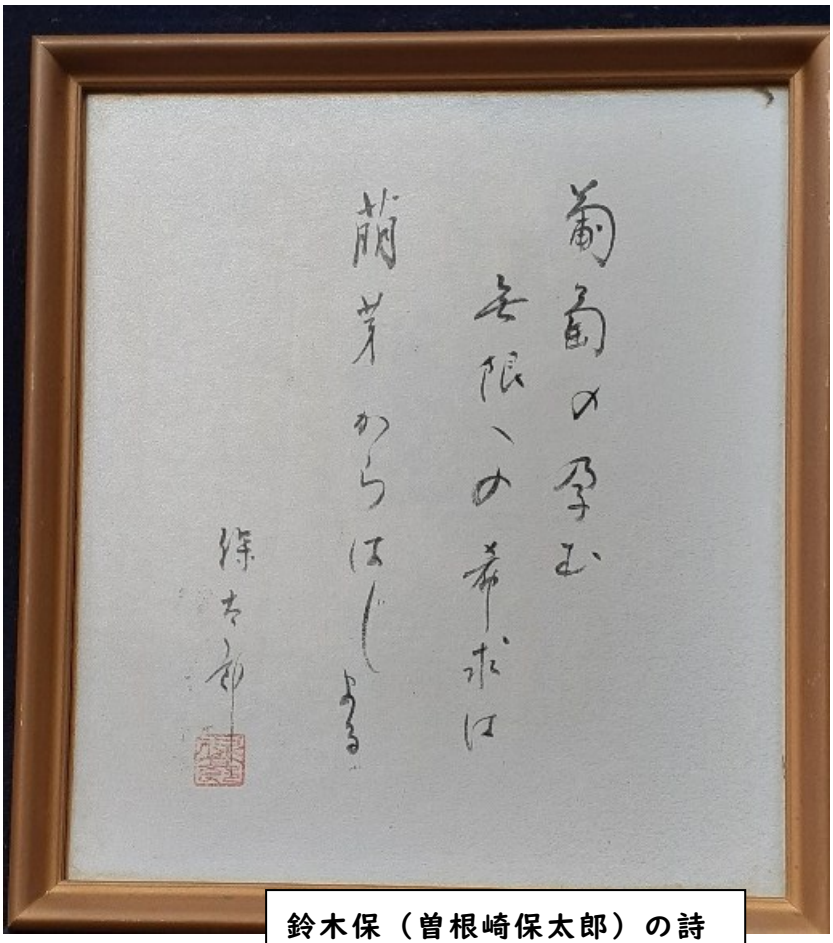
祝地区和楽運動会では藤井は綱引きで毎年優勝。相手はあっという間に引きづられた。区対抗の飛びっこは応援に熱が入った。仮装行列をした時もあって本当に楽しかった。藤井でどんな仮装をしたかは覚えていないが，８区の長塚さんの仮装はユニークで忘れられない。

飯田蛇笏大先生が，夕方境川から自転車で父を訪ねてきたことがあった。しばらくして，勤務校から帰ってきた父（定衛）は，びくびくして丁重だった。あんな親父を見たのは初めてだった。鈴木保さんと三人で勝沼の坂本牛鍋亭に出かけ，宮光園の石碑に刻まれた先生の俳句を松本三良氏に削らせる話し合いをしたようだ。「勝手に建てたのだからどうでも消す。」と言うのは，蛇笏先生が生存中は句碑を建てないとしていたからだ。龍太先生も同じ。

私は阪本晋さんの勧めで父の死後，アジロンの会に入れてもらった。後で思うと誘ってもらったのは有難いことだった。以来 40 年も句を作っていることになる。詩人でもある鈴木保さんはワインが好きで，酔うと面白い話をしてくれた。医大近くの喫茶店で曽根崎保太郎展をした時，案内をいただいたので，行って額に入った詩を何点か購入した。なかなか味のある作品で今も飾っている。アジロンの会では芹澤統一郎さんとワインを飲みながら句について議論することが多かった。生福寺

の芹澤さんのお墓にある句碑の字は，龍太先生の直筆である。

1969 年藤井の消防団に要請があって，４区の小林光明さんの河原の大きなハウスの雪かきに行った。今と違って上が平のハウスで，掻いた所とそうでない所のバランスの問題か分からないが，ダッダッとつぶれることを体験した。小林さんはショックだったと思う。祝地区のハウスはいくつも倒壊した。ハウスの雪かきは難しいし危ない。



鈴木保（曽根崎保太郎）の詩

1988 年，たまたま運が良くてものすごくいい甲州ぶどうが作れた。立ち毛品評会で最優秀賞をもらったのは，この時たった一遍だ。おやじの亡くなった年だった。近所の上矢昭三さんは何回も最優秀賞をもらって，ぶどう作りの名手だった。

1997 年，私が町会議員３期目で議長選挙の最中，山火事が発生したのでその時のことは強く印象に残っている。みんなで深沢へ飛んで行ったが，手の打ちようもなく大火事になった。もう一回の火事も議長の時で，町長と一緒に国の役人や知事さんや消防のところに頭を下げに行った。

1998 年（平成 10 年）１月 15 日成人式の当日，前夜から降り積もった大雪でうちの広い畑が一枚ペチャンコ。しかし，私は国から何人もの大臣が視察に来るのに同行するので，うちの畑どころではなかった。

昔はゴヤゴヤ子どもがいたが，今はさみしい。三森町長の時，祝小がこのままだと複式になると考え，県営住宅を建てたのは良かったと思う。

思い出せば，いろいろあるものだなあ。

37. 岩崎農協での初仕事と直撃台風の怖さ

内藤　弘茂

私の社会人としてのスタートは，農協でした。昭和 32 年６月，20 歳の時のことです。空きの出た職場に紹介してくれる人が農協の場合，地区の農協役員だった様です。４区の農協役員はその時，鈴木保さんと雨宮兵衛さんでした。

現在の肥料かけは秋ですが，その頃は春と秋，年２回肥料の時期がありました。今でこそ配合肥料は肥料会社作成品を農協が仕入れて配達していますが，当時は違いました。

６月の決められた日，初めて職場に行くと，職員とお願いしていたと思われる数人の近所の人たちで，硫安だとか魚粕等の単肥肥料を角スコと言う小さなスコップで，混ぜ合わせて作っていました。肥料係として採用された私は，決められた資料を基に単肥何を何キロと一山にそろえて置き，混ぜ合わせてもらった配合肥料を空き袋に詰めます。作業が終わるとその日単肥を何キロ使って配合肥料が何キロできたか，元帳に記帳します。夜遅くまで時間がかかりましたが，間違いがないように仕上げたものです。その時岩崎農協に営農指導員として活躍していたのが，五区の山村健さんで，後に山梨県の指導員連盟の会長まで務めました。私は，山村健さんが作った配合飼料の成分表に基づいて仕事をしました。父今朝行も当時ハウス栽培を始めたばかりで，「山村さん，山村さん」と言って，いろいろご指導願ったぶどう全般の先生でした。

昭和 30 年代での記憶で一番頭に残っているのは，昭和 34 年８月 14 日の７号台風です。今でも日本に上陸または接近するのは，九州や四国からがほとんどです。しかし，７号は日本の南の海上からきて，静岡から富士山の西を通過して富士川沿いに北上し，あっと言う間に山梨に来た台風です。そんなに大型でもなく中ぐらいの台風が何の障害物もなく山梨県に到達しました。そして私の家の畑の一枚を含め，ぶどう棚を何枚も倒していきました。後日区民総出で棚を立て直す作業に何日もかかりました。ぶどう作りには災害とかは付き物で雹害や雪害も確かに被害は大ですが，台風の被害が一番だと思います。

今は地球温暖化の現象で海水温が高く，日本の南の方で台風が発生することが多くなってきました。西から日本に来る台風は，高い山や上陸することである程度弱められるので，沖縄や九州，四国に比べ，山梨の被害は小さくて済んできました。７号台風と同じコースを大型の台風が来るとしたら，その被害は考えただけでも恐ろしくなります。今後，南から北上する台風は是非ともないことを望みます。

38. 気力と気合いで挑戦し続けて

渡邉　孟

明治生まれの父も母も元気だったので，若いころの自分は家の畑仕事は少ししかせず，ほとんど横須賀市船越町にいました。台湾生まれで，父が帰化の保証人をした方が，大農場観光園を造るということで，逗子の山を開墾し，十町歩の畑に柿 ・栗・梅 ・ぶどう・ みかんなどの木を植えて育てました。

そこで採れた見かけが良くない果物でも喜んで食べる女学生や自然食品店が繁盛しているのを見て，自分たちの住むところも農薬をたくさん使わなくて済む果樹栽培を考えようと思いました。化学肥料や化学合成農薬をなるべく使わなくするには，良い苗木と良い土壌が肝心です。ワイン造りで出るぶどうカスを原料にした堆肥づくりなど 35 年以上取り組んできました。

当農園で生産した果物は，スーパーや大手オーガニック宅配業者に卸しています。その年の天候などにより美味しいのに少々見かけが良くないぶどうができた場合もそれを出荷できる方法として，15 年前から「カットぶどう２～３種詰め合わせ」などをスーパーに卸しています。手間はかかりますが，粒を食べて初めて大きい房を買ってもらえるのです。

それらの販路である神奈川のスーパーや埼玉の地産ストアーは，船越での人脈からの紹介で取引できることになりました。スーパーの会長からは，「商売は売って喜び，買って喜び，これぞ真の商法。」ということを教えてもらいました。

昔からものづくりが好きで，ぶどう作りに生かせるものはないかと思い，友人を誘って県の発明協会勝沼支部を作り，ワイン入浴剤の特許を取りました。いろいろな方面の人脈が増え，製薬会社の研究者たちと付き合ったことは，人生の中で最高の勉強でした。

自分の生産した果物を買ってくれる人との関係を直接に持ちたいとの思いからスーパーや小売業の方との関係が得られ，少しずつ販路が広がり今に至っております。

後継者がいないからと畑を貸してくださる方が増え，渡邊農園は毎年のように広

がって，今になりました。そこで，近くの主婦・友人・若い方・外国の方も働いてくれております。それぞれが持つ個性の素晴らしいところを認めることが大事だと折に触れて伝え，年数回の親睦会も実施しています。

1956 年の青年団解散時，坂野先輩の「ずっとえびす顔でいよう。」と命名したえびす会仲間の無尽は 66 年続きましたが，解散しました。色とりどりに紅葉するぶどう畑の美しい景色を保って，今から若い人達が活気づく明るい未来が見える祝地区にしていって欲しいと願います。

１９６４年３月　石和へ　えびす剪定

39．太平洋戦争が終わって頭に残ること

宮崎　充彦

今年は太平洋戦争が終わって80年の節目です。あちこちでいろいろの催しが行われています。当時の記憶も忘れかけていると思いますが，いまだにはっきり残っていることがあります。それを書いてみたいと思います。

戦争中，日常生活は全てその犠牲になりました。食生活も勿論です。穀類と野菜の混合が普通で，白いご飯など食べたことはありませんでした。そのことをたびたび口にするとお袋はかわいそうに思ったのでしょう。背中にリュックサックを背負い実家（旧右左口村，現在は中道町）に米をもらいに出かけました。

当時のことだから乗り物はなく，笛吹川の土手の道を歩いて行き，米を背負って歩いて帰ってきました。ちょうどその時，私の叔父に召集令状が届き，出征することになったのです。当時としては目出度いということで，親戚関係者や近所を招きお祝いをすることになりました。そして，その米を使ってしまったのです。私はまだ小学５年生だったので，事の経緯は分かりません。やたらすねて怒って，手が付けられなくて困ったそうです。後日お袋はこのことと悔しさをしばしば話してくれました。そしてこのことは，私が太平洋戦争の終始に興味を持つきっかけになったのかもしれないのです。

終戦間近かの山梨県の状況ですが，甲府のことです。警報が鳴ったかどうか定かではありませんでしたが，なにかの合図で家の防空壕へ家族全員で避難しました。防空壕の隙間から甲府盆地の空が真っ赤に，夕やけのように燃え上がっています。しばらく呆然としていたのを覚えています。そして戦況は悪化し，すぐに終戦となりました。

終戦になっても物不足，食糧不足は相変わらずで，ぶどう畑は芋畑に転換して，そこにさつまいもを植えて収穫後は貯蔵庫に入れておきます。

学校も大変でした。貯水池がそばにある休耕地を見つけてきて，肥料かけ草取り等の管理を生徒にさせました。

そんな時代でも今でも頭に焼き付いていることがあります。その当時，八月になると，県下中学校野球大会が地元勝沼地区で行われました。その中の勝沼中学校チームの存在でした。一口で言えば，その雄姿だったと思います。キャッチャーのその大きな身体，その剛毅さ，チームを引っ張っていく馬力投手の冷静さ，サードの華麗さともいえる守備。見るものを圧倒させてくれました。良い思い出をありがとうございました。

甲府空襲後の惨状

行方不明の近所の人を探す捜索隊に加わり甲府へ向かった。甲府に近づくに従って悪臭が段々強くなってきた。一篠町辺りで見た甲府は文字通り焼け野原だった。行く道々に焼けただれて倒れている死体がまだ散乱していた。逃げ遅れて焼夷弾でやられたらしく，人家を離れたところに無残な姿で倒れている人があるかと思うと，哀れなのは親子の死体である。赤ん坊は皮膚をあぶられたらしく，キューピーさんのように火ぶくれになってお母さんの背中で死んでいる姿も見た。刑務所から大田町公園にかけての一帯がひどかったと見えて，焼夷弾の筒が畑の中に突き刺さって林立しているのだ。多いところでは一坪あたり数本はあった。ちなみに，その後判明した資料によると、死者826人、焼失家屋17920戸だった。　　雨宮緑著「一寸の虫」より

40．農業遺産が先々まで引き継がれることが願い

土屋　恒夫

私たちの同級生は,祝小の長い歴史の中でも人数が一番多い学年です。そのうえ，話上手が多いので，同級会の無尽では話を聞く一方です。そろそろ米寿を迎えるので，盛大に祝おうと言って励ましあっています。

私は体力がなくなったため,畑を処分してぶどう作りを辞めました。ぶどうの木を切った後の畑は暑くて，草の生長は早く，草取りが大変でした。

ぶどう棚を架ける職人がいなくて困っています。ぶどう棚をたたむのも困ります。口頭で指図する監督なら私でもできますが，技術者を養成しないと農業遺産の維持は困難です。どんな形の畑でも棚をかけられる技術はすごいものです。

世界農業遺産に認定されると，景観条例のようなもので規制されると困ることも出てくるのではないかと気になります。ぶどう生産者の声が反映されるような条例を願います。

学校の西に中瀬という地区があります。その地区の真ん中を亀腹と言って亀の腹のような横縞模様になった坂道がありました。石垣を下に敷いたような感じで，亀の甲羅のような六角形の石が組み合わさった部分は，まるでたくさんの亀が寝ているように見えました。土だけの部分と交互に組み合わされて，雨で土が流れるのを防いでいました。

今は下岩崎共選所の横を西に下る簡易舗装の坂道になっていますが，コンクリートをはがせば亀腹が姿を現すと思います。私たちが勝中に通う頃は，まだ村中の坂道が亀腹でした。自転車通学だったので，下りの石の部分でガタガタ，土の部分はスー，その繰り返しでした。調査してみる価値のある大事な古道の一つだと思います。

もうひとつ，クランクと言う曲がり角のある道は，馬車で物を運んでいた時代の馬の暴走を食い止めるためのものだという話を聞いたことがあります。

収穫したぶどうを乗せて坂道をリヤカーで上り下りすると粉が落ちるので，傾斜地ではぶどうを大事にゆっくりとリヤカーで引き下ろすのにずり棒を出しました。その棒がブレーキになって下る勢いを制御します。昔は，ぶどうを出荷するため，

勝沼駅までリヤカーを引いて運びました。

終戦後の県下中学校野球大会は，祝小中の先生方の呼びかけのおかげで実施できたと聞いています。祝小の校庭で行われた試合で雨宮緑先生は審判員をしていました。郡内が全般的に強かったけれど，大月の学校はけた違いでした。懐かしい思い出です。

机の引き出しを整理していたら，ハウスデラの立ち毛品評会で賞をいただいた表彰状が出てきて，「俺もよく頑張ったなあ。。」と思いました。その頃は仲間が力を合わせて競争でいいぶどうを作ったおかげです。

春になると甲府盆地にビニールハウスが張られる景色もいずれお茶のみ話になってしまう。秋になると栽培される品種により，赤や黄色のモザイク模様に紅葉したぶどう園もシャインマスカットに農業経営の軸足を移した紅葉の変化を見るのが楽しみです。

「勝沼いまむかし絵物語」 松本良男様が50 年前に書かれた絵です。
御子息松本良様の許可を得て掲載しています。リヤカーにもこのずり棒がブレーキとして使われました。

４１．忘れられない思い出とぶどうへの思い

若林　金蔵

近所で畑の中を一緒に飛び回った友は昭和12,13年生まれの同級生だけで115人，疎開の子も含めるともっと多かった。昭和16年第２次世界大戦勃発，昭和20年終戦と言う激動の子ども時代を過ごしたが，共通の思い出がたくさんある時代だった。和楽運動会も楽しかった。「楽しかったよ。たのしかったね。」祝生まれで祝育ちの妻とその姉たちの話も昔のこと。寄れば同じ話。何度話しても飽きないようだ。

お祭りの時，露天商が蓆を敷いて，そこに萱たんきり・ハスの実をならべて売ってたのを買って食べたことが懐かしい。相興の学校にニッキの木があったが，児童が皮をむいて食べたので木は枯れてしまったという話もある。

子どもの頃，一宮分は桑畑だった。藤井はほとんど葡萄畑だったが，湧き水のせぎがあったので，うちでは一反歩だけ田んぼだった。

田んぼではホタルが飛び，カエルもいた。60年くらい前までお米を作った。田植えは，手伝いのおばさんたちが２，３人来てくれてお祭りみたいににぎやかで，笑い声が響いた。ヤギや牛を飼って，学校から帰ると，草刈が大変だった。牛の尻に乗ったこともある。子どもで手も足も短いから，掴まっていられず滑って落下した。

運動会は大勢だったから，演技時間がかかり，夕方遅くまでして帰りは寒かった。はだしで半袖，短パンの児童 500 人以上の行進はそろっていて素晴らしかったことをよく覚えている。藤井の観覧席の保護者の応援もすごかった。

戦争という暗いトンネルを潜り抜けて，昭和22年４月，６・３制がスタートしたが，落ち着いて勉強する状態ではなかった。そこで，祝中学校の先生たちが呼び掛けて県下中学校招待野球大会を開催された。芹澤明男さんがピッチャーをして，相手が打ったすごく速い球をすっと取った瞬間を

今でも鮮やかに思い出す。優勝旗は本醸の寄付だったが，祝中学校は一度も手にできなかった。

昭和 26 年２月１８日９時ごろ祝中新校舎一棟が火事になった時，本醸の人たちがワインをかけて火を消そうとしてくれたという話を聞いたが本当かどうか分からない。

高校を卒業したばかりの頃，地域の先輩から誘われて，昭和 34 年（1959 年）の７号台風で被害を受けた日川の勝沼側の堤防の修復工事に加わったことがある。４人一組で大きな石を運ぶ力仕事のため一日で肩がやられた。堤防に埋め込む大きい石が足りなくなった時，畑の中の水制を崩して取り出して使ったこともあった。大正３年に竣工した日川水制は流れてきた石を使って作ったのだろうが，いい具合にちゃんと丸く仕上がっていて，全く狂っていなかった。ピラミットと同じ，どうやったんだろうとその技に驚かされた。割った石のようなものはなかったので，ある石を組み合わせたのだろうがすごい。内務省直轄の工事だったので，大勢の人夫とすごい技師たちの仕事。えらいことを昔の人はしたもんだと思った。１本つくるのにも１月はかかったのではないだろうか。

昭和 41 年７月 16 日に第２回勝沼町和楽盆踊り大会が祝小校庭で行われ大勢の人が集まった。木曽節や信玄踊り・岩崎音頭で盆踊りを踊った。打ち上げ花火も上がり，楽しかった。岩崎音頭は，どんな歌だったか思い出せない。誰か覚えているだろうか。

最古の甲州葡萄の木が勝沼の中央園にあるが，手入れが十分でないように見える。大事な木なので，なんとか保存できないかと思う。

醸造用の甲州葡萄の値段は，以前は糖度によって違ったが，今はどんな葡萄でも同じ。いいぶどうは，高く買い取り，来年はもっといいぶどうを作ろうと農家の張り合いになるようにするべきだと思う。

ワインの原産地表記を「山梨県」より細かくし，「祝」とか「勝沼」にしてほしい。一度買って飲んで美味しいと思って，来年もこれにしようという消費者に選ばれる栽培者になりたい。安い輸入ワインを飲み，それがワインの味だと思う飲み手が増えると本当の国産ワインのおいしさが理解されないままになってしまうことを恐れる。

42．勝中の援農体験は，いつまでも残したい学び

天野　一光

私は北巨摩の生まれなので，初めて勝沼駅から見下ろした勝沼の風景は，ぶどう畑の中に家が点在するように見え，「まさにぶどう産地だ。絶景だ。」と思ったものです。

私が勝沼中学校に赴任したのは，ちょうど 50 年前，昭和 49 年です。当時の勝沼町のぶどうはデラウェア種が主でした。このデラぶどうを種無しにするためのジベ処理は短期間に手数が必要でした。

天候不順で本当に困った時は，昭和 40 年のことだそうです。要望を受けた町が勝中に相談をかけ，初めて急遽援農が行われました。農家の要望はもちろんですが，この時の中学生の働き方への高い評価と教育としての意味が熟慮されて，昭和 43 年から継続して行われることとなったという歴史があります。

まず，援農日を決めるのに，各農協の指導員はその年のジベ処理の適期を見極めなくてはならず，大変苦労したようですが，だいたい 5 月 20 日前後になります。

日が決まると数日前に各農協が学校に，必要となる人数をお願いに来ました。当時は，毎年 2 年生を 2 日間参加させると学校は決めていました。その年は約 130 人でした。

私は期間中生徒たちの様子を見回りました。経験のある者とない者半々のようでした。どの農家も大変喜んでくれました。巡回中，新聞記者に会い，「手や服が赤く染まるのは勝沼中学校の生徒たちの勲章である。」と言ってもらいました。この言葉は胸に響きました。

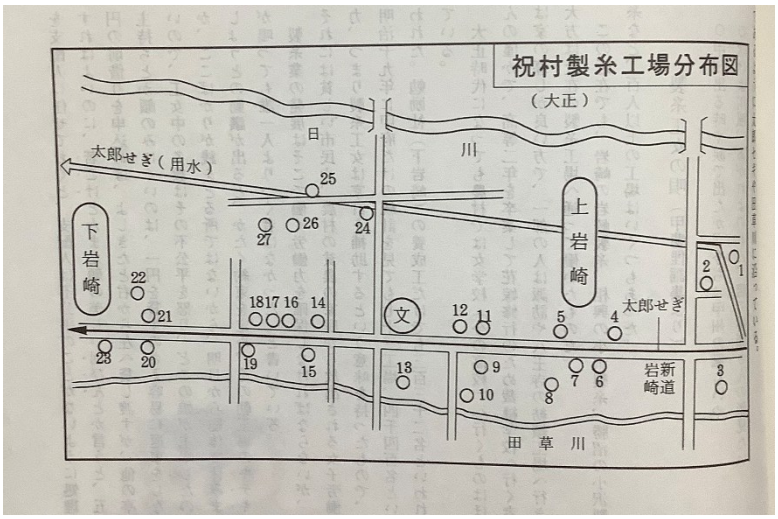
ジベ処理体験後，生徒に感想文を書いてもらいました。「自分がジベ処理したぶどうがその後どのように生長しているか，自分の目で確かめたい。」と言う生徒が多くいました。将来ぶどう作りを本業とする生徒にも違う道に進む生徒にも良い勤労体験学習であると確信しました。また，この体験は生徒たち共通の大事な思い出になるだろうと思いました。

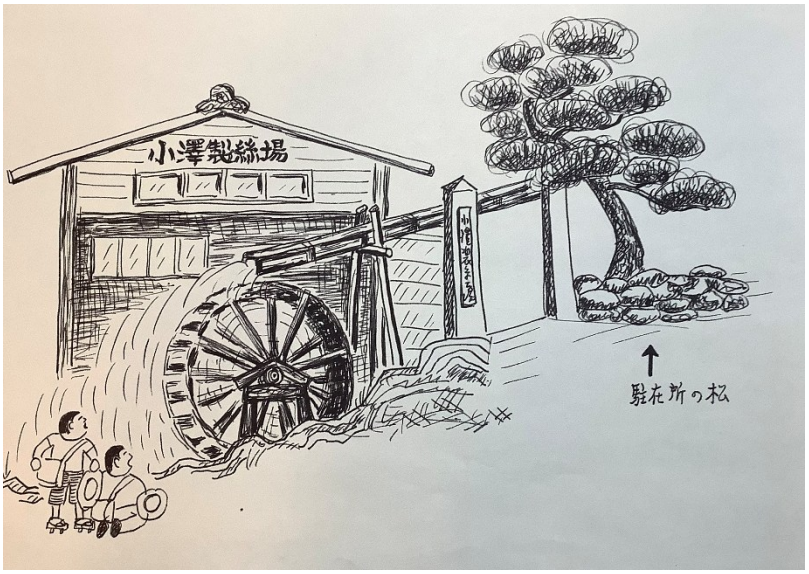
最近はデラを栽培する農家が減少しているので，援農実習は終了してしまうのかと心配しました。雨で病気にかかりやすいぶどう一房一房に傘や袋をかける作業も多くなりました。ジベ同様に農家にとって大変な作業です。

そこで，デラのジベ処理でなく，６月の 13 日 14 日の２日間の援農で農業全般，何でもよいそうですが，ほとんどの農家は傘かけをお願いしたようです。

我が家でも生徒５人をお願いしました。初めは緊張しているように見えましたが，手際よく作業してくれました。予想以上に作業は，はかどり大変助かりました。本地域は，令和４年世界農業遺産に認定されました。進化の激しいぶどう栽培ではありますが，世界農業遺産の名に恥じないよう取り組んでいきたいと思っております。

製糸場 祝村には明治 17 年に 11 戸の製糸業者がいました。大正時代は図のように増えました。文化協会誌「えびかずら」





この絵は勝沼にあった製糸場ですが，天野一光先生の家の近くには，伊藤製糸場があり，絵のような水車が太郎せぎの水で回っていました。宮崎製糸場もそばにありました。

43．大泉葡萄酒の歴史と百年先への願い

前田　澄也

1995 年（平成 7 年）ぶどうの国文化館が開館した時，すぐに見学に行きました。お倉の前で大勢の人達を写した一枚の写真が目に留まりました。屋根には大きな達磨の形と達磨葡萄酒と書いた看板がありました。その写真は設立記念として撮られたもののようです。達磨葡萄酒は，1902 年（明治 35 年）12 月，9 人の発起人により設立された「達磨葡萄酒合資会社」で，私たち「大泉葡萄酒」の前身であります。前左側の樽に座っている人の後ろが発起人の一人の土屋龍憲さんです。

▲明治 35 年、達磨葡萄酒合資会社設立当時の記念写真。 27 人が写っている。

達磨葡萄酒合資会社が生まれた直後に撮った貴重な写真。名前が確認できた人は名前を記入したが、確認できない人が多い。ハッピ姿の中には北巨摩地方から出稼ぎにきていた人もいる。

法被を着た人はどういう人なのか，知りたくて近くの古老に聞き歩きましたが，誰も知りませんでした。たまたま 4 区の志村良栄さんに会ったので，お父さんの栄一さんの様子を聞くと，「床には付いているけど，頭はしっかりしている。」と言うことなので，写真を持って行きました。栄一さんは，床から起き上がり一生懸命に覚えている限りのことを 1 時間かけて教えてくれました。

「これらの人は，北巨摩からの出稼ぎの人で，この時代，日本酒と同じように杜氏がやって来て葡萄酒を絞っていたんだよ。」と言う説明に疑問は解けました。この後何日かしてお亡くなりになったので，お話が聞けたのは，本当に幸運のことだと思いました。「達磨葡萄酒」の頃の醸造場の様子が 1 枚の写真と古老の記憶から明らかになりました。

1955 年（昭和 30 年）私が二十歳の時，前田義文さんのお倉の前で 3 区の鈴木一徳さんから，「このお倉も祝第 3 区共同醸造組合が，醸造をやめてから大分経つ

ので，酢の菌もなくなったかもしれないよ。またやってみないか。」と言われました。私と芹澤修さんと鈴木一德さんの三人で玉割れのデラウェアを持ち寄ってぶどう酒造りに挑戦してみることにしました。昔ながらの作り方で仕込んで２，３か月後，恐る恐る味を見たら，かなり酸化が始まっていて，結局「無理して飲むことはない。」と捨てなくてはなりませんでした。鈴木さんが「このお倉はもうだめだ。」と言っので２人は手を引くことにしました。

私はあきらめきれず，1956 年（昭和 31 年）今度は早川淳さんと古屋久光さんを誘ってビヤ樽１本分仕込んでみました。果樹試験場で学んだ樽などの消毒と砂糖の量を工夫する手法を用いた所，見事に旨い酒ができました。皆喜んで翌年から年々醸造量が増えていくことになりました。

これまでのような共同組合方式は，税法が変わって認められなくなったため，1963 年（昭和 38 年）大泉葡萄酒株式会社に変身することになりました。良質なワインと「酢になったら弁償します。」と言う方針は，引き継がれ，会社安定の基礎となりました。委託ワインは，３，４区だけでなく１区や５区の農家もぶどうを持ち込んでくれました。

葡萄酒づくりでは，古い道具や桶を修理しながら，苦労していました。前田智己さんが区長の時，「新しい村づくり運動」が始まって，各区では共選場建築，道路の拡張など種々の企画を町に提出しました。３区では醸造場の建築を頼むことにしました。田辺国男さんが山梨県知事だったから，県議会は早く通過しましたが，その後知事が代わったらお金はなかなか下りませんでした。その後，かなり難しい手続きを役場の支援で全部クリアして補助金 1000 万円をもらいました。その 1979 年（昭和 54 年）「今後，こうした補助金の申請は出しません。」と言う一筆を書かされ，笑ってしまいました。

大泉が出した「地酒」勝沼産甲州葡萄 100%使用のラベルとＮＨＫ「ワイン山梨のゆくえ」の放送でマスコミが取り上げてくれた効果で，1998 年（平成 10 年の）売り上げは大きく伸びました。赤ワインブームの到来でした。１割が委託ワイン，９割が一般のお客さんです。以後「大泉」は岩崎地区で育てられた高品質のブドウを使って地元向けと都会向けの両方を醸造し製品化しています。現在資産内容は，醸造の設備が整った工場１つ，車２台，リフト１台，ホーロータンク，瓶詰機，ラベル張り機，立桶，OA 機器等まだ細かいものもありますが，次の時代に引き継ぎたいと思います。再出発から 69 年，一時は経営が危ないときもありましたが，「大泉」は生きてきました。社長も従業員も代わっていますが，葡萄農家に支えられて現在があることを忘れてはならないと思います。

個人的に忘れられない思い出は，勝沼ワイン協会の皆さんと外国のワイン作りを視察したことです。ハワイ・カルフォルニア・オーストラリア・ニュージーランド・スペイン・フランス・ドイツ・イタリア・タイ・韓国を旅行した時のアルバムが居間の本棚にズラリと並んでいます。写真を撮ることを楽しんだ結果，私はほとんど写っていませんが，記憶の中では鮮やかに思い出します。これらの写真をぶどうの丘の美術館で展示して下さることになり，1か月660人の参観者に見てもらったのは，有難いことでした。

一つ後悔しているのは，シャトー・メルシャンワイン資料館に2本だけ残っている日本最古のあの濃い緑色のビンのワインと同じものを昭和45年頃，5人で3本飲んでしまったことです。土屋総之助さんが，龍憲さんのお倉をつぶす時出てきたワインを飲んでみようと，私と早川敦さんを誘ってくれたことがあったのです。当時ワイン通の笠原信松さんにも飲んでもらおうと3人でメルシャンに行きました。当時のメルシャン勝沼工場長の笠原さんと試験室長の佐伯保幸さんの5人で，飲んでみると，アルコール分は少なく澄んだ黄金色で，雑味のない旨いワインでした。工場長は「甲州葡萄で作ったワインがこんなにうまくなるんだ。」と感激しました。それから2，3週間後「富士山頂」の映画撮影で山梨に来ていた俳優の本郷淳さんがわざわざ私を訪ねてきて「古いワインを飲ませてほしい。」と言うので，ビンに少し残っていたワインを飲んでもらいました。本郷さんは古い物に趣味があって，京都で百年前の梅干を食べたそうです。醸造家として飲んでみるのは当然ですが，70年経った今でも1本は残しておくべきだったと思います。

記念誌の写真

４４．葡萄と共に生きる

雨宮　正良

私の葡萄づくりは昭和 30 年代から始まる。当時はデラウェアと甲州種だけの栽培だった。冬の笹子おろしは格別の寒さだった。特に上岩崎竹原地区は，四季の変化が大きく，しかも日中と夜間の寒暖差が大きいことから甲州ブドウの最適地とされ珍重された。当時は個人出荷だったので，神田市場に於いても銘柄品として高値で取引された。醸造用としても甲府の老舗サドヤ醸造場から買い付けが来て取引された。

私にとっては順調な滑り出しであったが，初の試練の時がきた。１９５９年（昭和 34 年）８月１４日の７号台風の襲来により一夜にして一帯の甲州葡萄の園が倒伏してしまった。収穫直前でたわわに実っていた葡萄の変わり様を見て涙が出た。その惨憺たる光景に腰骨が折れる思いだった。

組ごとに集まり人海作戦で棚起こしをした。苦労の一週間だった。葡萄の処分後は棚の修復である。親父が棚直しの技術を持っていたので，教わりながら何とか春先までに仕上げることができた。この災害がきっかけとなり棚掛け職人となることとなった。

私の河原の園には，歴史的建造物日川水制が横断している。長さ 100ｍに及ぶものだ。これは明治 40 年の大水害で日川流域の農地の殆どが流されたのを受けて，当時の内務省により整備されたものだ。祝橋からぶどう橋の間に７４基入っている。この圃場は面積約２反歩，砂地で水路があっても水無しのために我が家の冬の風物詩となっている木の葉掃きが始まる。親父と二人弁当を持ち，リヤカーで山に向かう。山の斜面の落ち葉をかき集め大束にして持ち帰る。この仕事が一週間ほど続く。この落ち葉は翌春に全園に敷き詰め，土壌の乾燥と雑草の抑制に役立てた。秋の肥料かけの時に掘り入れをして土中に肥料と共に埋め込み有機物の補給に役立った。

昭和 39 年一反歩のデラ園に竹製のハウス栽培を始める。５年間続いたときに大雪にあい，ハウスをたたむ。

昭和 50 年，親から経営委譲される。まず，手始めとして棚直しを決め，年次計画を立てて工事を始めることとなる。この頃ステンレス線が出始める。早速４番線を支線として使用する。難しい仕事だった。杭は栗の木からコンクリート杭に替わる。道沿いの畑の隅杭２本にステン４番でサゲをつくる。

昭和 54 年，献血 20 回以上で知事表彰を受ける。平成 12 年，日赤から献血 30 回以上を要す。この表彰が一番うれしかった。

45．若者が喜んでぶどう作りに取り組める地域づくりを

芹澤　福子

私の父は，「祝の葡萄の先生」と呼ばれた芹澤世罫（せいきょう）で，昭和 28 年に祝農事研究会を作って初代の会長を務めました。己のぶどう栽培の経験と研究を基として私費でプリントを作成・配付し，会員と共に日々研鑽を積みました。県外への研修にもよく出かけました。それから 10 年を経たころ病を得た父を励まそうと，会員だけでなく勝沼町内の 425 人もの方々が寄付を募り，電話機とりっぱな机を贈ってくださいました。その机と顕彰募金名簿は，『ぶどう作りは人生一生勉強だよ』と私に語りかけてくれます。

私は長女として生まれ，父の背中を見て育ちました。公務員の夫と結婚して３人の子どもに恵まれた私は，父のように高品質の葡萄をと心がけ，89 歳の今に至るまで毎日ぶどう作りにいそしんでおります。

ふりかえると大変なこともありました。毎日毎日雨が降り続くなか，合羽を着ての摘粒は身体の芯まで冷えてしまいました。じりじりと照りつける太陽の下での棚上散布の消毒は，汗が合羽の下を滝のように流れます。「ああ，こんな苦労は子どもたちに絶対させたくない。」と思うこともしばしばでした。

前列左から３番目　芹沢世罫

婿とりの私なら自由に外に出られるだろうということで，若いときから，声を掛けていただいて，初代ぶどう娘・青年団・JA 婦人部・県老人クラブ副会長等いろいろな経験をしました。

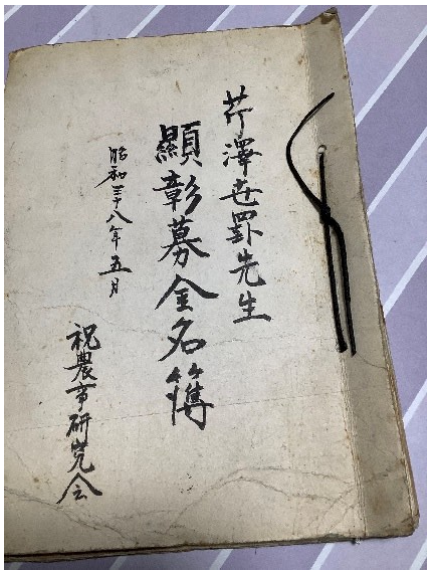
そんな中でも一番の思い出は，３０年前，県の婦人組織リーダー研

修会の発表予定者が急に出られなくなり，急遽私になったことです。営農指導員の山村健さんや金井さんの協力を得て何とか原稿を作成し，県大会で発表したところ，埼玉県関東甲信越地区 JA 婦人部組織リーダー研修会の発表者に選出され，そこでも賞をいただいたのです。

タイトル「葡萄づくりの担い手として」　　以下発表内容

・１９９０年代の輸入の自由化による国内産の消費量低迷
・将来のための多品種の育成と天候不順対策
・甲州葡萄の新たな付加価値探求の必要性
・好評の手書きメッセージ入りの送り箱
・婦人部活動のジャムづくりと農協直売所での販売と夢
・女性だけのぶどう栽培講習会や先進園の視察等の取り組み
・「果樹婦人講座。。」の実現・女性のブドウ栽培の技術の向上と技術交流

後継者不足には，親世代が「勝沼」という産地の名に恥じないぶどう作りに励み，若者が喜んで農業に取り組めるような地域づくりをしていくことが，課題解決の道だと当時考えました。読み返してみて，これは今も変わらないし，コロナ禍を経た今こそ地域住民の連携が重要だと改めて思いました。



４６．気の合う仲間とえびす会

坂野　武富

後継者問題が深刻で，心配になります。法人を作ればいいのでしょうが，栽培農家がバラバラではどうしょうもありません。話をする場が普段からあればいいのですが，渡辺孟さんのようなリーダーが若い年代に見当たりません。今の若い人たちは勤め人が多く，人材はあるのでしょうが，その能力を発揮する共通の場がありません。若い年代は苦労を嫌いますが，私たちの年代は若いときの苦労は買ってでもしたものです。若いときに失敗したり，修羅場をくぐったりすることが，成長には欠かせないものだからです。

青年団の産業部を抜けた世代の有志７，８名の仲間で「えびす会」を設立しました。指導員さんと一緒に，えびす会最初の研修で神奈川に行ってから，岩崎でもブームになり，養豚農家が何軒も誕生しました。私も豚 200 頭を畑に建てた小屋で飼いました。朝４時に起きて餌やり，夕方６時に畑仕事を終えて餌やりをしました。365 日 10 年近く飼育しました。10 頭いれば 10 通りの個性があって，動物は面白いなと思いました。言葉は通じませんが，行動から健康状態など把握できました。親からお金をもらわなくても，養豚で得たお金を家族に生活費として渡せましたが，今思うとよく働いたもんだと思います。子豚を６か月育てて出荷します。業者がトラックで集荷に来ますが，石和の屠殺場に自分で運んだこともあります。働いている人たちは，生き物を扱っているからなのか，親切でした。

ニワトリも飼いました。そのニワトリを高いところから落とすと卵を産むということが本当か,えびす会のみんなで試して大騒ぎ,大人がやんちゃをしたことも懐かしい思い出です。結果は本当でした。

全国農業振興大会には私と渡辺孟さんで行きました。ぶどう専門になってからは，えびす会で世間話をしながら，役に立つ情報をたくさん得ることができました。1956 年から 66 年も続くなんて誰も思っていなかったと思います。多いときは 14,5 人いました。毎年 12 月 4，5 日，大型の自家用車で旅行をして，あっちこっちに行きました。幹事は年の順で，なぜか冬なのに途中アイスを食べることが恒例になりました。年が違っても気楽に話せて，互いを認めて合っていたので，何をし

ても楽しかったです。

今年の２月で90歳になります。うちには１町歩近くの畑がありましたが，１反５畝の畑を法人組織に売りました。先の見通しはつきませんが，ただ甘いだけのぶどうでは，美味しいワインはできないと思います。年配の人たちは，甲州の渋みのある味がなんとも言えないと言います。

北海道の余市を旅行した時ぶどうを作っている畑を見て，温暖化で寒いところでもぶどうができるようになったんだと思いました。しかし，「甲州」が北海道で作れるとは思いません。周りを山に囲まれ，扇状地で水はけと日当たりがいいこの土地の自然風土だから美味しい「甲州」が栽培できるのだと思います。今ある中で，最終的には「甲州」が残るのではないかと考えています。

映画「いつか来た道」1959 年制作。祝地区に映画のロケ隊が来ました。山本富士子やウイーン少年合唱団が出演しました。全盲の少年と合唱団の交流を描いた作品で，祝小学校の児童も校舎から「ワァー」と言って校庭に駆け出すシーンで協力した思い出があります。幼い頃に失明したバイオリニストの少年は和波たかよしで，八ヶ岳サマーコンサートで演奏したり，後進の指導にあたったりしています。1945 年生まれで 79 歳になられます。

文責 齊藤眞由美

４７．勝沼に生きて農業遺産が引き継がれることを願う

笠原　弘子（等々力）

小学校中学年から新聞配達をしました。祝小の廊下に１区から９区までの新聞が並べられていて，私たちは学校まで新聞を取りに行き，40 軒ほどあった配達先に配りました。朝早く起きて配りましたが，えらいとは思わず，当番だからやるもんだと思っていました。

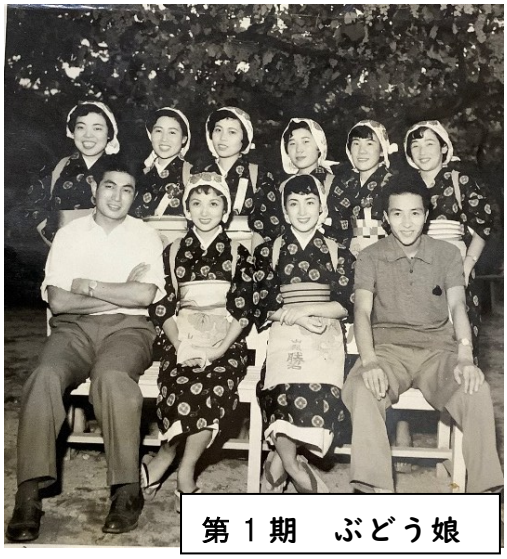
小学校時代は藤井の人たちは弁当持参でしたが，岩崎地区は家まで食べに帰りました。急いで戻る途中，４区のいたずらっこたちが草をしばっておいたところで転ぶと，喜んでいた彼らのことも懐かしく思い出されます。

当時の先生は，高等科に進む生徒に夜補修をしてくださいました。母が薄焼きに甲州葡萄のジャムを挟んだのを弟に持たせ,授業前に夜食として届けてくれたので,一生懸命に勉強しました。しかし空襲警報が鳴ると「早く家へ帰れ。」と言われて帰ったり，宮光園や出征兵士の家の勤労奉仕で草取りに行ったりで，落ち着いて勉強できる環境ではありませんでした。夜は夜で，あの頃電灯は家に一つで，机の上の教科書までコードを長く伸ばして，空襲警報のため傘の上から黒い布をかぶせた電灯で勉強したものです。

祝地区和楽運動会で仮装行列をしたことがありました。ぶどうが安値だった年で，4 区では葡萄のかごを２つ重ねた上に墨で仕切安士（しきりやすし）の戒名を書いた札を立て，二人が天秤棒で担いで葬式のまねごとを行いました。運動会後，専福寺までみんなでわあわあ泣きながら担いで行って葬り，その後みんなで大笑いしたことが強く心に残っています。衣装も凝っていて 5，6 人のお坊さんの衣などは専福寺から借りたと思います。大きな作りもののぶどうやお金を撒くかごや旗も作って，重富さんや緑先生や保さんが考えたのだろうと思います。悔しいことや悲しいことをみんなで笑いに変えて吹き飛ばした当時の大人たちの発想は，本当にすごいと思いました。あんなに面白いと思ったことは他にありません。

金井盛親さんが，金盛園を 1950 年に開園した時，遊覧園が盛るようにと考え，婦人会長さんに頼んでぶどう娘ができそうな娘たちを 20 人位集めました。そのう

ちの一人が私です。私たちは絣の着物を着て，池の周りをレコードの勝沼音頭等に合わせて踊りながら回りました。観光客の皆さんはとても喜んでくれ，新聞記者が取材に来るほどでした。


第１期　ぶどう娘

これを知った町の実力者の皆さんが集まり，1954 年の勝沼ぶどう娘編成とキャラバン隊を企画立案して下さって，私たち 20 名は毎晩学校の講堂で踊りの練習を重ねました。バス「県広報車ひかり号」で山梨県の歌を聞きながら，砂利道を 4 時間かけて東京に行き，甲州ぶどうの宣伝活動を始めました。紺絣に赤襷（たすき），勝沼ぶどう郷と染め抜いた緑の前掛け，姉さんかぶりのいでたちで，「秋の味覚を召しませ。」と 300 貫のぶどうを販売しました。国会議事堂の地下で議員食堂を営んでいた勝沼出身の斉藤新吉さんにみんなお世話になりました。3 泊位して，銀座を歩いたり，新宿御苑や市場，高島屋の屋上で踊りながらぶどうを配ったりして宣伝しました。田舎娘が来るということで大勢見に来てくれました。

名古屋ではぶどう娘の人数は少なかったですが，丸栄デパートの屋上で宣伝活動をしました。山梨出身の歌手と一緒に歌も歌いました。山梨県観光物産展と書いたアドバルーンも上がりました。勝沼出身の人たちが，懐かしく思い大勢来てくださったので，知っている人にはぶどうをただで上げてしまいました。

等々力の笠原家に嫁いだ時，岩崎地区は多くがブドウ園になっていましたが，等々力や東雲地区は田んぼや桑畑が多く，やや遅れてブドウ園になりました。雨宮芳男さんや牧野広実さん，川崎哲也さん，三沢昭吾さんと弟の正良が棚をかけてくれました。今の等々力は平らな広いブドウ畑が多く，観光園もにぎわい，時の移り変わりを感じます。

1985 年（昭和 60 年）雨宮大工さんに家を建ててもらいました。62 年にはシンガポール，マレーシア，中国に夫婦で旅行しました。

1986 年の甲斐路国体で勝沼がバトミントン会場と決まると，一年前からボランティアの募集があったので，応募して 10 人ほどの仲間と楽しく会場周囲の草取りや向山房雄さんの指導の下，花づくりなどをしました。佐藤町長の山に枯れ葉集めに行き，腐葉土づくりもしました。また三枝喜久子さんが主宰する「ぶどうの実」人形劇団に入り，老人施設などの訪問を行いましたが，入所者の皆さんに喜んでもらえたことが何よりうれしかったです。

1993 年 11 月町民によるボーヌ市姉妹都市親善訪問団の募集に応募し選ばれたのは，その時のボランティア活動のおかげだと思います。最初の訪問は，ドイツでワインのオークションをしているところを見ました。フランスのブルゴーニュでは男性の団員は，ワインの競売を見学し，私たちは老人福祉施設を訪問し，指人形劇を披露しました。通訳が説明してくれたので内容も理解してもらえ，喜んでくれました。

62 歳から 68 歳まで民生委員を２期しました。二男一女を育てましたが，昨年夫と６４歳の長男を突然病気で送ることになってしまい本当に力を落としました。家族経営で 90 歳まで専従者として働きましたが，以後は，扶養家族としてできる仕事を頑張っています。ぶどう畑に絵手紙小屋を建て，15 年学び続けた絵手紙作品を飾っています。スマホで友だちと互いに励まし合い，悲しみに耐え，日々を大切に過ごしていこうと思っています。長く生きた者として思うのは，災害に備える準備は大切ということです。食糧の確保や防災グッズは備えておきましょう。私たちは物がない時代を経験しているので，お金があれば，いつでもほしいものが手に入ると思って生活している若い人たちが，その時対応できるか心配です。

甲州市老人クラブ連合会文化賞
受賞作品

286 祝村運動会仮装行列（昭和24年頃か）
葡萄の安値を風刺している

仕切安士の 4 区仮装行列 「写真で見るふるさと勝沼」より
写真 齊藤寿明様所蔵

４８．いつも気の合う仲間と共に

金井　和男

小学校時代は，高等科２年と合わせると 700 人の大所帯だったので，教室はぎゅうぎゅうで大変でした。若い人は兵隊に召集され，先生も足りませんでした。

楽しみはお祭り。８月 25 日の蜂城山のお祭りは，朝早く起きて 88 曲がりを登ってお参りをして下ると出店があり，楽しみでした。８月 28 日のお不動さんのお祭りでは，奥不動まで行って滝や見晴台まで登りました。

計画は自分たちで立て，実行しました。夏休みには最年長の守屋君が笹子に親戚があって道案内してくれるというので，大月までの冒険計画を立てました。朝５時に起き弁当持ちで出かけました。17，８人の男の子集団は，途中の堤で水浴びもしました。帰りは初めて中央線の電車に乗り，勝沼駅で降りて，歩いて帰ってきました。歩くのは少しも苦ではありません。本当に楽しい思い出です。

私は次男坊でしたので親からもらった２反１畝の畑一つで，人生のスタートです。そして畑に家を建て家族を養う暮らしが始まりました。ところが，昭和 44 年の大雪でハウスと共にぶどう棚もつぶれてしまいました。組の皆さんに棚を起こしてもらいましたが，ぶどうの木は全滅でした。それで，昭和 45 年から塩山の蛇の目ミシンのセールスとして 14 年働きましたが，ミシンを買ってくれる人が減って職を失いました。その後は石和の車の部品工場で７年働きました。その後亡くなった同級生の郷土の山地２反５畝を預かって 25 年間作らせてもらいましたがもう山地はえらいので返しました。その後は，組の人に頼まれた２反歩が加わり，今は４反歩耕作しています。

一番思い出深いのは昭和 20 年に始まった祝地区の青年団の活動です。貨物（かぶつ）がでかい者が団長に選ばれるのが常でしたが，貨物の小さい私が団長に押され，第５代祝青年団団長を務めました。

合併して勝沼全体になったのは昭和 29 年でしたが，各支部青年団の役員は気の合う仲間がそろいました。ハウス栽培の手伝いっこ等をしましたが，昭和 31 年で解散になりました。しかし，このままではさみしいからと言って，毎月無尽をしたり，秋には毎年バスで家族ぐるみで旅行したりする会に発展させました。31 の数字

を逆読みしてひとみ会と名付け，長く友情を深めましたが，68 年経った今の会員は４人になってしまいました。

「かおり」での組の同年配の無尽も長く続きましたし，ゲートボールも 20 年やりました。どちらも気がそろっていましたが，何人も鬼籍に入り続けられなくなってしまいました。

組の旅行は 48 年続いていたのに，コロナで中断され残念なことです。人と人の深いつながりを築くには年月がかかるものです。私は友だちに恵まれて幸せな人生だと思っています。

金井和男様のご尊父金井駒男様と同級生というご縁で，ここに大島義愛氏について記す。

大島義愛（よしちか）様のこと

明治 30 年生まれ。父義命は，神奈川県中井町出身。母は，下岩崎の高野積成の子どもの愛子。つまり義愛は積成の孫。積成と義愛は，二人ともわずか7歳で父親を亡くしている。大島家のお墓は，下岩崎の生福寺にある。後にその生福寺が老朽化したのを建て替えたのが，義愛氏。本堂前左側に頌徳像が建てられている。

大島義愛は4年生まで祝小で学び，その後は東京で暮らす。12 歳で中野喜三郎氏の経営する中野組に入り働く。働きながら 17 歳で築地工手学校を卒業する。36 歳の時独立。昭和 17 年 45 歳の時（株)中野組の社長に就任。昭和 35 年東京建設業協会会長，昭和 39 年全国建設業協会会長，昭和 47 年（株)中野組取締役会長に就任，昭和 50 年 10 月勝沼町名誉町民の称号を贈られる。ご自身が苦学したので，いくつもの奨学金を開設する。昭和 58 年 6 月 86 才をもってご逝去。お墓は，高野山にある。

祝小 100 周年記念事業の記念誌に「思い出の記」を書いてくださっている中で，『聊かお役に立ち得ることを欣快に思っている。（途中略）願わくは，百周年記念を契機として，関係者打って一丸となり，次の百年に堂々の前進をしたいものである。』と書かれている。

文責　市川史子

写真は「大島義愛　回想録」より

49．ウイルスフリー苗の普及とシルクロードの旅で学んだ葡萄栽培

内田　利房

昭和 40 年代からぶどうの色着きが悪く，糖度が低いという問題が起きました。出荷時糖度を用いて判別していましたが，原因を究明しようという対策は行われていませんでした。日本でも平井篤造著「ウイルスと植物」が昭和 47 年に出版され，ぶどうのウイルスも研究されていましたので，私たちの勉強不足とも言えると思います。

カルフォルニア大学のゴヒン教授が著したアメリカのぶどうの教科書に，ウイルスフリーの苗木のことが書いてあったので，昭和５３年アメリカまで行き，先生を訪ねて教えを請い，ウイルスが原因の病気だと確信を得ました。帰国して佐藤町長に「ウイルスフリーの苗木を輸入すべき。」と進言しました。農協の組合長の山田五郎衛さんの「やって見る必要がある。」という後押しもあり，私の考えを理解してもらうことができました。そしてアメリカからウイルスフリーの苗木を輸入し，３年間の経過観察後，営農指導員の山村健さんや土屋長男先生を先頭に農協の裏でウイルスフリーの苗を２万本育てました。輸入苗木の台木に地元の優良穂木を接ぎ木して，生産者に配布することができました。しかし，コロナウイルスと同じでウイルスは変化し続けるので，約 40 年経ちましたが，まだ本当に解決しているとは言えない状態だと思っています。

1986 年９月勝沼町優良葡萄研究会から，３区の飯島喜男さんと志村富男さんと私の３人が新疆ウイグル自治区トルファン市に訪問研修生として行くことになりました。志村さんは，後に笛吹市の葡萄研究所を運営し，別名ブラックシャインマスカットとよばれる「富士の輝き」を「シャインマスカット」と「ウインク」から作りだします。佐藤町長から陳実先生への手紙を託され，ぶどうを通した友

好親善交流が始まりました。シルクロードのトルファン市の人たちとは，心が通います。DNA 鑑定で甲州の元は和田紅（ホータンホン）とされたので調べました。その後も私はトルファンに何度も行き，いろいろなぶどうを調べました。「虞美人」と言うぶどうは，美しくて美味しいです。北海道の池田町などから職員が研修に来ていて，甲州市も学び続ける必要を感じます。

持ち帰ったぶどうとの交配を家でも試みています。かの地の薬用ぶどうを勝沼で広めてみたいとも思っています。また温暖化対策として，鳴沢のゴルフ場でワイン用のシラー（赤）やリスリング（白）の苗木を育てています。令和 6 年に鳴沢産ブドウのワインが初めてできました。その鳴沢ゴルフクラブに 40 年間ぶどうの注文をいただいていた関係で，3 年前から羽田空港にぶどうのアンテナショップを出すことができました。また，農薬の検査が厳しいですが，台湾へぶどうを輸出しています。

一区新道組の半数は，ブドウ栽培をやめています。このまま行くと後継者不足と人手不足は，もっと大問題になるでしょう。今後は，1 次産業の 6 次産業化をはかり，一層リノヴェーションが必要になります。つまり生産だけでなく，流通・販売などを農家が行い，農業のブランド化，消費者への直接販売をするといった経営の多角化を考えるしかないと思います。また，原種と原種を掛け合わせハイブリッド品種を作り，肥料が少なくて済むとか，病気が少ないなどの特徴を持つぶどうを創り出すことも大事になると思います。

５０.「なつかし勝沼５０年前」の絵と文

松本　良男様

松本良男様は，110 年前前勝沼町上町に生まれました。成人してからは，大田区で写真店を住んでいらっしゃいました。60 歳の時，勝沼の広報に 1975 年２月号から毎月投稿してくださり，反響を呼びました。最後は，1976 年５月号でした。

今回は祝にも関係する絵と思い出を６枚貸していただきました。100 年と言う時間の流れの中に大切にしまわれていた思い出を共に温め直すことができます。「時代の流れと共に，私たち町民の生活様式や町の様子も，50 年前とは一変したと言ってもよいでしょう。松本さんのふるさとを想う気持ちが，50 年前の勝沼町の様子を断片的ではありますが，非常に克明にとらえており，多数の人々から好評をいただきました。」と当時の広報担当者が書いています。

上岩崎にも百歳を超えられてなお，お元気な方もいらっしゃるので，お生まれになった頃は，これらの絵のような，思い出のようなことを同じように体験されたと思うと，勝沼って素敵だなと思えます。戦争で亡くなった友をいつも思い出し，絵に書きこまれたお気持ちは，胸にしみます。平和をみんなで守り，創っていきたいと心から思います。50 年前と今度，合わせて２度も松本様の優しいお気持ちに慰められました。短期間で，あわただしく取り組んだ冊子に良男様の絵と文と心が添えられたことで，助けられました。

松本良男様，松本良様本当にありがとうございました。

お写真は昭和 58 年４月，松本良男様 68 歳の時に写したものだそうです。

2002 年（平成 14 年）７月，87 歳でご逝去されました。

祝地区農業遺産関係の歴史

西暦	元号	出来事
1868	明治　1	明治維新 雨宮彦兵衛　祝村戸長　　柏尾坂の戦い
1869	明治　2	
1870	明治　3	
1871	明治　4	散髪脱刀令　　甲府県を廃して山梨県となる
1872	明治　5	雨宮作左エ門針金棚創案　　アメリカでナイアガラ育成　　全国戸籍調査
1873	明治　6	藤村紫朗県令着任　　岩崎学校開設(蓮華寺)　雨宮作左衛門針金を使ったぶどう棚づくりを始める
1874	明治　7	高野積成県下で初の３６人繰り製糸工場を完成　　雨宮彦兵衛製糸工場を建てる
1875	明治　8	上岩崎村下岩崎村・藤井村が合併し祝村となる
1876	明治　9	祝学校藤村式校舎竣工
1877	明治　１０	**大日本山梨葡萄酒会社７月設立　10月10日高野正誠・土屋助次郎（竜憲）フランス留学**　　県立葡萄酒醸造所建設
1878	明治　１１	高野積成がイザベラ・アジロンタック等４種の西洋苗購入し、試験栽培を行う
1879	明治　１２	雨宮作左衛門針線棚考案　**５月2人の留学生帰国**
1880	明治　１３	６月明治天皇巡幸　　高野積成・雨宮彦兵衛が興業社設立
1881	明治　１４	
1882	明治　１５	雨宮作左衛門が第一葡萄酒工場を設立
1883	明治　１６	
1884	明治　１７	祝村相興村は連合役所を設置
1885	明治　１８	ボルドー液の消毒試験　　**このころ養蚕・製糸業盛ん**　祝村の製糸業者　内田作右衛門・堀田藤右衛門・飯島喜右衛門・鈴木安太郎・鈴木新五さ衛門・高野積成・雨宮彦兵衛・内田与左衛門 牛奥の雨宮竹甫デラウエアを植える　　小沢善兵衛がアジロンダックをアメリカより持ち帰る
1886	明治　１９	大日本帝国憲法発布　大日本山梨葡萄酒会社解散　　祝村葡萄酒会社を土屋竜憲・保幸兄弟と宮崎光太郎が設立 デラウェアー苗山梨に来る
1887	明治　２０	白渋病発生
1888	明治　２１	土屋竜憲と宮崎光太郎日本橋に甲斐産商店を開業
1889	明治　２２	小沢善兵衛妙義山中腹にぶどう園を拓く　デラウェア　ナイヤガラ　コンコード　イサベラ
1890	明治　２３	土屋はマルキ葡萄酒　４月宮崎は大黒天印の甲斐産葡萄酒　販売　　５月大村治作が丸藤葡萄酒工業の前身を設立 **高野正誠「葡萄三説」を出版**
1891	明治　２４	**甲府ー勝沼間に馬車鉄道**　高野正誠と高野積成等は葡萄酒用西洋種栽培の普及に努める
1892	明治　２５	宮崎光太郎は大国葡萄酒株式会社を創設、宮崎第一醸造場を造る　　新潟の川上善兵衛は土屋竜憲から醸造を学ぶ
1893	明治　２６	
1894	明治　２７	日清戦争　　宮崎光太郎宮光園を開園　　**高野正誠が高野醸造を興す**
1895	明治　２８	
1896	明治　２９	
1897	明治　３０	この頃針金棚が発明される
1898	明治　３１	**勝沼甲府間に山梨馬車鉄道の営業開始**
1899	明治　３２	甲州ブドウのうどんこ病、堀正太郎博士のボルドー液による防除提唱 葡萄酒飲用期成同盟会を高野積成が発足 宮崎光太郎余ったぶどうも買い上げ醸造増産で農家を守る
1900	明治　３３	
1901	明治　３４	県立第２中学校（日川高校)が開校
1902	明治　３５	
1903	明治　３６	**甲府ー東京間に鉄道開通　　（勝沼駅なく塩山駅を利用）**
1904	明治　３７	日露戦争がワインブームを呼ぶ　　宮崎光太郎第二醸造場を造る
1905	明治　３８	
1906	明治　３９	
1907	明治　４０	義務教育６年制　　**８月日川大水害畑流失　　１２月生糸暴落**
1908	明治　４１	
1909	明治　４２	**生糸生産輸出世界一**　神沢技師フィロキセラ確認
1910	明治　４３	**日川大水害**　　勝沼駅が造られる

1911	明治　４４	**広瀬鶴五郎の意見を基に日川水制、施工　　中央線全線開通**
1912	明治45 大正１	
1913	大正２	**勝沼駅新設　　葡萄の冷蔵庫（日川南の竹林の崖に）**
1914	大正３	**10月勝沼駅から日本ぶどう各地に**　　フィロキセラ対策用台木　アメリカより導入
1915	大正４	**赤木正雄の計画による勝沼堰堤着工**
1916	大正５	
1917	大正６	**祝橋コンクリートアーチ橋に架け替え　　勝沼堰堤竣工**
1918	大正７	
1919	大正８	ぶどうの価格暴落～１０年頃　　一般乗合自動車運行開始
1920	大正９	
1921	大正１０	
1922	大正１１	皇太子雨宮ブドウ園見物
1923	大正１２	関東大震災
1924	大正１３	祝小校歌制定　石原盛平作詞　三椚謙一作曲
1925	大正１４	
1926	大正15 昭和１	
1927	昭和２	養蚕糸価暴落、葡萄京浜地方不景気にて販路なし、稲作天候不順平年作下　　下岩崎の秋山要らはぶどう栽培の小作人として抵抗運動を起こす　黒とう病蔓延
1928	昭和３	初の普通選挙が行われる　　ラジオ体操始まる
1929	昭和４	この頃から遊覧客ブドウ園に
1930	昭和５	**生糸暴落・生糸業者倒産相次ぐ**
1931	昭和６	**中央線甲府駅～八王子まで電化　　祝橋完成**
1932	昭和７	土屋長男ネオマスカット種の栽培を始める
1933	昭和８	自家用ぶどう酒課税に反対　雹害2度　祝約６７町　　干ばつ被害　　根津嘉一郎全県下小学校にピアノを贈る
1934	昭和９	
1935	昭和１０	9月豪雨被害
1936	昭和１１	凍寒害　大被害
1937	昭和１２	日中戦争始まる
1938	昭和１３	国家総動員法発布　　新潟岩の原から導入したベリーAが栽培され始める
1939	昭和１４	個人醸造の整備統合　　自動車は木炭車となる
1940	昭和１５	国民徴用令　日独伊三国同盟　土屋竜憲死去（８１歳）　マスカットベーリーA川上善兵衛育成発表
1941	昭和１６	**太平洋戦争開戦**　　岩崎醸造設立　　政府の命により製糸工場閉鎖　田口、芹沢、三沢、伊藤、宮崎、山下、有賀、飯島、雨宮の９工場
1942	昭和１７	県は観光ブドウ園の廃止を通告　下岩崎１６、上岩崎１１、藤井３のワイン工場で酒石酸生産　石原田・祝４区葡萄酒設立
1943	昭和１８	学童疎開始まる
1944	昭和１９	米軍機の本土空襲激化　　学徒勤労動員　日本連抽株式会社　上岩崎に創立　勝沼酒石酸工業組合設立
1945	昭和２０	甲府大空襲　　8月太平洋戦争終戦　巨峰大井上康育成発表　１０月台風被害甚大　農地改革指令
1946	昭和２１	中央線勝沼駅発足　　**農地改革～昭和２５年**
1947	昭和２２	日本国憲法公布　　６・３制実施　**祝中学校が呼びかけ、県下４０チームによる中学校招待野球大会を開催**
1948	昭和２３	天皇宮光園　**岩崎農協設立**　　麻屋葡萄酒設立　全国果実酒品評会で岩崎共同園組が白ブドウ酒5位　赤ブドウ酒1位となる
1949	昭和２４	
1950	昭和２５	自動車が急速に普及　　勝沼診療所設置　　金盛園開園　ネオマスカット急速に広がる
1951	昭和２６	**雹害を経て養蚕から果樹栽培へ**　　７月農業委員会創立
1952	昭和２７	スチューベン農林省導入 NHKtテレビ放送開始
1953	昭和２８	勝沼診療所が勝沼病院となる　　甲斐古園開園
1954	昭和２９	４月新町発足（１町３村）　　**勝沼文化協会設立　ぶどう娘編成キャラバン隊東京・名古屋へ**
1955	昭和３０	新笹子トンネル工事開始

1956	昭和３１	勝沼町農業共済組合発足
1957	昭和３２	祝簡易水道完成　　ピオーネ井川秀雄作出命名土屋長男　　ネオマスカット発表　　古柏園開園
1958	昭和３３	新笹子トンネル開通　　台風　２１号２２号で風水害
1959	昭和３４	自由貿易　**7月県果樹分場でジベレリン処理に成功　　ぶどうのビニールハウス栽培に成功　　8月台風7号が来襲　　9月台風15号（伊勢湾台風）が来襲、大災害　強い棚・高級品種へ**
1960	昭和３５	台風１１号被害甚大
1961	昭和３６	8月県農協合併推進委員会が発足　**ジベレリン処理による種無しデラの栽培に成功** **甲斐路クラブ棚下でのブドウ狩り園を勝沼で初開園**
1962	昭和３７	ぶどう狩り園コンクール開始　　３月中旬低温　梅雨雨量多い　夏の干害　３度の台風　ぶどうの生産量急減
1963	昭和３８	観光協会発足　　干しぶどう対策生産者大会開く　国鉄臨時小荷物取扱所が役場前で１０月開設～
1964	昭和３９	東京オリンピック聖火町内を走る
1965	昭和４０	釜無川右岸土地改良事業着工　　8月上岩崎雹害　40年～50年代ワインブーム　　**勝沼中学校生徒によるジベ処理体験**
1966	昭和４１	祝地区にコールドチェン完成　　**８月祝小学校の校庭で勝沼町盆踊り大会**
1967	昭和４２	デラブドウの種無し処理剤が逆効果を生んだジベ騒動
1968	昭和４３	デラぶどう玉割れ　凍害藤井地区中心　７０ha　雹害　雪害　　夏中の低温　日照不足　長雨　**勝沼中学校生徒によるジベ処理体験正式に始まる**
1969	昭和４４	中央道富士吉田線開通　果実出荷一本化　**雪害**一ハウスを土屋式からパイプ式へ　　御坂トンネル完成
1970	昭和４５	中央線複線化
1971	昭和４６	
1972	昭和４７	**観光キャラバン後楽園球場で宣伝活動**　ぶどう祭り実行委員会によって実施
1973	昭和４８	**勝沼ぶどう郷民宿組合発足　　勝沼に岩崎荘他3軒**
1974	昭和４９	広瀬ダム完成　　県立ワインセンター完成
1975	昭和５０	老人センターに温泉大浴場完成　　高尾育種登録
1976	昭和５１	6月降雹　　フランスのボーヌ市と姉妹都市締結
1977	昭和５２	**中央道大月ー勝沼間開通　　勝沼バイパス開通　　ワイン百年記念**
1978	昭和５３	岩崎農協直売所バイパス沿いにオープン　　**祝小学校新築完成**
1979	昭和５４	勝沼町果樹振興会発足　　町産ワイン原産地認定条例制定
1980	昭和５５	ワインセミナー開催
1981	昭和５６	**アメリカ産の台木輸入**　　レッドクイーン種苗登録武田万平
1982	昭和５７	8月3日・9月13日ダブル台風禍　　**中央道全線開通**　畑地灌漑完全整備　　**優良苗木配布**　新祝橋開通 **勝沼町果樹振興会婦人部発足**
1983	昭和５８	前田友平　ペピーノ栽培凍害対策として試みた　　新町立診療所完成
1984	昭和５９	**10月国体**　　凍干害　祝地区45ha　　**岩崎果樹研究会発足（畑野力会長）**　　認定ワイン誕生
1985	昭和６０	ぶどうの丘にワイン地下庫完成　　トークマラソン大会開催　　新祝橋開通　　キングデラ・藤稔品種登録 **マンズワイン事件**
1986	昭和６１	2月大雪　　**１０月国体　勝沼でバドミントン競技会が開かれる**
1987	昭和６２	**かつぬまワインクラブ発足**　　ロザリオビアンコ品種登録
1988	昭和６３	ぶどうの価格下がっている　　露地デラ種　玉割れ被害　夏の長雨被害　　東京のアンテナショップオープン 釈迦堂遺跡博物館完成

1989	昭和６４ 平成１	**シンボルマーク制定**　晴天続きで観光客例年より多いが、客引きはイメージダウン
1990	平成２	ぶどう娘の衣装がヨーロッパ風に
1991	平成３	8月9月台風　雨多く甲斐路に被害　長寿者祝金支給制度始まる　フルーツサミットかつぬま９１開催　安芸クイーン品種改良
1992	平成４	フルーツライン着工
1993	平成５	**４月深沢地区山林火災**　勝沼駅が勝沼ぶどう郷駅に改名健康福祉センター竣工
1994	平成６	甲州種ぶどう緊急対策事業でワイン全戸配布
1995	平成７	認定農業者制度開始　ぶどうの国文化館会館　　④小学校のプールの全面改修
1996	平成８	皇太子殿下と雅子妃殿下ぶどうの丘視察　ぶどうの国資料館開館
1997	平成９	**3月深沢地区山林火災75ヘクタール消失**
1998	平成１０	**1月雪害５５ｃｍ積雪で農業被害**　　醸造用品種転作希望農家に醸造用苗配付 勝沼ぶどう郷駅が関東の駅百選に選ばれる
1999	平成１１	**中学生のボーヌ市交流派遣事業が始まる　　4小学校にパソコン設置**
2000	平成１２	ぶどうの丘宿泊棟・天空の湯完成　　**中国のトルファン市と友好都市を結ぶ**祝小学校耐震工事改修
2001	平成１３	７月雹害農家に薬剤費補助　　祝小学校に肯定散水施設整備
2002	平成１４	**草生栽培の普及に取り組む　　学校週5日制実施**
2003	平成１５	
2004	平成１６	
2005	平成１７	11月1日勝沼町廃止甲州市に
2006	平成１８	**シャインマスカット品種登録**
2007	平成１９	
2008	平成２０	
2009	平成２１	
2010	平成２２	
2011	平成２３	３月東日本大震災
2012	平成２４	
2013	平成２５	２月中央自動車道笹子トンネル全面開通　　富士山世界文化遺産登録
2014	平成２６	**2月大雪のためビニールハウス倒壊**　　甲州ワインによる乾杯の推進等普及促進に関する条例制定
2015	平成２７	ぶどうの価格暴落～１０年の単価が高くなってきた
2016	平成２８	
2017	平成２９	3月日本農業遺産に認定　**深沢地区山林火災75ヘクタール消失**
2018	平成３０	**果実酒等の製法品質表示基準**
2019	平成３１ 令和１	台風２４号
2020	令和２	6月甲州市日本遺産に認定　　**１月国内新型コロナ感染者確認**　７月長雨晩腐病　黒系ぶどう被害　８月の猛暑日過去最多の２２日
2021	令和３	東京オリンピック聖火町内を走る
2022	令和４	**7月甲州市、山梨市　笛吹市が世界農業遺産に認定される**
2023	令和５	
2024	令和６	１月能登半島地震　　**中学生の援農かさかけになった**
2025	令和７	
		お話に出てきた出来事は**太字**です。
		参照　ぶどうの国文化館配布資料　勝沼ぶどう物語り（年表）広報勝沼　私たちの勝沼町（副読本）等

編　集　後　記

祝地区の世界農業遺産に纏わるお話を集め，冊子にすることで，50 年先，100 年先の人々に今ここに生きる人々のありのままの姿を届けたられると考えました。また，思い出の中に登場する先人たちの功績も歴史に刻みたい思いが強く心にありました。これこそが，「祝」の人々のこの世界農業遺産認定を祝うに最もふさわしい取り組みだと思ったからです。そのため，できるだけ多くの人々に,一人ひとりその特別な思い出を語ってほしかったのです。しかし，取り組み期間が 9 月から翌 3 月までの半年間，そのうち 9,10 月は収穫期で，結局 50 人ほどのお話しか集めることができませんでした。私たちの父母の時代は，祝小学校の百年誌「えびかずら」や文化協会誌「えびかずら」,「写真で見るふるさと勝沼」等を発行し，子どもも大人も地域の歴史を学ぶことができました。今は，勝沼図書館が意欲的に取り組んで下さっています。また，映像で CATV が記録を遺してくださっていますが，住民自身が遺す取り組みは大事だと思います。

お話を伺った方が次の人に繋いでくださったように，人と人が繋がって強い絆ができ，次の時代に新たな遺産が引き継がれることを心より願っています。その願いは，鈴木八束様デザインの表紙「一粒萬宝」の言葉に込められました。

また，勝沼町広報に 50 年前，松本良男様が勝沼で幼少期を過ごした思い出を絵と文で寄稿された作品を，御子息松本良様のご厚意でこの冊子に使わせていただきました。今年はちょうど昭和百年ですので，戦争を挟んだ 100 年の時を，読む者の多くが思い描けることに感謝いたします。

最後にご多忙中にも関わらず，心温まるお話や原稿・資料を寄せてくださった方々に厚く御礼を申し上げ，編集後記といたします。

市川　史子

発行日/令和 7 年 3 月 31 日

発行者/祝地域世界農業遺産に纏わる今昔話承継会

編集責任者/市川史子　　印刷/有限会社天野印刷所　甲州市勝沼町勝沼３１１１